

夜廻 振り返ってはなら
ない夜の道

はるばーど

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

それと出会ってしまったら・・・

絶対に振り返ってはならない。なぜなら・・・

アルビノにより髪が白く染まったちよつと変わった性格の女子高生が夜の町を少女とともに徘徊する不思議なお話です。

ARKからはGenesisから出張させます。しかし、世界観をぶち壊したくない

のであまり出番はないです。あまり期待はしないでください。

投稿主はかなり気分屋なので不定期更新です。ご了承下さい。後、お気に入り登録や感想をたくさん書いてくだされば、モチベーションが上がって投稿頻度が上がると思います。気軽に書いて下さって構いませんので、よかつたら是非ともお願いします。

※タイトル変更しました。

【@piyoberd5642】↑私のお知らせTwitter

小説下手くそですが、面白い話を創るために日々努力中です。読者の方からの意見も聞きたいので、どなたでも気軽に声掛け下さい。

目次

夜廻編

一章 黄昏

二章 逢魔時

三章 宵の口

四章 闇夜

五章 夜半

六章 夜更け

七章 丑三つ時

漆章 丑三つ時

終章 夜明け

150

そして始まり

125

108

88

66

50

28

12

1

壹章 朧夜

貳章 夢

參章 暗黒

肆章 回廊

伍章 まやかし

終章 幻魔

番外編

夜明

267

250

227

217

195

182

173

朧夜廻編

夜廻編

一章 黄昏

気付いたときには両親など消えていた。もう私は・・・生きていると言えるのでしようか。

私は、『神谷 ルキア』。この名もない町に引越して来た、イカれた女子高校生です。なぜ自分で『イカれた』なんて言えるのか。それは私は自傷によりなんども自殺を試みたからです。理由はというと私の家は、父がいません。それに母も不慮の事故により植物状態になってしまったので叔父の家に預けられました。しかし、叔父さんは毎日仕事から怒って帰ってきます。なので、居候の私はいつも虐待を受けています。

叔父さんは仲が悪かった父が死んだことを良いことに私に怒りをぶつけてきている。とてもつらい。何故私が殴られなければならないのか、何故逃れるため自殺を試みる度に怒鳴られてクローゼットに閉じ込められなければならないのか。もう楽になりたい・・・。私はわからないのです。学校にも頼ることができません。なぜなら私には・・・

相談できる友達も先生もいないのです。・・・暴力を受け、食事を抜かれたため体が青白く痩せ細り、生まれつき生えているアルビノで白く染まった私の髪。そして、色が灯っていない虚の瞳。

これらが原因で私はいじめに会っていました。同級生や先生にまで不気味に思われ、人が私の周りから遠ざかって行きました。何処に行っても安全ではない。自分は何故こんなにも恵まれていないのか、考えても答えが浮かばなかった。先生は全員性格があまり良くなかった。いつも学校の治安ばかり考えていて、助けを求めている生徒達に見向きもしない。正直言ってしまうとまさに『無能』と呼ぶにふさわしい人達でした。この呼び方などが原因なのでしょうか・・・。

学校から帰った後、叔父に今日も殴られました。このままでは私はいつか殺されてしまうのでは・・・そう考えると震えが止まりません。ですが・・・私は死にたくない。そう思い、とある夏の休日、私は家出することを決意しました。何の宛てもなく、家を飛びだし、走る。叔父が怒りの声を上げ、私を呼んでいるが振り返ってはいけない。今、戻ってしまえば今度こそ終わりになってしまう気がしたから。

そして今、近くにある公園にまでたどり着き、彷徨っている。飛びだしたはいいものの、荷物は何も持ってきていない。これからどうやって生きていくのか……。家に帰るといふ選択肢はありません。もう二度とあんな目には……。会いたくない。

私は近くにあるブランコに腰掛け、顔を手のひらと膝に埋めて、泣き始めました。家を出た嬉しさと誰からも愛されない寂しさが混同し、涙が止まらない。この引越して来た町は前の町に比べ、人口がとても少ないためみられてしまうようなことはないでしょう。ですがとても寂しいのは事実。慰めてくれるのは青空に輝く太陽と忙しそうに鳴く、夏のセミ達だけでした。

あれからかなりの時間が経過しました。3時間くらいでしょうか、もう辺りは暗闇に包まれ始めています。今日は、仕方がないのでベンチで眠りにつくことにしましょう。もう、行く宛ても帰る宛てもないので。ゆっくり休んでいきます。そして、眠りに着こうとした次の瞬間。

私の目にボールが飛び込んできました。ただのボールならよかったですですが何か違います。なぜなら、独りでに跳ねていたのです。誰もいないこの黄昏の公園で独りで

に跳ね続ける謎のボール。私の心臓が痙攣し始めました。何故か分からないがとても恐ろしく感じているのです。

そのような状態がしばらく続きました。辺りは暗くなり初め、外灯が付き初める。すると目の前に信じがたいナニカが映し出されました。それは『絵』。黒く塗りつぶされていてまるで子供が描いたみたいな形をしていますが、目の部分が真っ赤なのです。再び心臓が痙攣しているのを感じる、今度は速く痙攣している。

逃げなければ、でなきや殺されてしまうかもしれない。そう思った私は転げ落ちるようにブランコから離れ、公園を出ました。思い切り走る。足がちぎれるかと思うぐらい走って逃げる。しばらく逃げた後、私は外灯の真下で息切れを起こし、立ち止まった。あの説明しがたいナニカは追ってきていないだろうか。そう思い、来た道を振り替える。しかし、ナニカはまだ追ってきていた。

死んだ者達が実在しているなど考えたこともありませんでした。どうでもいいと思っていました。だって、生きるのに精一杯でしたので……。

後ろからはラクガキ状のナニカも迫ってきている。私はこのようなどで死んでしまうのでしょうか。死ねば楽になれるでしょうか。涙が頬を薦る。何もかも投げ出して逃げたい、そんな自殺しようとしたあの時に思ったあの想いが頭をよぎる。ですが、目の前のナニカを見つめていると死んで楽になれるなど、到底思えませんでした。むしろ、私も向こう側の住民に引き込まれ、永遠に彷徨うことになってしまふのでは……そう悟りました。

嫌、私はまだ死にたくない。なんとかこの場をどうにか切り抜ければ。私はこの病んだ頭を冷静に動かし、打開策を考える。辺りを見回すと丁度いい大きさの茂みを発見しました。あそこに隠れられれば、怪物達をやり過ごせないでしょうか。

そうと決まれば早速、私は猛ダツシユで茂みに隠れた。目を瞑り、顔を手で覆い化け物を見ないようにする。あのナニカ達が近くまでよってきているのを感じる。さらに恐怖で心臓の鼓動が速くなる。嫌嫌嫌嫌嫌嫌嫌嫌、早く……どこかに行つて、死にたくない……。

危うく泣き声を上げてしまいそうになった次の瞬間、コロコロと石のような物が投げ

られた音が耳に飛び込んできました。なんででしょうか．．．石？次の瞬間、ナニカ達の気配がこの場から去っていく。ようやく心臓の高鳴りも収まり始めました。もしかして、誰かが助けてくれたのでしょうか？もしそうだとするならば、人間の誰かがいる。私は喜びのあまり、茂みから外に飛び出した。しかし、そこには誰もいませんでした。

少しがっかりでしたが、何にせよ助かったのも事実です。もし、誰か助けてくれたとしたらその人は命の恩人ですね。いつか、お礼ができるといいのですが．．．。

いや、もしかしたら化け物の気まぐれで、ただ落ちた石の音に引かれてどこかに行っただけかもしれません。．．．しかし、考えても仕方ありません。私は一旦深呼吸をし、落ち着きを取り戻してから、辺りを見回してみる。辺りはすっかり暗くなっていた。黄昏の空は姿を消し、暗くて冷たい闇夜だけが空を覆い尽くしている。

ここにおいても拉致が開かないので、私は闇夜の世界を一步步歩いてすすんでいく。そこには死者たちの世界が広がっていた。さつき襲ってきた、黒焦げのナニカもいる。しかし化け物達は相当近くに寄らない限り、襲ってくることはなかった。なのである程度は避けながら夜道を進むことができました。

ですがそう上手くはいきません。あるところには巨大な節足動物のようなナニカが立ち塞がっていて家に帰る道が通れなくなっているところもありました。赤い無数の触手なのか足なのか、さらには上向きに顔がついていて、常々にこやかな顔つきをしていた。その姿は『不気味』と表現するにふさわしい形相でした。

私はこのナニカに『道ふさぎ』と勝手に名前をつけて呼ぶことにしました。このようなことをしている余裕があるなら早く進みたいところでしたが、こうでもしながら進まないと常に吐き気と恐怖が襲ってきて、心が押し潰されそうになってしまうのです。

あるところには項垂れている黒い影、燃えながら夜道を駆け抜けていく首のない馬。車道の真ん中——町をパトロールするように、頭をぐるぐると回すおかしな人影。電信柱の裏——いくつのも釘に刺され、貫かれている頭部を苦しそうに抱えながら彷徨う人影。至るところに怪物が彷徨っている。皆さん、どんな思いで死んで逝ったのでしょうか……。自分が捕まるのは嫌ですが、そのナニカ達の最後の気持ちを考える胸が裂けそうです。

学校で言われていた噂は本当だったのですね。確かにこの町にきた時から、化け物が徘徊しているという話は聞いていました。当時は人から逃げるのに忙しくて全く気にしていませんでしたが今の状況になるとちゃんと聞いておけばよかったですと後悔しています。このような事態、誰も想像できるわけありませんが。

しかし、化け物が徘徊しているこの町で一つ異質な名を聞いたことがあった。その名は『よまわりさん』。なんでも他の怪物とは少し違い、夜出歩く子供を連れさらう別のナニカ。

正直先ほど、怪物を見た私にとってはどれもあまり変わらないように思えるのだが、今の状況では何がいともおかしくはありません。その徘徊している『よまわりさん』とやらには十分注意することにした。

夜道を進むこと、約30分。化け物を回避しながらなんとか進んできましたが、一向に着ける気がしない。狭い町のはずなのに怪物が存在しているだけで、こんなにも広く感じてしまうとは。怪物達は灯りがないと見えないモノが多い。懐中電灯かライターが欲しくなってきました。まあ、何も準備をせずに家を出ていった私のせいなんて

すけど。

考え事をしながら、通りかかった十字路の脇に、ふと目をやった。後ろばかり、気をとられていて周りをよく見ていませんでした。

——いる。

あの黒い影達とも異なる、別の何かが。何もない車道の真ん中がそれに遮られていました。

ずりずり。ずらず、ごりつ。ずりずりずり。ごりつ。ずりずりずり。

とそれは何かを引きずっていました。見た目は、黒く大きな幼虫のような形に、タコのような触手が大きな袋のようなものな複雑に絡まっているという、これまで見てきた怪物達に比べ異質——いや、異形な存在でした。まず人間の形すらしていませんでした。どっちかというと軟体動物のような部類でしょうか。

私はこれまでとは違い、ソレに自然と興味が湧いていました。なんとというか・・・ソレは他のとは何か違うものを感じます。影達が放つ、無言の怒り、悲しみ、そして憎しみ。それらとは違い、目の前の何かからは何も感じられなかった。

気が付くと私は、目の前のナニカをまじまじと観察していた。目なのか仮面なのかわからないものでこちらをじっと見詰めている。今まで、人間に怯えて好きなことも満足にできない毎日だった私にとって、影達も『よまわりさん』も全てが新鮮だった。もちろん、目の前にいるそれも例外ではない。無事この場から生きて帰ることができたなら、未知の生物や宗教、そして死後の世界についても勉強してみようかな。

しかし、2分にも満たない間にソレは目の前から消えていた。私の推測ですが、あれがきつと噂の『よまわりさん』なのでしょう。何をしたいのかはよく分かりませんが、おそらく子供を見張っているのでしょう。そして私は、高校生なので見逃された・・・こんなところでしょうか。

よまわりさんを見失ってしまったので、仕方なく私は再び帰路に向かい始めました。しかし、影達が去ったわけではないので、慎重に進んでいく。再び十字路を曲がろうと

したその時、何かにつづかった。いや、『誰か』に。

「ああ、ごめんなさい。まさか、この町を他に歩いている人がいると思わなくて……お怪我はないですか？」

と言いながら私に手を差しのべてくれる。私は手を取り、起こしてもらった。

「……ありがとうございます。それで……貴女は？」

「いえ、ちよつと『飼い犬』を探しているだけですよ。」

この出会いにより、後に少女と共にこの夜の町を徘徊することになるとは、彼女はまだ知らない。

二章 逢魔時

この闇夜の中、私は人に出会うとは思いませんでした。それも、私よりも幼い少女。茶色に近い髪に制服を着ている。年は中学生くらいと言ったところでしょうか。少女は、ぶつかって尻餅を着いたときについてしまった砂をはらった後、私に話し掛けてきた。

「あ、すみません。一方的にぶつかってしまった私が言うのも何なのですが、お願いを聞いて貰えないでしょうか？」

「構いませんよ。こちらも化け物ばかり気にしていて、まさか人にぶつかるなど思わなかったモノですから。」

「・・・やはり、貴女も見たんですね。影達を。」

「ええ、対処は容易くはないですが扱いやすいと思っています。・・・で、お願いという

のはいかほどですか？」

「実は、今妹を家に一人で残してきてしまっているのです。まだあの子は影達を見たことがないので。なので心配で……。どうか妹の保護をお願いできないでしょうか？」

「分かりました。ですが、一つ条件があります。」

「……何でしょうか。」

「どうやら向こうも何を聞かれるのか予想がついているようで、顔つきが少し険しくなり、暗くなった。」

『『よまわりさん』のことを教えてください。教えてくださいければお受けいたします。』

「見たのですかアレも……正直言うと分かりません。ですがこれだけは分かります。見つかってしまえば唯ではすまない。」

「・・・そうですか、分かりました。充分です。妹さんを帰ってくるまで預かりますよ。こんな女で良かったら。」

私は少し微笑みながら返事を返した。彼女は驚いた顔をした。無理もないでしょう、何せこんな痩せ細って、影達に近い見た目をしている私が少し微笑んだら不気味でしょうから。

「では、よろしくお願いいたします。」

そう言い残すと彼女は逃げるように去っていく。・・・私、そんなに不気味でしょうか。なんとなく、この真夜中に出会った人でもいつもと反応が変わらないことにどこか安心してしまった自分がいた。しかし所詮人間なんて、このようなものでしょう。知らないものに恐れ、怯え、そしてそれを知ろうともしない。

そういえば、彼女に妹さんの居場所を聞くのをすっかり忘れてしまいました。どこにいるのでしょうか。そしてしばらく明かりもなくフラフラと夜道を彷徨っていると、先ほど出会った少女に似た風格をした幼女を見つけた。

薄茶色の髪に赤いリボン、それにウサギのポシェットを背中に下げていた。ビクビクしながら夜道を進んでいる。やっと見つけました。私は警戒されないようにそつと近づき、幼女に話し掛けた。

「……あの、すみません。」

幼女はビクツと体を震わせた。そして私から走って逃げていってしまいました。この話し掛け方は不味かったでしょう。私は小走りで幼女を追いかける。そして、行き止まりの通りで幼女に追い付くことができた。相変わらず、ビクビクして震えている。幼いから仕方ないでしょう。

「大丈夫ですよ、お嬢さん。私は貴女のお姉さんに頼まれてやってきたのです。怖がることはありません。」

「……本当？お化けじゃないの？」

「ええ、お化けではありません。さあ、お家に帰りましょう。送ってあげます。」

「でも、知らない人についていっちゃいけないってお姉ちゃんが……。」

確かにそうですね、当然の対応だ。嘘をついているかとも思われても仕方ありません。……何か納得させる方法は……。

「あ、お姉さんは犬を探していると言っていました。貴女もそうなのですか？」

と質問をすると幼女は黙り込んでしまった。……私、何か不味いこと言ったでしょう。すると、幼女が何か喋り出した。

「ううん、ポロはいなくなっちゃった。お姉ちゃんまでいなくなったらやだ。だから迎えに来たの。」

なるほど、そういうことでしたか。姉がが待っていると言ったら大人しく待っているのが普通でしょう。ですが、この様子だとその探している犬とやらに何かあったので

しよう。そして、死んでしまった。このようなところでしようか。そうとなれば尚更、ここに彼女を放っておくのは危険ですね。一つここは提案を出しましょう。

「では一緒にお姉さんを探しに行きましょう。このお化けだらけの夜で一人では不安ではありませんか？」

「……一緒に探してくれるの？お姉さん。」

「ええ、もちろん。貴女もお姉さんを見つければ納得するでしょうから。」

「うん、じゃあ行く。」

と幼女が先陣きつて歩き出す。ふう、ようやく納得してくれましたか。正直、子供を相手にするのは苦手です。一般人を相手するのもやっとなのに子供となれば尚更です。私は少し頭痛がしたので、おでこを手で押さえる。今の流れでかなり疲れました。自分がいかに馴れていないかが分かります。少々、不安になりながらも私は幼女についていく。

「……お姉さん、そういえばお名前は？」

しばらく歩いていると幼女が恐る恐る、こちらの名を伺ってきた。そういえば自己紹介がまだでした。なにぶん、影達が動き回っているこの町では、喋る時間すら貴重なもので。そして、私はあの『よまわりさん』を見たいという好奇心でいっぱいになっていました。

「……『ルキア』です。ただの『ルキア』。」

私は最小限の会話に押さえるように素早く、手短かに自己紹介をすませる。するとあっさり終わらせるつもりでしたのに、幼女は嬉しそうな顔を見せた。そして、口を開き

「私、『コトモ』。宜しくね、ルキアお姉ちゃん。」

クツ……？そのように正直に返されると逆に困惑してしまいます。そして、その笑顔もやめて欲しいものです。素直に……可愛いのでやめて下さい、頼みます。すると、

幼女……いえ、コトモさんは私の手を左手で握り始めた。

「こうすれば怖くないね。」

そうポツリとコトモさんは呟いた。子供いうのはよく分かりません。なぜ、こうも純粹でいられるのか。なぜ、こうも人を簡単に信用してしまうのか。私にはわからない。物心がつき始めたころには既に父親はいなかったし、母も仕事で構ってくれることもなかった。だから、私は一人だった。何時からか、人を信じるといふことも忘れていました。それをこうも覆されると困惑します。

先程出会った『よまわりさん』。アレからも独特の雰囲気を感じ取れた。物凄く奇妙な形をしていて人とは掛け離れた存在。しかし、私の好奇心をくすぐった唯一の存在でもある。私は……この町に生きると言われた気がした。いえ、『死に抗え』のほうが正しいでしょうか。化け物ばかりのこの町なのに。影達が無数に襲ってくる中で矛盾したこの言葉。この私がああ奇妙な存在と幼女に教えられるとは……。

人生とは実に興味深い。今まで、信じていたものがたつた数時間で全てがひっくり

返ったようです。井の中の蛙だったことを痛感しました。少しだけ・・・人生がこのまま終わってしまうのには惜しく思えてきました。そして、この幼女を死なせるわけにはいかない。この子は私に可能性をくれた。だから必ず・・・。無事に戻れたら何をしましょうか。まず、この影達について知りたいですね。そして、いつか旅にも出たい。

T時路を曲がり、しばらく進んだ後ちよつとした広場が見えてきた。そこには小刻みに明かりのようなものがちらほら見える。もしかしたら、あのお姉さんがいるかもしれない。

広場に入ると案の定、そこにはコトモさんのお姉さんが草をかき分けて何かを探していた。広場というより原っぱに近い形でそこは草が生い茂っていた。なので一歩、草むらに足を踏み入れた瞬間、ガサガサツと音を立ててしまった。

「きゃっ!?!」

少女が驚いた表情をして、此方に振り返った。しかし、立っていたのが私達なのを確認し、安心したようにため息をついた。そのいなくなつた飼犬とやらはこの場所が好

きだったのでしょうか。犬が掘ったような後がありますし。スコップがあれば掘れそうですが。

「ああ、なんだ。着いてきちゃったの？」

「……すみません、ですが貴女がこの夜道を出歩くのは少々危険かと思ひまして。」

すると幼女は一旦私の手を離れ、姉である少女の手を強く握りしめました。

「ごめんね。お姉ちゃんもうちょっと探してみるから、このお姉ちゃん（ルキア）と一緒に帰っててくれる？」

「……やだ、一緒に帰ろう。」

幼女は手を離そうとはしません。余程姉のことを愛しているのでしょうか。今にも泣きそうな顔をしている。確かにこの夜道は普通とは、何かが違う。私も説得して少女も一緒に帰らせましょう、いくらこの少女がこの町に馴れているように見えるからと

いって100%安全とは言い切れません。

しかし次の瞬間、目の前の少女の表情が突然青ざめた。彼女は何かを見詰めている。それは私達に向けたものではありません。私は後ろに意識を集中させる。私達の後ろに何者かの気配を感じた。しかし振り返ってしまえば死ぬ、そう悟った私達は身動きが取れなかった。

「……ちよつと二人共、こつちに来て。」

少女は私達の腕を掴み、草むらの前まで引つ張った。そして、耳元で呟き始める。

「二人ともこの草むらに隠れてて。目をつぶって。今から何があっても出ちゃダメよ、わかった？」

「うん。」

私も黙って指示に従う。コトモさんを押し私は奥から彼女の身を包み込むように

覆い隠す。これで大丈夫なのでしょうか……？少々不安になりながらも私は黙って指示にしたがった。

「私は……なつてもいいだから……だけは……。」

少女が何かしやべっています。しかし、草むらのせいで何を話しているのかいまいち聞き取れません。すると、袋を被せたような布の音が聞こえた。そしてズルズルと引きずっていく音も聞こえる。嫌な予感がします、彼女はこれを知ってわざと私達を……？

「お姉ちゃん？」

コトモさんも姉に対して、疑問を抱いて発言する。しかし、しやべってしまえば見つかってしまうかもしれない。私は幼女の口をそつとふさぎ、気配が消失するのを待つ。すると、気配は消えました。だが、消えたのは謎の気配だけではありません。少女の気配も消えていた。出てもいいでしょう。もうどうせ、誰もいない。な

私達は草むらから顔を出して、辺りを見回す。予想通り、そこには誰もいませんでした。そして、不穏な空気が漂う。

「お姉ちゃん?・・・先にお家に帰ったのかなあ?」

コトモさんが能天気なことを呟く。そんな訳はないと思うのですが・・・、とにかく彼女は帰りがついていますので私も一緒に帰ることにしました。野原から出るとすぐその道路に、懐中電灯が落ちていた。なぜこのようなところに?すると、コトモさんは真つ先に懐中電灯を拾った。

「お姉ちゃんの・・・かな?」

「・・・おそらく。」

確かではないですが私も同感です。でないところのようなところに落ちている説明がつきませんし、さらわれていった証拠にもなるでしょう。・・・コトモさんは全く考え

ていない様子ですが。

「・・・ライトをつけてみよう。」

——
ツ！

「ツ!!!」

懐中電灯をつけた瞬間、目の前に大きなウニのような化け物『道ふさぎ』が姿を表しました。私は言葉にならない悲鳴をあげてしまい、一瞬で全身が恐怖に包まれる。だがこのまま動かなければ捕まってしまう。そうしたら、どうなるか分からない。一瞬にして肉をバラバラにされるかもしれないです。

私はコトモさんを片手で抱え、化け物とは反対方向に向かって走った。『よまわりさん』の様に異例の存在なら怖くないのですが、影達は違う。アレらは・・・生きている人間達と対して変わらぬ。私達、生きているもの達に向けられた怒り、悲しみ、憎しみ、それらしか伝わってきません。

私が普段感じているものと……何も変わらない。しばらく進んだ後、前には最早、常連と言つていいほど数が多い、黒焦げの影が前に立ち塞がっていた。コトモさんが握りしめている懐中電灯のおかげで位置が把握できたのは大きいです。

何かないでしょうか？ 辺りを見回してみると、丁度良い大きさの小石を見つけました。拾つて影に向かって投げつける。すると、影に傷を与えることはできませんでしたが、石に気をとられているようです。私は間を抜けて危機的状况を脱しました。

ひたすら走つて、逃げる。振り返りはしない。私は、いや私達は死ぬ訳にはいきません。人生初めての知り合いや夢を失いたくない。私は死に物狂いで走つて逃げた。……ここまで走れば流星に、影達も追つてきてはいないようです。私はコトモさんを腕からそつと下ろし、再び道案内するようお願いしました。

道中トラブルはありましたが、なんとか自宅とやらに到着しました。和風の住宅に中に何もいない、かわいらしい犬小屋がぽつんと置いてあります。おそらく、これが彼女達が探している犬のものなのでしょう。しかし、そこには少女の姿はありません。

「お姉ちゃん……いない。」

「……お化けにさらわれてしまったのでしょうか……。これからどうしますか？コトモさん。」

「……とにかく一緒に入ろう。ルキアお姉ちゃん。」

お、お姉ちゃんですか……。その呼ばれ方はどうしても慣れません。ですが、悪くは……。ありませんね。探しに行きましょう。お互い、大切な物をあの暗闇の町に置いてきてしまいましたから。

そして、私はコトモさんの家に一旦入れてもらって彼女の決断を待つことにしました。

三章 宵の口

あれから私はこともさんの家へ上がらせてもらい、彼女の部屋にて待機しています。そして、今のところ行方が分からなくなっている彼女のお姉さんを散策するかどうかを決めるのを待っているような状況です。

：：しかし、先程からテーブルに置いてある魚の塩焼きが気になってしまいます。良く考えてみると私、朝起きてから何も食べていませんでした。すると、胃の中がキュルキュルと小さな音をたてました。しかも、それをお手洗いから戻ってきたこともさんに聞かれてしまいました。顔が徐々に熱くなるのを感じる。ああ：：恥ずかしいです。ですが、こともさんは心配そうな顔をして、

「お腹空いたの？ルキアお姉ちゃん。」

と聞かれてしまいました。

「クツ……?ま、まあ少し……だけ。」

しかし、さらにお腹が鳴ってしまい、焦って言葉が出てこない。ですが、あたふたしている内にこともさんがテーブルからお皿ごと魚料理を持ってきてくれました。そして、お皿を私に差し出す。

「私の食べていいよ。ルキアお姉ちゃん、ずっと何も食べていないみたいだから。」

……どこまでこの幼女は私のことを読んでくるのでしょうか……。私は黙ったまま、魚料理が乗ったお皿を箸と一緒に受け取る。

「ですが……こともさん、貴方はよろしいのでしょうか?貴方こそお腹が空いているのでは……。」

「ううん、いいの。もう、お姉ちゃんを探すことに決めたから。だからルキアお姉ちゃん、それ食べて元気出して。」

なんて優しいのでしょうか、この子は。こんな影に近い見た目をしている私にこんなにも優しくしてくれるとは。私は魚を頬張りながら、考えていた。食べ方がかなり下品になっているのですが、そのようなことは気にしていられないほど私は食べるのに夢中になっていた。

気が付かない内に、私は左目から少量の涙をながしていました。ほんの少量ですが。暖かい空間が久し振りにやってきたような気がします。・・・ご飯を食べているだけに、このような気持ちに陥るとは・・・。情けない話ですね、これからこともさんを守ろうというときのなのに、先に私が挫けてしまいそうです。

しかし、弱音を吐いている場合ではありませんね。急いで、間食させて夜の町へと旅立ちましょう。早くしないとお姉さんの体力が尽きてしまうかもしれない。元はいえば、私は彼女のおかげでこともさんという小さな友達と巡り会えたのです。ちゃんと恩は返さなければなりません。

私は涙を片手で拭い、おそらく鯖である塩焼きを食べることに集中した。



さて、鯖もいただいたところですので、そろそろ行きましょう。玄関に向かうと、こともさんが既に靴を履いて待っていた。

「申し訳ありません、遅くなりました。」

「じゃ、行い。」

私は使い古された紺色のスニーカーを履き、彼女とともに家の玄関を潜る。しかし・・・お姉さんを探すとはいえ、まずは何処から搜索すればいいのでしょうか・・・。昼に警察に頼るなんて選択肢はありません。昼まで待っていたら、彼女の命が危ないです。私達が自力で見つけ出すしかありません。

「ルキアお姉ちゃん、こつちから行い。」

そう言うこともさんは、右側の方角を指差す。そんな雑な方法でいいのか疑問に思

うところもあります。ここは彼女の意見に賛同しましょう。探す当てもないのが現状です。

私達は再び夜の町を歩き始めた。目線から自販機や木々の隣が通り過ぎていく姿はまるで時の流れを表しているようです。そして、私達は自販機の隣に掲示板が立てられているのを見つけました。もしかしたら、何か情報があるかもしれない。こともさんは所々、漢字が読めないようです。代わりに私が読むことにしました。

掲示板にはこのような内容の貼り紙が貼られていた。

イヌの鳴き声による、騒音被害が多発しております。
ペットは飼い主が責任を持ってしつけをしましょう。

読み上げるとこともさんの表情が暗くなる。そういえば、今彼女はお姉さんだけでなく、飼い犬も行方不明なりましたっけ……。不味いです、読み上げたのですが完全に皮肉のような言い方になってしまいました。しかし、こともさんは懐中電灯を再び進

行方向に向け、私の手を引きながら歩き出す。

「……ごめんなさい、ごともさん。」

少し小さめの声で私は彼女に謝罪をする。彼女は何も言いませんでしたが、大丈夫と言っているように顔をこちらに一瞬だけ向けました。許して貰えたと思いたいです。

T時路を右折し、しばらく進むと少し開けた道路に出ました。ここにも影達が屯しています。襲われないように避けて通りましょう。そう思っていたその時、右側に青い犬のような影が学校方面に走っていく姿が見えた。あれが探している犬でしょうか……？

「ポロ……？待って！お家に帰ろう！」

すると、彼女は犬を追いかけて走り出してしまいました。

「そんな迂闊に飛び出しては影達の思う壺です！」

彼女を追うため、私も走り出した。小さい体ですが、こともさんはかなり速いスピードで走り、距離を微妙に離されてしまいます。しかし、体力がないのも事実なので、立ち止まっている彼女に追い付くことができませんでした。

彼女に追い付き、肩に手を置いた瞬間、再び犬の姿が確認できました。しかし、先程同様に猛スピードで走り去ってしまう。また、彼女が追いかけてしまいそうになっていましたので、私はこともさんを拾い上げて、お姫様抱っこをして私が代わりに追いかける。

道路には、首がサイレンのように輝きながら回転している影が大量に佇んでいて、進めそうにありませんので、歩道の壁沿いを歩きましたが、突然壁から腕が生えてきて腕や胸、太もも部分を触られてしまった。体全体が一瞬ゾクツと鳥肌が立つのを感じる。

普通の人間だったら、腕をへし折ってやるところですが、この腕達も助けを求める怨霊なのでしょう。私は今の行いに、目をつぶることにして犬の向かった階段を駆け上がる。

階段を上がった先にあつたのは校門でした。そう、この町にある唯一の小学校。中学校もあるようなのですが、何処にあるのかは私には分かりません。ちなみに私の通っている高校は電車を使わないと行くことの出来ない位置にあります。

しかし、動かしてみても校門はびくともしません。力強くない私はこの手の問題はお手上げなので、私はこともさんを下ろし、小さな体を生かしてもらい、学校の中の様子を伺ってもらいました。すると、私も目視できる距離に犬が通り過ぎていくのを確認しました。

「ま、待ってー！」

こともさんの犬を呼ぶ声が学校の中の闇に吸い込まれていく。あの犬、この門をどうやってくぐり抜けたのでしょうか……。身長が180cm近くある私ですが、背伸びしないと届かないくらい校門はかなり高めです。

猫でも飛び越えるのは難しいでしょうし、犬がこじ開けて施錠したとも思えません。体が透けているか、パールゼブフォ並みの巨大カエルでもない限り、この門を越えるこ

とは不可能のほうです。もうその時点でこの世のものではないのでしょうか・・・？

そして、私は今見掛けた犬の姿が少し異なっているように思えました。なんというか・・・頭部が普通の犬に比べて、少し大きかったような・・・？見間違いでしょうか。気のせいである事を祈ります。

私はポロという犬をみたことがないのでどのような姿をしているのかは知りません。なので、それがポロなのか判断するのは、こともさんに任せるしかありません。・・・少々不安ですが。

「ルキアお姉ちゃん・・・どうやって中に入ろう？」

「何処か抜け道がないか探してみましよう。少なくとも、今の時点ではこの門を通ることはできません。」

「うん・・・分かった・・・。」

耳がつんざくような鳴き声を上げてこともさんに食らいつこうとしました。

「ひっ」

私は全速力で走って立ち往生していることもさんを抱き抱え、秘密基地から逃げ出しました。化け猫は凄まじい速度で此方を追い掛けてきます。このままでは追い付かれる。私は試しに、影に効果が見られた小石を猫に向かって投げつける。しかし、効果はなし。

「ルキアお姉ちゃん、あれ。」

震えていることもさんが基地の奥を指差しながら、私に話し掛けてきた。指が指す方にはあの巨大な鈴がありました。もしかして、あれを守っているのでしょうか？

一か八か、私は基地の方へ旋回し、鈴に目掛けて走り出す。そして、無事に鈴に触れることに成功した。すると、気配が消えました。振り替えるともう、化け猫の姿はありません。

ふむ……この町には影やよまわりさんだけでなく、あのような妖怪もいるのでしょうか。ますます興味が湧いてきます。全てが終わったら彼らについてもっと調べてみましょう。……無事に帰ることが出来るかは甚だ疑問ですが。

しかし……この鈴、余りにも大きすぎやしませんか……。どちらかというところ、神社に掛けてある本坪鈴に近いですよこの鈴。しかし、こともさんはこの鈴を持ち帰りたいと言うので、私が持つことにしました。余りにも大きいので抱えることにしましたが、一歩進む度に大きな音がなってしまうので、掲示板の情報を閲覧した後、一旦家に引き返すことにしました。

近くあった掲示板にはこう記されていました。文字は落書きのような少し曲がった字面でした。

がっこうのプールのそばのおじぞうさん。

大きな目玉の影と思いきや、大口を開けて食べようとしてくる影などを避けながら進んでいくと、何やら学校近くの行き止まりに辿り着きました。

ここには確かに、背の低い木と地蔵が設置されていました。こともさんはお地蔵さんに10円玉をお供えし、抜け道の探索を開始した。

「……あつ！こんなところに抜け穴がある！」

どうやら、彼女は無事に学校へ通ずる穴を見つけたようです。どうやら草影にまみれて青いフェンスに穴が空いていたようです。

こともさんは穴を通り抜け、学校へと侵入することに成功しました。……ですが、穴は小学生用の大きさになっていました。

これでは中に入ることができませんね……。どうしたものでしょうか。

辺りを見渡してみると、林が生い茂っている中でフェンスが途切れている部分を見つ

けました。しかし、中は植物が鬱蒼と生い茂っており、棘の道が広がっていました。とても普通には通れるような道には見えません。

・・・しかし、フェンスを越えるにはここを通らなければなりません。こともさんを一人にしてしまつては心配です。あの子、何をするか分かりませんので。

私は覚悟を決め、林の中を突き進む。懐中電灯はこともさんが持つているため、灯りがない林の中は外より暗く見えた。当然、足元も見えず、辛うじて外灯の光に照らされていた棘道も見えません。

「うっ・・・。」

草を掻き分けて進んでいくと左足に激痛が走った。どうやら棘道に片足を突っ込み、棘が無数に絡みついてしまったようで、皮が切り裂かれる感触がする。痛い。ですが、気が付いたら既にフェンスを越えていました。もう少し歩けば、こともさんと合流できるでしょう。

「後、もう少し……。」

私は独り言を呟きながら、棘道を進んでいく。そして、無事に棘道を抜けてこともさんと合流しました。こともさんは心配そうに私の脚部を見詰めていました。自分の左脚を見ると、棘によつて切り裂かれ、所々から血が滲んでいる。

「先を急ぎましょう、こともさん。早くしないとポロさんが行つてしまいます。」

「で、でも……。ルキアお姉ちゃん、足から血が……。」

「私に構うことはありません。大丈夫です。ただの切り傷ですよ。」

私がそう言うとももさんは、一瞬心配そうに振り返りましたが、言われた通りに先へ進む。

しかし、今の出来事で敵は暗闇や影達だけではないことが分かりました。今では、自然もが私達の邪魔をする。人間以上に恐ろしいものは案外沢山いるものですね……。さ

て、考え込んでいる場合ではありません。こともさんを追い掛けましょう。

私は虐待されたときの為に持参していた、携帯用の包帯を怪我した左足に巻き、応急措置をする。大丈夫、こんな切り傷、いつもに比べたらなんでもありません。私はズキズキと痛む左脚をなんとか動かし、こともさんを追い掛けた。



しばらく進むと、こともさんが何かを見詰めながら立ち尽くしていました。おそらく、何か手掛かりのようなものでも見つけたのでしょう。私は彼女に近寄ろうとすると何か動物がすぐ隣の草むらから飛び出してきた。

「ワンツ!!!」

それは全身が青白く染まっている巨大な犬だった。・・・いえ、おっさん？

なんとも言えない顔をしており、それはまさしく人間の男性のそれであった。人面犬

は私達を強く吠えたてて追い払おうとしている。すると、人面犬はこともさんが見つけた何かを啜えて、何処かへと持ち去ってしまった。

「あつ！待って！それはお姉ちゃんの・・・！」

「こともさん、どうしたのですか？あの人面犬が持っていたものは一体・・・。」

「ルキアお姉ちゃん、あれお姉ちゃんの靴なの・・・。どうしよう、盗られちゃった・・・。」

成る程、そういうことでしたか。残念ながらポロではなかったようですが、姉の持ち物を見つけたようですね。ということは少女はここに来た可能性が高いでしょう。なんとしてもあの犬から取り返さなくては。

「・・・待っててください。私がなんとかします。」

しかし、こともさんは私のズボンのを掴んだまま離そうとしません。

あれから私達は人面犬から靴を取り返す為に、学校中を探索しました。夜の小学校は、外の風景とは違った不気味さが漂っており、外には見ることがないような新種の影達が沢山いました。

特に校庭を探索しているときに出会った、二宮 金次郎の像には大変驚かされた。よく学校で、丑三つ時か朝方に動き出すだの散々噂されていましたが、私は馬鹿馬鹿しい戯言と思っていました。しか、いざ目の前にすると何も言えなくなってしまう。

噂は必ずしも嘘とは限らないのですね……。彼はずっと本を読んでいて、私達には目もくれませんでした。本物の二宮 金次郎さんもこのように働きながらずっと勉強し続けていたのでしょうか……。

それと鶏小屋にも行きましたし、焼却炉も探索しました。小屋の中には何故か一羽だけ、首がない個体がいきましたが、この夜では別に珍しい事でもないので無視しました。

何故か焼却炉にはプールの鍵が落ちていたので、それを使ってプールも一応探索してみたら、丁度良い骨の玩具が見つかりました。私達はこれを持って人面犬が陣取る広場

に向かい、今その広場の入り口付近にいます。

「・・・いくよ、ルキアお姉ちゃん。」

「私はいつでも。」

入り口付近には都合良く、勉強机が置いてあったので、こともさんが骨を置いて犬を誘き寄せられないかと作戦を実行している所です。

「ワンッ!!!」

こともさんが骨を置いた瞬間、人面犬が広場から飛び出してきて私達を威嚇しました。私はこともさんを連れ、少し距離を開けます。しかし、人面犬は近くある骨に気付いたようで素早くそれを奪い、私達に目もくれずに靴を置いて、去ってきました。

作戦成功ですね。私達は急いで少女の靴を回収した。靴は触れた感じまだ生暖かったですがお姉さんのものなのか、はたまた人面犬のものなのかははつきりしませんで

した。

こともさんが心なしか落ち込んだ雰囲気になった。しかし、姉がいたことは間違いありません。希望を持ってもいいはずですよ。そう思った私はこともさんに慰めの言葉をかける。

「気を落とさないで下さい、こともさん。大丈夫です、靴があつたということはここに居たことは間違いないでしょう。次がありますよ。」

「う、うん。」

こうして私達は学校を探索しましたが、結局どちらにも出会うことはできませんでした。次はどうしたものでしょうか……。田んぼ地帯の方へ行ってみましょうか。

私達は早速、学校を出て田んぼの方へ向かう。しかし、ルキアの脚から滴る血によって、何者かに追跡されていることを……。まだ彼女は知らない。

四章 闇夜

私は『普通』という言葉が嫌いだった。『平等』という言葉も同様に。学校で虐めを受けていたときも、先生は庇ってくれるときはありました。しかし、その時には必ず

「皆さん、ルキアさんには『普通』に接して上げてください。彼女も我々と同じ人間なのです。『平等』な立場は一緒なはずです。」

と言います。まず生まれた時点で皆、違うところは沢山あるはず。見た目、性別、身長・・・様々な用途が違ってきます。ですが中には、私のように色々な面で異なる人種も存在する。

人間は無知なものに対して恐怖を抱く。『皆違って、皆良い』という言葉と矛盾しており、私は心の中でいつも馬鹿馬鹿しく思っていました。

ですが、必ずしも無知は罪という訳でもないらしい。こともさんを見てみると、それがよく理解できる。私の事を何も知らなかった彼女でしたが、私とたった数時間歩いただけなのに、もう私に懐き始めている。

こうして見ると、人間も中々興味深い。と同時に可愛くも思えてくる。兄弟がいらない私にとつてまるで彼女は、妹のようです。単純でとつても素直だけど、とても強い。私よりもずっと。その強さ、私も欲しかったですね……。ちよつぴり、私はこともさんの事を羨ましく思いました。

さて、無駄な考え事は置いておきまして今、私達は田んぼの方に向かっていきます。田んぼの方に行くためには踏切を通らなければならぬのですが、さつきからずっと踏切が降りていて中々通れる様子がありません。

現在、夜中の12時くらいですか。東京など都心部の方ならまだ電車は通つていそうですが、何しろここはかなりの田舎町。普通の電車は止まつているでしょう。なら、踏切も作動するわけはありません。電車まで化け物達の一部と考えるのが妥当です。：：だとしたら、何処かに廃電車があるのかもしれないですね。少し気になりますが、探索は

しません。

下を向いていた目を線路に戻した途端、目の前に制服を着た黒髪の女の人が見れた。一体いつの間に……。こともさんも気付かなかったよう動揺しています。

すると、線路の奥から金属同士が擦れ合う音が聞こえてきました。なんと、向こう側から本当に電車がやってきていました。不味いですね……。このままではこの人は弾かれてしまうでしょう。呼び掛けなければいけません。

そう感じ取った私は、目の前の女の人に呼び掛けようと思いますが、既に遅かった。それは今まで目の前に居たはずの女の人が姿を消していたのです。

電車が眼前を通過していく。その電車には乗客が誰も乗っていません。しかし、最後に誰かが乗っているのが一瞬だけ見えました。誰でしょうか……。あの女の人ではなく別の人が見えました。

乗っている乗客は迷彩服を着た中年の男の人でした。顔や肩などの部位が焼けて爛

れているおり、何か竜の形をしたアクセサリーを首から下げているのが辛うじて確認できます。

しかし、なんとなくですが見覚えがあるような……？けど会ったことも見たこともないはず。なのに、この感情は……。なんでしょうか、何か大切な人だった気が……。駄目です、思い出せません。

考え込んでいると、電車が通過していったので踏切のバーが上がっていきました。まるで私達を呼び込んでいるかのごとく。だからといって止まるわけにもいきません。もう一度電車が来ないかを確認し、こともさんの手を握って私は踏切を渡った。

踏切を渡った向こう側には予想の1.5倍の広さの田んぼが広がっていました。辺り一面、田んぼだらけ。途中、お地藏さんが置いてあった広間がありました。そこを抜けるとまたしても田んぼです。影も当然のように彷徨っており、私達の行方を阻んで来ます。それでも突き進んでいく。

少し歩いた後、田んぼの奥の方に光沢のような光が一瞬だけ見えました。何か落ちて

いるようです。しかし、拾いに行こうと思っても溝の途中に存在してたであろう足場がなくなっています。

私なら飛び越えれば行けなくもない距離ですが、こともさんが怖がつて飛び越えたくないと言うので、私達は何か足場がないか搜索することにしました。まだ右側に道が続いているので、搜索を進めていると小さな神社が見えてきました。

そこにはあの女の人もいました。しかし、相変わらず線路の時のように、背を向けたまま、此方に目もくれません。害がないとでもいうのでしょうか・・・？いや、そのようないふことがある訳がありません。

ここに留まっている影達は皆、悲しみや憎しみによる憎悪で満ち溢れていました。ただの霊だとしたら、おそらく私達に見えることなく昇天しているでしょう。

神社に近付くと、女の人は消滅しました。いえ、立ち去ったという方が正しいでしょうか。何が狙いなのか理解できません。ですが、体の周りから出ていた沸々としたオーラはきつと憎しみによるものでしょう。私と同じ、家族か親しい人に傷つけられた者に

よるもの。

「あつー！ルキアお姉ちゃん！あそこに大きな板があるよ！」

こともさんが指差した方角には、確かに橋に使えるような程よい大きさの板が置いてありました。湿つてはいますが幼女が渡るくらいなら、何とか使えるそうです。さっそく、あの道が途切れていた場所へ持つていくことにしましょう。

△▼△△▼△▼△▼△▼△▼△

あれから5分程たった後、私達は向こう岸に続く溝に拾った板をかけて横断することに成功しました。今、考えると私が向こう岸に飛び越えて、こともさんを手で引つ張つてくれば良かった気もします。まあ、今さらですが。

さて、探索を再開しましょう。こともさんは早速、先程光を発していた金属の物体に近付いていきました。すると、それは千切れてボロボロになった誰かのネックレスでした。その近くには黒ずんだメモ用紙が落ちています。私はこのメモを拾い上げようと

すると、

タスケテ、コロさしる、タスケテタスケテタスケテタスケテタスケテタスケテタスケテ
 テタスケテタスケテタスケテタスケテタスケテタスケテタスケテタスケテタスケテ
 スケテタスケテタスケテタスケテタスケテタスケテタスケテタスケテタスケテ
 テタスケテタスケテタスケテタスケテタスケテタスケテタスケテタスケテ
 スケ

タスケテタスケテタスケテタスケテタスケテタスケテタスケテタスケテタスケテ
 スケテタスケテタスケテタスケテタスケテタスケテタスケテタスケテタスケテ
 テタスケテタスケテタスケテ

・ ・ ・ ナゼ、ワタシがシナナキヤいけナイノ？

おそらくメモに記してある文字と同様の言葉が頭に鳴り響く。 ・ ・ ・ ここに来てしまっ
 たのは間違いだったかもしれない。早く逃げなければ。仮にこともさんのお姉さん
 がいたとしても、ここでは生き残ることは困難なはず。ここにはいないでしょう。

稲が植えてある水辺からあの女性が接近している。いえ、正確には浮遊しているといったところでしよう。あの人はもうこの世の住人ではない。分かりきっていたことですが、何処か気を抜いていました。ここにいる影達は皆、怒りや憎悪に満ちている……と。

すると、彼女は瞬間的に私達の目の前に急接近し、原型が残っていない顔を押し付け、見せ付けてきた。その顔はもはや目玉以外、かき混ぜたようにぐちゃぐちゃです。その真剣な目から感じ取れる怒りは私達に向けられている。

「ひっ」

こともさんが言葉にならない悲鳴をあげる。これ以上、幽霊を刺激してしまつては不味いです。私は固まって動けないこともさんを拾い上げ、田んぼの奥地へと走り出した。女の人はものすごい速度で此方を追ってきている。彼女に対する好奇心は吹き飛び、一気に恐怖の感覚が襲い掛かってくる。

まいりましたね……。心臓が破裂しそうです。息も上がってきました。肺が引き裂

けるような気がします。しかし、彼女の追いかけてくるスピードは一向に収まる気配はない。それどころかどんどん増している気がします。このままでは体力を徐々に奪われていくだけです。何処かに逃げ道は……。

すると、近くに水色のフェンスが立てられているのを確認できました。これで撒くことはできないでしょうか。一か八か、私はそのフェンスゲートを通り抜けられないかどうか賭けることにしました。しかし、遠くからでも南京錠が電柱の光によって輝いているのをが確認できます。

ですが、南京錠は新しい物のようですが、フェンス自体はかなり古びていて、ちよつとした衝撃でも加えればすぐに開きそうです。私はこともさんの頭を腕で覆い、衝撃に備えさせる。そして、私はフェンスに体当たりし、こじ開けた。古びた青いフェンスは大きな音を立てて、私と一緒に崩れ落ちる。なんとか侵入はできましたが、まだ彼女は追ってきています。

「……かなり、しつこい、です。」

息が上がっているため、言葉が途切れ途切れになっている。この先が行き止まりだった場合、もう逃げきれません。しかし、そんなことを想像している訳にもいきません。

再び全速力でこともさんを連れ、走る。土がぬかるみを帯びて、どんどん走りづらくなる。さつき体当たりしたため、全身がヒリヒリと痛む。だが気にしてはきつと殺されてしまう。足を止めてはならない、振り返ってはいけない。

気付くと私は別れ道で立ち往生していた。左と右側の道に別れている。1つは下の暗闇に続く階段。もう1つはおそらく丘の頂上に続く道でしょう。どちらに進めば：：！?

あまり、猶予は残されていない。私は直感に従い、右側の登り道を選択した。これが最後の賭けです。地面も石の道に変わり、走りやすくなる。これならば：：！そう思っている、道が途切れており、下は100m以上はある崖に繋がっていました。きた道を引き返そうとすると

「ル、ルキアお姉ちゃん……。あ、あれ……。」

あの女性が迫っている。もう逃げ場はない。焦りが生じ、冷や汗が顔を伝う。すると彼女は急接近して、私達を手で押し出した。体が宙を舞う。ああ……。反応が遅れたが私は崖に落とされた事に気が付いた。まるでバンジージャンプです。命の保証は全くない、本物の飛び降りです。

……え？そんな嘘です、そんな馬鹿な、嫌嫌嫌嫌嫌嫌、死にたくないちよつと待つてこんなところで……。

地面が見えたと思つたら視界が真つ暗になり、おそらく、自分とこともさんの血飛沫が辺り一面に飛び散る音が耳に響く。そして、全身に凄まじい激痛が走ると同時に意識が失くなった……。

——はっ?!いや、辞めておきましょう。最悪の想像を巡らしてしまつた。先程、掲示板に『この先、崖に注意』と記されていた。それがこの右側の道に違いない。私はそう思います。直感に従うのはやめ、私は左の暗い森に続く小路を進むことに決め

ました。

かなり長い階段が続いている。途中、幽霊の腕が私達に対して、助けを求めするように手を伸ばしている。しかし、今助けがいるのは私達の方です。もし、行き止まりだった場合どうすれば？ 私にはわからない。

ですがせめて、こともさんだけはなんとしてでも逃がさないと。彼女まで私のせいで殺されてしまうことになったら、死んでも死にきれない。

長く大蛇のように続いていた階段はようやく終焉を迎え、やがて小さな場所にたどり着いた。

そこには、女の人の死体が横たわっていた。辺り一面に血が飛び散っている。白いドレスを着ているのですが、血が染み込んでおり、かつての美しさは失われています。

「こ、この人は・・・？」

こともさんがポツリと言う。た、確かによく見ればこの人、今追いかけているあの女の人に間違いありません。血もまだ生々しく残っている様子からすると死体はまだ新しいようです。死因は落下死でしょうか。しかも、顔から落下したようで顔の原型が失われています。

正直、考えたくもない死にようです。自殺したようにも見えませんが、他殺によるものでしょうか。

すると、近くに彼女が接近していることに気が付いた。不味い、もう追いついてきましたか。しかし、ここはもう森の最深部で逃げ場はない。ここはひとまず、こともさんだけでも逃がさなければ……。

と思った次の瞬間、こともさんが私の腕から下り、女の人の死体に向かって走り出した。

「なッ?!?!」こともさん!何をッ!?!」

こともさんはすぐさま先程拾った、千切れたネックレスを女の人の死体に置いた。すると、彼女の足が止まった。暫く立ち往生した後、彼女は静かに消えていきました。

・・・こ、これで良かったのでしょうか・・・？ネックレスが心残りだとは到底思えないですが、ひとまずここを去りましょう。ここにもお姉さんはいなかった。ならば、私達は先に進まねばなりません。もう一度、大切なものを取り戻しに行くために。

私達は彼女の死体に近くに生えていた、鮮やかな色の赤い花をお供えし、元来た道を引き返していきました。・・・心なしか彼女の気配がしたような気がしたのはおそらく気のせいでしょう。ええ、きつと。

そして、私は何かにつけられているようです。先に進めば進むほど、背後に感じている気配が強くなっていく。そして、私達を通ってきた道には血のように真っ赤に染まったクモの巣が張り巡らされていた。この様子からすると・・・まだこの町には、よまわりさん以外にも怪物がいるということになります。

急がねば。おそらく、狙いは私です。何が目的かはわかりませんが捕まってしまう

ば、ろくなことにならない。それだけは言えます。次は商店街の方に向かってみましょう。あそこには確か、神社が建てられていますので、いざというときには逃げ込めますし、安心できる。そう願いまししょう。

そして、気のせいでしょうか。何故か気温が上昇している気がします。額から汗が伝ってきたので、腕を使って拭う。しかし、こともさんにその様子は感じられない。私だけ・・・？ひとまずこともさんに一応伺っておきます。

「こ、こともさん。今、暑くないでしょうか？」

しかし、彼女は平気な顔をして

「？、暑くないよ。どうしたの？ルキアお姉ちゃん？」

と答えた。まあ、何もないならそれでいいのですが・・・。

「い、いえ、何でもありません。さあ、先を急ぎましょう。」

そして、私達は手を繋いで商店街へと足を進めた。

五章 夜半

この世に『神』はいると考えたことはあるでしょうか？・・・私には分かりません。というより、考えている暇すら私にはなかった。では、もしも『神』が存在するのでしょうか。何故苦しんでいる人々を救済してあげないのででしょうか。私はいいいのです。どのみち、私は誰にも見放された存在。自力で生きていく道しかないでしょう。

しかし、こともさんのような人は別です。彼らは一生懸命生きています。得体のしれない者を知ってしまった彼女はお姉さんを助けられたとしてもこの先、生きていくことは難しくなってしまうでしょう。昼に活動をする我々と同じ人間によつて苦勞する運命を辿ってしまう。

障がい者や老人に対してもそうです。産まれながらにして、人生に足枷がついているように決め付けられてしまうなどもつての他です。事故による損失は納得できると思っています。しかし、私は違った。

私は元々親がアルビノを持っていた物を受け継ぎ、髪が白馬のように染まりました。アルビノを持っていたのは母でした。私は母の遺伝子により、髪が染まっているのです。

学校の人や叔父は気味悪がって私を軽蔑しましたが、私は認めたくはなかった。母にもらったこの髪を私は誇りに思っている。そのつもりです。

確かに中には、この髪が美しいと言ってくれる者もいました。アルビノというのは人によつては珍しいものなのでしょう。何度か撫でてもらったこともありました。まあしかし、その後5、6度程髪をむしり取られそうになったこともありました。

私の話はさておき、現在私達はあの田んぼから戻り、商店街へと足を運んでいる途中です。こともさんの自宅から南へ下り、真っ直ぐな一本道を進んでおります。途中、猫が通過したりしましたが、今はそんな事を気にしている場合ではありません。

というのも実は先程、大通りから商店街へと続く道へ入る前に妙な影を目撃したので。その影は明らかにいつもの徘徊している影とはどこか違った。私達を目撃すると

一目散に逃げていったのです。しかも、私達の目的地である商店街の方角へ。

姿はよく見えなかったのですが、少し見えた感じだとあれは『手』でした。真つ黒に染まつた腕のような影。これまでそんな影は一度も見えていませんし、かといつてそのような生物が存在するなどあり得ません。

もしかしたらあれが、こともさんのお姉さんを連れ去つた者を突き止めるための手掛かりなのかもしれません。いえ、もしくは元凶かもしれません。

その影は3つほどいて、全て同じ方向へと逃げていきましたので、現在半分それを追う形でこの大通りを進んでいます。しかし、一体どこへ行つてしまったのか。全く姿が見えません。見た目によらず、すばしっこい奴らです。

さて、語っている内に進んでいると踏切が見えてきました。北側にも線路がありました。ここには電車が2両も通つていたでしょうか……？すると、また列車がやつて来るのか踏切の停止バーが下りてきました。赤いランプが交互に点滅し、私達が引かれないように行く手を阻む。

タイヤの金属音を立て、列車がやってきました。しかし、車両は錆び付いており、とても動くとは思えないほど風化していました。そして、そこには電気はついておらず、客が乗っている様子はない。

ですが、最後の車両は電気がつけられていました。中には、田んぼに向かう途中に見たあの、軍服を来た中年の男性が、つり革に捕まって佇んでいました。しかし、よく見ると顔の形状がおかしい。黄金の竜のような頭部をしていたのです。

予想はしていましたが、やはり怪物の類いでしたか。でも、やっぱり見覚えがありません。はつきりと覚えている訳ではありませんが、どことなく懐かしい。不思議と人間ではない彼に親のような親近感を感じます。

二度程、顔を会わせただけなのにこれ程まで感じ取れるとは……。いずれ、彼のことも調べてみなければなりませんね。実に興味深い。私の中には何か身に覚えのない記憶もあるのかもしれませんが。

さて、列車が通過していったので踏切の停止バーが徐々に上がっていきます。行きましよう、商店街へ。私達は足を進めようとした次の瞬間、

『ワンワンッ!!』

とたくましい犬の鳴き声が聞こえました。しかも、私達の目の前から。よく目を凝らすと青色に染まった動物のような影が見えます。

「ポ、ポロ・・・？ポロなの？」

恐る恐る、こともさんが影に呼び掛けるとそれは猛スピードで走り去っていきました。・・・しかし、油断はできません。また、先程出会ったような人面犬かもしれまん。ですが・・・またこともさんは考えもせず、先へと行ってしまいました。

「全く・・・しようがない子ですね・・・。」

追いかける途中、やはりここにも北側にはいない姿をした影達が彷徨っていた。下半

身がなく、一直線に進むことしかできない者や全身が焼かれている者もいました。しかも、現在進行形で。

幾度も殺しにかかってくる影達を避けながら、進んでいるといつの間にか商店街へと着いていました。しかし、現在は丑三つ時に近い真夜中。当然ですが全ての店は閉店となっていて、シャツターが閉まりきっていました。

いえ、辺り一面に貼つてある貼り紙を確認してみると、どうやらこの商店街はもうじき取り壊されてしまうらしいです。お客さんが来ないのが原因なのか、はたまた近所の人が不便な為なのか定かではありません。

ですが、こんな近くに歴史的な建造物があつたとは……。一度も来たことがなかった私にとってここが取り壊されてしまうのは少し……名残惜しいです。この探索が終わったこともさんとも一緒に来てみようとも思つたのですが、仕方ありませんね。

しかし、肝心のこともさんとは現在はずれてしまっています。おそらく、この商店街へ来ているはずですが……。一体どこへ行つてしまったのか……。考えていても仕

方ないので、商店街に恐る恐る進出しました。

商店街の中は不思議な雰囲気にも包まれていた。妙に落ち着く場所ですね。そして、気付きましたがここには影達がいらない。何かに守られているように影が彷徨っている姿が見られません。

そして、商店街の所々にはお皿が置いてありました。そこには山盛りの『塩』が盛られていた。

「もしかして、この塩が・・・?」

私はしやがみ込み、まじまじと盛り塩を観察する。特に力が発せられているわけでもなく、本当に何の変哲もないただの塩です。ただ・・・ここは山の中にある町なので塩はかなり珍しい。

いえ、珍しくもありませんか。今のご時世、交通網が発達しましたので塩はもちろん、海の幸なども容易に入荷できる世の中です。塩など珍しいものでも何でもありません

ね。

ですが、塩には悪霊を遠ざける効果があると伝えがりますが、まさか本当なのでしょうか・・・？でも事実、この周りに影達はいない。ここならば安全に探索ができそうですね。

顔を上げ、足を進めようとすると目の前にあの『黒い手』がいた。姿は真つ黒に染まった腕なのですが、手首の辺りに白い窪みがある。そして、手首から上は途切れており、本体があるかどうかすらわからない。

私は脚を後ろに踏み出し、逃げようと思いました。しかし、とてつもない速度でそれは接近してきて、私を追い越していききました。

「・・・え？」

思わず、疑問の声が漏れる。そして、それはどうやら『塩』が狙いのようだった。それは塩に覆い被さるようになり、盛り塩を崩してしまった。すると、手は消え失

せたが、周りに嫌な暗い気配が出始めしました。

やはり、盛り塩が崩れてしまったからなのでしょう。なんとということをしてくれたのでしょうか、あの手の怪物。折角、安全地帯を見つけることができたと思つたときにこの様ですよ。

なんとか私は盛り塩を皿に戻せないかと試みましたが、何故かどうやっても元の形に戻りません。ただの塩かと思いましたが、どうやらそういうわけでもないようです。

すると、近くから電話の鳴る音が響き渡りました。しかも、無数になつているようで微かに遠くでも鳴っている音が聞こえます。

しかし、家の中から鳴っているわけでもなく、もちろん商店街からなつている訳でもない。さらに言うならば私は携帯電話を所持していない。というより、まず持ち物を何一つ持っていない。そういう訳で手持ちからなつているという訳でもなさそうです。

またくうーッとお腹が鳴った。こんなときに……！。辺りにこの音が聞かれてしまっ

たように影達の動きが活発になりました。影達に気付かれないように慎重に行動し、電話の鳴り口を探します。すると、その音は公衆電話から鳴っていることが分かりました。

そうとなれば、早速公衆電話に向かい、中に入りました。誰かは知りませんがもしかしたら助けの電話かもしれません。かなり確率は低いですが、その可能性にかけて私は受話器を取りました。

「もしもし．．．？どなたですか．．．？」

警戒心を強めている為か、多少小声になっているのを感じる。どんな人かわからないのも加え、きつと今までの癖も入り混じっているのでしょう。父は家に帰るとき、必ず電話を一本くれた。ですが、今では家族は叔父しかいない私の家。

そういえば、父は死亡したとは言われていなかった。正確には謎の失踪を遂げているだけで死亡したかすら分からないと母は言っていた。その当時は、私も幼かったため、何かの事故に遭遇したのだとばかり思っていました。もしかしたらこの影に襲われた

響くがさがさと蠢く音が聞こえる。

これは……、私は唯、気を失わされたわけではないらしい。そうでもなければ説明がつきません。誰のせいでもないのなら、今、私は幻覚を見せられていることになります。

もし、そうならばもつと意識は朦朧としていてもいいはず。私は心の中でそう確信し、一歩ずつ足を進める。辺りは赤く歪んではいますが、地形は通ってきた商店街と対して変わりない。というより全く一緒だった。

強いて言うならば鍵がかかっていたはずの青色のフェンスの鍵が開けられていて、南京錠がコンクリートの地面に転がっていた。私はこの世界の主に導かれているとでもいうのですか……？

謎は深まるばかりですが、今は進むしかありません。私はフェンスの扉を開け、商店街の北側へと向かう。

しかし……このがさがさとなる音は一体なんなのでしょう？ 不気味な音です。まるで巨大なムカデかヤスデか何かが屋根を這いずっているような多数の足が動き回っている音です。嫌な予感がします。私は歩く速度を速め、走り出した。

この商店街は何かがおかしい。今回に限ったことではありませんが、特にこの場所は異質です。影達とは違う意味での不気味さが辺り一面に漂っている。

だが、走つても走つてもこの蠢く音は消えない。流石に気になつて真上を見上げてみました。そこには予想していた通り、巨大で長いムカデの胴が張り巡らされています。胴は不気味なほどに黒光りしており、足は朱色に染まっています。しかし、長さが尋常ではない。今にも頭部の部分が姿を現して、まるごと捕食されてしまうかもしれません。

ないとは思いますが、仮にここにこともさんが来ているとなれば相当危険ですね……。もちろん、私も含めてですけど。ですが、ムカデの化け物の胴はどこまで伸びているのか確認できないほどとてつもない長さをしています。

そして、所々その胴体で道を塞いでいる。これは……。すると、そのムカデの先端であろう頭部がこちらに姿を現した。

「グツ・・・!?」

長さで推測はできましたが、それ以上でした。巨大で全体的に輪郭がゴツゴツしている。目の部分は黒く変色しており、瞳は存在している様子はありません。さらには、口に当たる部分に鋭利な牙が二本並んでいて今にも喰われてしまいそうです、もし噛み付かれてもしたら、ひとたまりもないでしょう。

まるで映画に登場する怪獣のような大きさです。影よりもよっぼど恐ろしい。すると、ムカデの化け物は頭部を少し引き下げた後、噛み付こうと此方に向かって突進してきました。まるで商店街のゴミを掃除をするかのように

「・・・ちよっつ!!?」

私は間一髪、頭を抱えすぐ近くにあった脇道に飛び込むことで、突進を回避しました。

しかし、出会っていきなり襲い掛かってくるとは……。初対面なのに勘弁してください……。

だが、これではきつと別の意味で命を散らすことになってしまう。それにこの血のよう染め上がった空間は、恐らくこのムカデが作り出したものでしょう。そうでなければ、影達がない説明がつきません。

ならば、尚更死ぬ訳にいきません。こんなところで死んでしまつては、きつと誰にも発見されないうし、ひよつとしたら遺体を発見してすら貰えないかもしれません。正直、一人で死にたくないですし、死んでも家族のところに戻ることすらできないなんて想像もしたくありません。

……そういえば、私に家族なんてもういないでした。少し虚しい気持ちにはなりましたが、私はムカデとは反対方向へと向き、全速力で走り出した。どこへ逃げているかは分からない。でも、進まなければ。

何度も襲われながらも、ムカデの猛攻を掻い潜り商店街の外に抜けだしたその先に

い・・・!?

そして、ムカデはこともさんにゆっくりと顔を近づけている。逃げてほしいのですが、不味いことに彼女は恐怖に固められ、動けなくなっている様子です。

「た、食べないで・・・。」

彼女が巨大ムカデに対して、命乞いをするの願いを聞き入れたかのようにムカデは頭部を引っ込め、後ろにあった胴を退かし、私達を開放してくれた。何故・・・?すると、近くでまたあの公衆電話が鳴り響いているのに気が付いた。やはり、あのムカデと商店街は繋がっている・・・?

ムカデが立ち去ったのを確認したのを見て、こともさんが駆け寄ってきました。そして、太ももに抱き付かれる。

「ルキアお姉ちゃん・・・怖かったよお。」

それもそのはず、あの大ききのムカデです。普通の人なら失神してもおかしくなかったでしょう。しかし、こともさんはそれに向かって話し掛けて助けを乞うことまでしていました。それだけでも十分勇気があると言えます。

私は少々、不格好だったがそつともさんの頭を撫でてあげました。柔らかい髪がとても心地よいです。子供ならではの独特な柔らかさですね。

こともさんを暫く撫でた後、私達は再び公衆電話の受話器を取ってみました。すると、やはり意識が朦朧とし、やがて失なつた。そして、気が付いた元の世界に戻つてきた。

目がチカチカするような赤い雰囲気はなく、ただただ闇がどこまでも続くいつもの光景が広がっていました。あれは夢だったのではと思つたのですが、2つだけ先程とは違うところがありました。

1つはまだ、公衆電話が鳴り響いていること。もう一つは、私達二人は塩を握り締めていることだった。何故塩を・・・？まさか、盛り塩を戻してこいともいうのでしょ

うか。しかし、現に握り締めている塩の量を比べると、4つある商店街の盛り塩を納めるには丁度良い量でした。

「もしかして、塩を戻してこいつて言われているのかなあ？」

「おそらくそうでしょう。この商店街には4つほど盛り塩が置いてありました。早速、置きに行きましようか。また、ムカデに襲われたくありませんし。」

「うん。」



よし、これで全ての盛り塩を元に戻しましたね。まさか異次元空間を歩き来して、塩を戻すことになるとは想像もできませんでした。あの公衆電話はもしかして、異次元への入り口だったとでもいうのでしょうか？

今はその事はさておき、後は……ムカデに報告すべきなのかそのままでいいのか……。

いえ、報告しに行きましょう。あの感じではあのムカデは恐らく神様のような立場なのでしょう。ムカデは神社に巣食っていた。その可能性は大いにある。

「こ、これで全部かな・・・？オバケムカデに報告しに行こう。」

ええ、その方がいいでしょう。神様などにわかには信じがたいですが、存在そのものを見てしまった以上、無視はできません。しかし、怨霊というものはありそうですが、まさか神様までいるなんて・・・。

暫く歩き、私達はあのムカデがいた神社のところまで戻ってきました。しかし、あのムカデはどこにもいません。辺り一面が巨大なムカデがいたとは思えないほど静まり返っていた。

神社の鳥井には何か真つ赤な物が落ちていました。鳥井まで足を運び、何かを拾い上げるとそれは御札でした。真つ赤な御札に百足の絵が描かれているもの。これが・・・せめてもの礼なのでしょうか。

それと、少量の塩の塊が御札が置いてあつた隣に置かれていた。影達の撃退に使えるかどうかは分かりませんが、少なくとも家に盛り塩として盛っておけば、影が近寄つてくることは防ぐことができそうですね。

そして、背後から心なしか犬の鳴き声でした。力が強くなりました。力強い犬の鳴き声が私達を呼んでいる。こともさんの愛犬『ポロ』が呼んでいるのかもしれない。

私達はそれが奥の林から聞こえてくると思い、林へと足を進めた。そして、道中にはあの奇妙な物体が立ち塞がっていました。『よまわりさん』です。しかし、今回は出会つてすぐに行方を眩ましました。

ふむ、やはりあの者だけ行動の予測が付きませんね。子供をさらうということは事実なのですが、どうやらそれは気分によつて決まるようです。必ずしも徘徊する子供を一人残らず誘拐していくわけではないようです。

法則性がない、それが『アレ』の良いところでもあり悪いところでもあるのでしょうか。そして、道中に出会つた怪物は『アレ』だけではなかつた。

「お、お姉ちゃん……あれ……。」

こともさんが道路の前方を指差しています。そこには蜘蛛のようなナニカがいた。身体は青く、赤い眼球を持ち、巨大な牙が二本並んでいる。しかし、身体を支える脚は4本しかなく、胴の部分に無数の脚が生えていた。どちらかという蜘蛛というよりアメンボに近いです。

しかし、そいつも此方をじっと見詰めた後、煙のように姿を消した。そして、そいつは私のことを見詰めているように思えました。しかし、そのようなことは今はどうでもいいです。一刻も早く、ポロを追いかけなければ。

怖がっていることもさんを励ましつつ、私達は闇に包まれた林へと向かった。そして、心なしかまた気温が上がったように思えた。しかも前回感じたときよりさらに暑い。火が近寄ってきているみたいでした。それでも……それでも私は

足を止めなかった。自分の為、友の為に。

六章 夜更け

この世はとても残酷・・・そして、とても美しくもある。正直いうと私は・・・この世界では弱者でした。毎日、食事にありつけるかどうかすら分からず、夢も希望もない闇夜を歩いてきた。ただ周りの人に怯え、怒り、そして恨みばかり募らせてきました。

本来、生き物とは群れることを好むことが多いです。そして、群れの中に欠点が多い出来損ないや役立たずが産まれると容赦なく切り捨てる。その一例が私です。自分でも出来損ないになど産まれたくはなかった。

昔は父や母、そして祖母が「貴女は特別な子なんだよ。だから大丈夫。その白い髪は神様から贈り物だ。貴女は貴女の道を進みなさい。」と励ましてくれ、自分に劣等感を抱くことはありませんでした。そして、8年前に祖母が心臓の病でこの世を去り、父が数年前に行方不明となり私達の前から姿を消してしまった。

それ以来、母は壊れてしまった。『アレが彼をさらっていった』と毎日、独り言を呟い

ていました。その当時は父を失なった衝撃で頭が混乱しているのかと思つていましたが、今考えると話は別です。この言動から察するに、母は父に何があつたのかを知つていたようだった。

2年前、ある日、母は父を探しに車に乗つて何処かへ出掛けた。そして事故に遭い、植物状態となつた。原因は落石だった。しかし、場所は確かに山の中でしたが、谷の近くを走つていたわけでもなく、落石するほど大きな岩もなかつたという。警察がそう言つていたのは、今でも耳に残っている。

母は、今も病院のベッドで毎日毎秒同じ姿勢で静かに佇んでいます。それ以来、私は叔父に預けられ、高校へと入学しました。それ以来、人に怯える日々を過ごしてきました。苦痛の学校に帰りたくもない自宅。嫌なことが当たり前になっていき、私の心はどんどん荒んでいきました。

ですが私は今、怪物達が徘徊する闇夜の町にいる。あの日々よりずっとずっと良いです。まだ、家出してから数時間しか経っていないのに、当たり前だと思つていた常識が一気に覆された。さらには、人生初の友達ができました。あの時、彼女のお姉さんに

会わなければ、この出会いはきつとなかったでしょう。彼女には感謝してもしきれません。いつかお礼をしたいものです。

そして、影という異質な存在と出会い、幽霊にも会いましたし、神様にも出会いました。人生最高の日です。こともさんには悪いと思いつつ、私はこの空間が永遠に続かないかと願うようになってしまいました。必ず、終わりを迎えると分かっていたながらも。

さて、そんな私は今、彼女の愛犬『ポロ』を追って林に向かっていきます。先ほどから、呼んでいるように林から犬の遠吠えが聞こえてくるので、それを手掛かりにしつつ、探索を進めています。

小さなトンネルをくぐり抜け、林へと足を踏み入れる。中は、外よりも暗い暗黒の世界が広がっていました。懐中電灯がなければ、足元もろくに見えません。当然、影達も彷徨っているでしょう。ここからはいつも以上に慎重に進まねばなりません。

しばらくするとまた青色のフェンスが道を阻んでいました。ドアノブを掴み、開けようとしても鍵がかかかっていて通ることができませんでした。すると、こともさんがフェ

ンスゲートの間に何か挟まっていたを見つけ、それを引き抜きました。そんなところに物が挟まっていたのですか……。どうやら少し疲れているようです。一旦、落ち着きましよう。

私は深呼吸をした後、こともさんの持っている泥まみれの何かを確認してみました。それは鍵だった。何故このようにところに鍵が刺さっていたのかは知りませんが、これがこの鍵ならば探す手間が省けました。そんなに上手くいくとも思えません。

こともさんが小さい手で鍵を器用にフェンスについでいた鍵穴に入れ、右周りに捻る。すると、カチツと鍵が外れる音がし、フェンスがゆっくりと開いていきました。本当にこの鍵だとは思わなくて、少し驚きましたが、これで先に進めるでしょう。

どんどん暗闇の奥へ進んでいく。すると、何か岩のようなナニカがいた。こともさんが確認しようと懐中電灯の光を岩に向けた。すると、岩が突然顔が開いたように発光し、私達に向かって襲い掛かってきました。

走って逃げようとしたのですが、こともさんは逃げなかった。彼女は冷静にマッチのよ

うなものに火をつけて投げつけました。岩の怪物はその火の灯りに引き寄せられるように進路を変え、私達に見向きもしませんでした。

「凄いです、こともさん。しかし……何故灯りに反応すると分かったのですか……？」

「頭から男の人の声がしたから、咄嗟にしたら出来ちゃったの。『マッチを投げろ』って。」

「頭の中に声が……？こともさん、大丈夫ですか？何かされたわけではないのですよね？」

「うん、大丈夫。」

彼女はなんともないようですが、一旦誰が……。もしかして私達を助けてくれとか？いえ、しかし何者かにより仕組まれた可能性だつて捨てきれません。というより、何故彼女がマッチ棒など物騒な物を持っていたのか、今はそちらの方が気になりますが、細かいことは気にしないで置きましょう。

林に敷き詰められている枯れ葉の一本道を進んでいくと、小さな墓地にできました。このようなところに墓地があったとは……。以前私の暮らしていた街では、墓地という場所は大抵丘の上にはつんと在ったものですが……。小さな町ともなると墓地というものは何処でも構わないのでしょうか。少しだけ、私は疑問を感じてしまった。

人はいずれ皆、この石の建造物の下に埋められ、埋葬される。あの影達は、ちゃんと埋葬されていたのでしょうか。出来ればそうであると祈りたい。しばらく、墓地を探索していると一枚のメモ用紙が墓石の上に置かれているのを発見しました。

メモ用紙には落書きのような殴り書きの文字でこう書かれていた。

ア・・・が迫・・・きて・・・体が・・・そうだ。気温が・・・俺達・奴
を怒らせてしまっ。。もう逃げら。。。

・・・やめておけば。。。。殺さ。。あの山には化け物が住。。てい
る。俺達・・・終わり。。。

ごめん、．．ア．．．

所々が、掠れていて読めなくなっています。これは．．まさか、こともさんのお姉さんを連れ去った犯人のことでしょうか。このメモ用紙から推察するにこの持ち主は、この時点では追われる身になっているのでしょうか。そして、恐らく彼は殺されている。何者かの手によって既に。

ですが、いい手掛かりを見つけたかもしれません。この次は山へと向かってみましょう。お姉さんが見つかるかもしれませんし、もしかしたらポロもそこで生きているかもしれません。

しかし、気になるのは気温がと記されていることです。先程から、私のみ気温が上がるといふ現象が起きているのですが、それと関係あるのでしょうか。そして、誰かに対する謝罪文。もし、この方の遺族と出会うことがあれば、このメモ用紙を渡してあげましょう。

「ルキアお姉ちゃん、何か見つけたの？」

「いい、いえ、何でもありません。さあ、こんなところで道草を食っている訳にもいきませぬね。先を急ぎませうか。」

彼女に今、このメモ用紙を渡すのは止めて置きましょう。もし見られでもしたら、彼女は一人でまた行ってしまうかもしれない。そうなれば、今度こそはただでは済まないでしょう。これはこともさんを守るため、そう自分に言い聞かせて、私はズボンのポケットにそつとメモを閉まった。

結局、墓地ではメモ以外の収穫は特にありませんでした。後、落ちていたのはせいぜいヘンテコな形をしているパズルのピースと小さな松明くらいなものです。

私達は墓地を出て、再び林の奥へと突き進んでいく。途中、岩の怪物達が行く手を阻むように立ち塞がっていたりなど様々な邪魔が入りましたが、私達はそれらを掻い潜り、奥地へと向かう。

やがて鬱蒼と木が生えていた場所から抜けて、巨大な鉄の線が見えました。そう、線路です。あの鉄道の線路。もう使われていない為か、茶色く錆びて朽ちており、とても電車が通れるほど頑丈な物とは思えなくなっていました。

しかし、道は途切れており向かう先は線路を跨いで向かう林。ここを通るのは必然的ですが、配線なので電車が通ってきて引かれるなんてことはないでしょう。・・・多分。

無事に線路を渡り、林の奥地へと進出した私達は小さな広間のような大きさの広場に出了ました。左右には見事な紅色をした百日草が生い茂っていて、まるでちよつとしたお花畑のようです。

そして、私達は気が付いた。そのこじんまりとした広場の中心に白い物体が横たわっていることに。恐る恐る近付くと、それは真っ白な毛並みをした犬の死体でした。しかし、その毛並みも所々に真っ赤な血がこびりついており、かつての美しい容姿は失われていた。

「そ、そんな・・・!?!これは・・・あまりにも酷い・・・。」

死体は車にもでも跳ねられてしまったのか、少し捻れていて強く地面に叩きつけられた痕跡がある。上を見上げてみますと、そこには崖沿いに道路がありました。しかもかなり高度な高さで、落ちたら人溜まりもないでしょう。

「ポロ！」

声を上げて、こともさんが犬の元に駆け寄っていく。そしてしゃがみ込み、手を当てて犬の身体を小さく揺さぶる。まるでその犬がまだ生きているかのように。寝ている犬を起こすかのように何度も、何度も揺さぶっています。

「ポロ、起きて。」

辺りには静寂が漂っている。ポロはくたつと横たわったまま、微動だにせず返事をしない。

「ポロ、一緒に帰ろう……。。」

彼女が幾度も揺さぶっても、ポロの臉が開くことはありません。必死に揺さぶる彼女の様子を見ていると胸が締め付けられそうです。辛すぎます。たとえ犬だろうと彼女にとつては、大事な存在。家族を失なったときの悲しみは誰よりも分かっているつもりです。

「ポロ、お友達も出来たんだよ。大きなお姉ちゃんのお友達。だから帰って、一緒に遊ぼうよ。」

その一言からしばらく沈黙が続く。なんと声を掛ければいいのかわからない。頭に良い言葉が浮かんで来ないのです。これまで色々、襲われてきたりもしましたが、始めて人の役に立つことができたと思ひ込んでいました。しかし、いざ大事な場面ですらと問われると私は明確に答えられる自信は……ありません。

私は、必死に揺さぶる彼女を黙ったまま、見守ることしか出来なかった。

「……ねえ、起きてよ……。」

幾ら揺さぶっても、目を開こうとしないポロから彼女は手を離し、立ち上がって此方に振り向いた。目元を見ると彼女は、涙を浮かべていました。私が2度も味わった家族を失なった時の悲しみの涙。

あの時、両親を立て続けに失なった私と同じです。私はなんとか彼女を慰めようと声を掛けようとしたが、しかし・・・

「い、いともさん。あ、あの・・・。」

言葉が詰まって、思うように発言できない。私は最低だ、無力だ。人が悲しんでいるときに声を掛けることすらできないなんて。そして、彼女は自身の腕に顔を埋めて、泣き出してしまいました。辺りにすすり泣く、彼女の声が静かに響きわたる。

私は彼女を抱き締めました。何故反射的にこんなことをしたのかはわからない。しかし、あの時だって私が欲しかったのは一緒に悲しんでくれる人だった。いつだって私は一人で泣いて、悲しんで、苦しんでいました。

このような状況で一番欲しいと思うものは皆、同じはずです。せめて、私は彼女にとって悲しみを分かち合える存在になれるようなれば良いと自分なりに考えた結果なのでしよう。

「大丈夫です、こどもさん。彼は・・・ポロは貴女の事をきつと誇りに思っていたはずです。私は彼に何があつたのかはご存知ないですが・・・あれだけ貴女を呼んでいたんです。か、彼も貴女が苦しんでいるの、のは望んで・・・いないと思いますよ。」

少し自分の言つた事に自信が失くなり、言葉が詰まりました。更に、胸がきゅつと締め付けられる感覚に陥る。視界が霞んできていたので、手のひらで自分の目元に触れると濡れていた。自分も泣いていることに気付くと、自然に片目から涙が溢れだし、頬を伝う。

「私も家族がほしい・・・。失つてばかりは嫌です・・・。」

そう独り言を呟くと、気持ちちが堪えられなくなり、滝のように涙が流れだした。そし

て、私もこともさんと一緒に泣き崩れてしまった。



暫くしてこともさんが泣き終わった後、私に「一つお願いをしてみました。」ポロにお墓を作つてあげてほしい」ということだった。それは、ポロをここで死なせてしまったという自分への教訓でもあると彼女は言っていた。

自分より年下の子に泣き止まれてしまつては此方の面子も丸潰れです。私も目元を拭い、手頃な大きさの岩を探し始めた。

こうなれば、必ず彼女の姉を救出しなければならぬ。彼女の家族はたつた今、目の前で命を散らした。ならば尚更、姉を見つけてあげなければなりません。

姉まで失なつたら彼女は……どうなつてしまうのでしょうか。正直、その事態だけは絶対避けなくてはなりません。でないと、彼女は私よりも悲惨な人生を歩むことになるかもしれません。私には進めなかつた道を彼女には歩んでほしいから。そう思いな

がら、私は墓石となる石を探した。



あれから私達はポロを埋めた後、大きな岩を見つけて墓を作った。正直、ポロには私も感謝せねばなりません。彼は悲惨な道を辿ってしまいました。それがなかったら私はこともさんに会うことは出来なかったでしょう。せめて安らかな眠りを送ってほしいものですね……。

こともさんが百日草を墓に備え、手を合わせてこの場にいないもう一人の友への弔いと注意を怠らない教訓を込めて、私達は祈りを捧げた。そして、その墓を一旦後にして、私達は搜索を開始しました。

ここから戻る為に私達は今、あの配線となった列車の線路を渡っています。途中には、朽ちてボロボロになった踏切にコオロギが静かに鳴く草むら、そして目玉の化け物。それらは此方を捕捉すると、目玉を裏返すように形状を大口へと変化させて、私達的身體に食らいつこうとしています。

何が切っ掛けでこのような姿になつてしまつたのか、私には予想も着きませんが、きつと彼らもひどい目にあつたのでしよう。追いつけないと悟り、諦めた彼らの恨めしそうな目を見詰めていると漂う憎悪の中に引き込まれそうになる。

影達を警戒しつつ、線路を進んでいくとプアアアンというけたたましい音が後ろから聞こえてきました。振り向くと、今は使われていないはずの 鉄道が線路に沿つて近付いてきていました。

こんなところに列車が：：？しかも、その列車は此方に向かつて走行しています。このままでは激突してあつという間にこの世ともお別れとなるでしょう。しかし、ここには逃げ場がありません。横にそれるにはとてもではないほど不安定な足場が広がっており、あまりにも人間が通れそうな道ではありませんね……。

前には一直線に伸びる線路の道、後ろからは幽霊列車。ならば、とるべき行動は一つです。

「走ってください!!」

私の大声に反応したこともさんが、前方に向かって全力で走り始めました。私も続いて全速力で走り出す。ですが、電車との距離は遠ざかるどころか逆にどんどん縮まってきました。

(このままでは追いつかれる・・・!)

気が付くと電車は、目と鼻の先まで来ていた。もう無理です、諦めるしかありません。でもせめて、せめてこともさんだけでも・・・!!

私は先に走っていたこともさんに向かって、飛び付き、身体に覆い被さるように抱き締めた。これなら即死は免れるはず・・・!すると、何処からから犬の鳴き声が聞こえてきました。

そして、気が付くと列車は我々の前方を通過していました。・・・?どういうことでしょうか。・・・。こともさんも無

事なようです。と、とりあえずは助かったようですな。

しかし、彼女の無事を確認しようとする彼女が涙を流しながら、手の内に何かを握りしめていました。それは首輪だった。大きさからすると、犬の首輪でしょうか。

「こともさん、それは……？」

「……ポロの首輪。」

「そ、そんな……それではまるで……。」

まるでポロが私達を守ってくれたようではないですか。私のことをまだ心配してくれている。半分、私達が殺したようなものなのにそれなのに……。この思いを無駄にするわけにはいきません。今は悲しみに明け暮れるのではなく、前へ進まない。私ほこともさんの肩を両手で掴み、話し掛ける。

「いいですか？こともさん、ポロは貴方のことを愛していたんです。いつまで見守って

てくれます。でも彼の思いに報いたいなら、必ずお姉さんを見つけてみましょう。私も全力で協力します。こともさん、悲しむのは後にして先に進みましょう。夜の道では決して振り返ってはいけません。どんなことがあるかと必ず。」

そう、かつての私のように振り返ってばかりでは何も動かない。貴方はそれを教えてくれました。これは私が望んだことです。賭けてみたくなつたのです。彼女が切っ掛けで私の何かが変わるかもしれないことに。

「……うん、分かった。もう泣かない、行こう。」

そして、私達は再び足を踏み出した。悲しみを乗り越えて進まなければ。人生とは苦難の連続です。振り返っては何も始まらない。必ずお姉さんを探し出しましょう。

「……ところで、ルキアお姉ちゃん。ルキアお姉ちゃんにはお母さんとかいるの……？」

「……。」

私はその質問にだけは答えることは出来なかった。回答に困っているとまた少しだけ、周りの気温が上昇した気がした。

七章 丑三つ時

夜は深い。人間は皆、闇という恐怖を恐れている。それ故に、妖怪という幻想の存在を創造し、闇夜への恐怖を紛らわしているのでしょう。恐怖とは弱みでもあり、危険を察知する信号でもあります。

今、私はその恐怖という感情に押し潰されそうになっています。え、理由ですか？それは目の前にこれまで予想だにしていなかった恐ろしい怪物が佇んでいるのですから……。

——時は遡ること数十分

私達は一旦自宅に引き返し、友の死により高ぶった感情を沈めていました。それは私の友達である『こともさん』の愛犬、『ポロ』の死によるものだった。

なんとか彼女の心境を壊さずに慰めることは出来たものの、今度は私の心が沈み始めていたのです。家族というものをほぼ全て失なった私にとって、他人であろうと友の死は少々キツイものであった。見ていると、あの時一変に両親を失なった時のあの感覚が甦るのです。

死に目にも立ち会うことが出来ずに、私の母はこの世を去りました。そして、父は原因不明の消息を絶っている。このなんとも理不尽な現状に私の心は耐えられず、一度崩壊した。あの時、私は小学生でした。耐えられるほど、私の心は強くなかった。

今もそうです。あれから何も成長していない。情けないようですが、ポロの死は飼い主であることもさんよりも私への負担の方が大きかった。なので私は今、彼女と姉の寝室で横になって休息を取っている。

これが俗にいう『心の傷』というものなのでしょう。思い出すだけでも、胸が張り裂けそうになり、瞳から大量の涙が溢れだしてくる。こともさんを助けなければ。今までは、その事だけを考えて他の事は気にしないことにしてきました。これではまたいつもの心情に逆戻りだ。

こともさんは心配そうに此方を見詰めています。何処かソワソワしている様子が伺えます。それもそのはず、彼女は今、唯一の家族である姉を何者かに連れ去られているのです。落ち着いていられる訳がありません。

いつまでも、私の為だけに足を止めてほしくない。そう思った私は、こともさんに先に搜索を開始してもらうことに決めました。

「こ、こともさん。す、すみませんが先に行つてもらつてよろしいでしょうか。私もすぐ、追い付きますので……。」

さつき、一度大泣きをしてしまったせいなのか、声が震えており上手く喋れなかった。しかし、彼女は更に心配そうな目線を此方に向けてきました。

「で、でも……。」

「私なら大丈夫です。さあ、行つて下さい。」

そう言うのと彼女は、洩々玄關の方面へと向かつていった。戸を開き、靴が地面と擦れる音が2階まで聞こえてきました。

正直、私には疑問があつた。何故、こともさんは家族を失つていても怯まず、前へと進めるのだろうか。残された家族に愛されてきたからだともいふのでしょうか？しかし、それなら私だつて同じです。父が行方を眩ました時だつて、少しの間でしたが、母は私の事を気に掛けてくれた。

後に叔父に虐待されることになつたという苦い事実もありますが、それだけではないでしょう。生まれつき、身体のできが違ふとか？・・・それでは納得がいきません。悲しみは誰にでもある。それは人間皆、平等に兼ね備えている。なのに、この差は何なのでしょううか。

わからない。何故、そのように振る舞えるのかがわからない。何故、そのようにすぐに立ち直ることができるのか。家族を失つたのに、2度と戻つてこないのにそれでも、前へと進んでいく。

憎い。私は周りにいる人間全てが憎かった。羨ましかった。何故、私だけ白い髪なのか。私だけこんなにも弱く産まれてしまったのか。それでも私は頑張ってきた、耐えてきた。なのに結果がついて来ない。どうして……。

悲しみの感情と憎悪が入り乱れて、心がぐちゃぐちゃにかき混ぜられる感覚に陥る。そんなとき、不意に母の言葉が頭に浮かんだ。そうあれは母が死ぬ、1週間程前の事ではなかっただろうか。

（ねえ、ルキア聞いて。貴女、その髪の毛で落ち込んでるんじゃない？）

そうですお母様。私は確かにアルビノで髪色が薄いですが、お母様のように真っ白という訳でもありません。薄汚い灰色です。何故、私はこのように醜いのでしょうか？

（……ルキア。今から魔法の言葉を教えてあげる。もし辛くなったら、この言葉を思い出して。）

そうだ、あの時お母様は。

（貴女は特別。誰も持っていない物を沢山持つてる。だから、落ち込まなくていい。貴女は、それを誇りに思っている。人に追いつこうとして走らなくてもいいの。自分に合わせた生き方をしなさい。後、友達を大切にね。沢山作っておくだけ損はないわ。それに――）

こう私に言ってくれました。

何年も前のことなので最後の方、何とおっしゃっていたかは忘れてしまいました。しかし、母は自分を過小評価するなど言ってくれていた。それだけは間違いありません。それと、友達を大切にしろとおっしゃっていた。

泣いている場合ではない。せつかく出来た友達のを足をこんなことで引つ張る訳にはいきません。それに落ち込んでばかりでは、死んでしまった母にも申し訳が立たない。

私は腕で目元の涙を拭い、起き上がった。そして、急いで玄関へと向かう。靴をちや

んと履けずに外へと飛び出してしまいました。今はそんなことを気にしている余裕はない。

「ハ、ハともさんは……？」

慌てて辺りを見渡してみますが、それらしき影は見えない。おそらく、私の言いつけ通り一人で探索しているのでしょう。私はなんということをしてしまったのか。あんな小さな子に夜中の町を一人で徘徊させてしまうとは、人として最低です。早く見つけてあげないと事態はドンドン悪化していくあまりです。

道に出てみてもやはり姿は見えません。私は手当たり次第、町を探索した。近くにあらゆる仏壇の所にも、町全体が見渡せるほど高い丘、この町唯一のコンビニエンスストア、大通り、商店街などあらゆる場所を探索しても見つかりません。

「はあ、はあ……一体何処へ……。」

お願いです神様、どうかあの子と合わせて下さい。でなければ私は取り返しのかな

いことをしてしまおうでしょう。どうか、どうか……。今まで神様に祈ったことなどありませんが、今回ばかりは流石にお手上げです。町中を搜索したのに、全く見つからないとなると……。

すると、まるで祈りが届いたかのように何処からか声が聞こえてきました。しかし、声ははつきりとは聞こえず、小声で話しているかのようなひそひそとした音しか聞こえません。立ち止まりながら注意深く、耳を傾けるとそれはなんと頭の中に響いていることに気が付いた。そして、それはこう語っているように聞こえました。

『あの子は鉄の建物にいる』

『袋の怪物がさらっていった』

『ヤツから少女を奪い返せ』

声は何重にも重なって響いていて、私にはこの三つの言葉しか聞き取ることが出来ませんでした。しかし、このタイミングでいきなり御告げが聞こえてくるとは流石に怪しすぎます。ですが、このままでは拉致が開かないのも事実。不本意ですが、私はその言葉に従って足を進めました。

声に導かれるまま進んでいくと、どうやら工場がある方に私は向かっているようです。『鉄の建物』とは工場のことだったのですか。確かに彼処はほぼ全ての素材が鉄で出来ているので間違いありません。そして『袋の怪物』とは恐らく『よまわりさん』のことなのではないでしょうか。

噂話では夜遅くまで子供が歩き回っていると、よまわりさんがやって来て何処へ連れ去られてしまうらしい。今までは私が隣に居たため、連れ去る隙がなかったのです。しかし、私が少し目を離れた隙にやられてしまった。

私の推測ではこんなところでしょうか。『よまわりさん』は危害を加えてくるような怪物ではないはずですが、何もしてこないというのは有り得ません。一刻も早く工場に着かなければなりません。

現在、私は商店街に向かう方面の一本道を進んでいます。少し小走りで歩いていると、急に気温が上昇した。今度はいつものように少し上がった訳ではなく、石油ストーブをつけた時のように火照るような暑さだった。

そして、頭に響いていた声が急に途絶えました。嫌な予感しかしません。周りを見渡して見ますが特に変わった様子はありません。再び私は前方へと目を向けるとそこにはナニカがいた。明らかに今までに見てきた者達とは別物の何か。

それは両生類のような見た目をしていて例えるならサンシヨウウオかウーパーラーパーに近い形をしていた。しかし、色は火山岩のような黒色で所々から朱色の模様のような色が確認できます。それだけではありません。全身には両生類にはないゴツゴツした煙突のような突起物がズラリと並んでおり、そこから黒い煙を噴射していた。

そいつが一步一步、此方に足を進めると徐々に気温が上昇していく。額から汗が滴る感触がします。それと同時に背中にゾワリと寒気が襲い掛かってきました。

初めてでした。これ程までの殺気を感じたのは。怨霊とは比べようにならないほどの凄まじい圧力が私を威圧してくる。後ろを振り返ると、影達の姿が消えていました。いつもならば、頭がサイレンのように回転している影が2体ほど徘徊しているはずなのに。恐らく、この化け物が出現したことが原因でしょうか。影からも恐れられているなん

て……『よまわりさん』と同様に異質な存在のようです。

はっ!?こんなことを考えている暇はありません。一刻も早く逃げなければならぬのに、何をやっているのでしょうか。ですが、このままでは向かう先の工場から真逆の方向にしか逃げる事が出来ないため、目的の場所から遠ざかってしまいます。どうかヤツの気を反らさなければこともさんの命が……。

両生類のような化け物は徐々に此方に向かう速度を上げており、今すぐ走りだしてもしたらあつという間に追い付かれてしまうかもしれない。そして、なにより気温が上昇しているせいで体力が奪われています。私は一か八か足元に落ちていた小石を拾い、森の中へ投げつけてみました。

当然ながら化け物は見向きもしません。それどころか、ヤツを刺激してしまったのか凄まじい速度で此方に向かってきました。そして、こちらを掴もうと右腕を伸ばしてきました。

「グッ……!?フッ……!」

間一髪、前に横転することで攻撃を避けることに成功し、それどころかヤツの裏側に回ることにも成功したのでこれで逃げながら、工場へと向かうことができます。

「急がないと・・・！」

私は全速力で駆け出し、ヤツから遠ざかろうとしました。しかしヤツもただ、黙ってみている訳ではなく、此方に向かって突進してきています。は、速いッ！このままでは、追い付かれるのも時間の問題です。何か別の手を考えなければ、しかしこの状況を切り抜けるには一体どうしたら？

すると、後方でズドンという巨大な物体同士がぶつかり合ったような音が聞こえてきました。振り返るとそこには別の存在がああ、怪物とにらみ合っていました。それは桃色をした肉の塊のようなナニカ。肉の中心には縦に割れたようにぱっくりと穴が空いていて、そこにはおびただしい数の歯が並んでいます。さらに口の中には仮面のような物体がくつついており、まるで目玉を表しているようです。

また別の怪物・・・!?しかし、これは好都合です。幸いヤツらはお互いに敵対しているようで此方に見向きもしません。すると、あの両生類の姿をした化け物が肉塊の化け物に噛みつきました。負けじとその肉塊も噛みつきを振りほどき、体当たりを仕掛けています。その戦いにより、気温が先程の2倍くらい上昇した気がします。

「暑ッ・・・!」

このままでは焼け死んでしまいそうです。私は戦闘をしている隙に、町の外れにある工場に向かって全速力で走りだした。

ですが、先程まで声に導かれるままに進んでいたものですから、全く工場があるのか検討が付きません。さて、どうしたものでしょうか・・・。すると、私から50メートルほど離れた場所に人影のような物が出現しました。それはあの電車に乗っていた軍服姿の男だった。しかし、頭が人間ではない。黄金色のトカゲのような頭をしており、とても人間とは思えない外見をしていました。

その男は何も言わず、私から見て左斜めの方向に指を指しました。まるでそちらに行

けと指示しているかのように。すると、その男は姿を消し、一瞬にして指差した方向の道へと移動していました。また彼は何かを指して立ち止まっている。

「彼処に行けということでしょうか．．．？」

私は何故かその男の言うとおりに進んでしまった。確証はないのですが、あの男は信用できる。そんな気がしたのです。それにあの男は会ったことは一度もないはずなのに、どこことなく見覚えがある。いつ、何処で会ったことも分からないのに何故．．．？

今度はその男の指差す方向に導かれていく。私が指差す方向に向かうごとに男は向かう先を示してくれた。そして、気が付くと私は廃工場のような場所へとたどり着いていました。恐らくここが工場．．．！

「あ、あの、ありがとうございます．．．!?」

道案内をしてくれたお礼をようと振り返ってみると男は消えていました。何故あの人は私達に協力してくれる気になったのでしょうか。色々と謎は残りますが、私はこと

もさんを救うことに集中することにしました。

ですが、私の力ではこの大きな鉄の門を開けることは非常に困難です。何しろ、ただでさえ重い鉄で出来ている大きなゲートなのに、下に取り付けられている滑車は錆びび付いているので、びくともしません。よく見ると、ゲートの取手の部分に大きな南京錠が取り付けられています。

どうしたものかと悩んでいると、門の向こう側の暗闇から誰かが走ってきています。どうやら少女のようです。赤いリボンにウサギのポシエット・・・それは私が探し求めていた人物でした。

「いともさん!」

私は反射的に大声で彼女を呼んでいた。少女は気づいたのか、速度を上げて此方に向かつてきています。こともさんは必死な表情をしていて、まるで今まで何かに追われていたかのようにでした。こともさんはポシエットから錠のようなものを取り出し、それを南京錠にかけた。すると、びつたりと型が合い、錠前が外れた。

「待つててください。今開けますので……！」

私は全身に力を入れ、ゲートを掴み開閉を試みました。そして、何が外れたかのようにガタンと音がした後、ゲートの重量が軽くなり簡単に開けることが出来ました。こともさんが飛び出してきて、私の太ももに抱き付いてきました。

「ちよ、ちよつと……。」

「お姉ちゃん……怖かったよう……。」

彼女の声は若干震えており、今にも泣き出してしまいそうな声でした。手にはくしゃくしゃになったお守りのようなものが握られている。何があつたのか聞こうか悩みましたが、私の方も大変だったことも踏まえて今は何も聞かないことにしました。ひとまず、彼女を家に連れ帰ることにしましょう。話はそこで聞くことにします。

私はこともさんの手を繋ぎ、彼女の自宅へと足を進めた。私はこの後大事な親友に悲

劇が訪れることをまだ知らない。そして、また少しだけ気温が上がったような気がしました。

漆章 丑三つ時

これはルキアが拐われた少女を探し回っている間、工場で少女の身に起きた体験談である。それを少女目線でお伝えしよう。

今、わたしは『お姉ちゃん』と一緒に『お姉ちゃん』を探している。一人はわたしが小さな頃から一緒に暮らしている正真正銘の姉。そして、もう一人のお姉ちゃんはさつき道端で出会った灰色で綺麗な髪の手つ優しい人。名前は『ルキア』という。外国の人が持っているみたいな名前です。少し格好いい。何も事情を知らないのに何度も助けてくれて、それでもまだお姉ちゃんを探すのを手伝ってくれている。

でも、さつきわたしはもう一人の家族を失ったばかり。小さいころにお姉ちゃんが拾ってきた白い子犬。わたしが死なせてしまったのだ。毎日、道路を元氣いっぱい走る鉄の塊、あれに跳ねられてしまった。夕暮れ時までいつものようにお散歩していたのに、今ではもう彼はあの冷たいお墓の中にいる。

辛くて、苦しくて悲しい感情で胸がいつぱいになった。でも、ルキアお姉ちゃんはそんなわたしを励ましてくれた。大丈夫、泣かないでつて。彼女は敬語で喋る癖があるが、わたしにはそう聞こえたのだ。

今では彼女はもうわたしの家族みたいな存在になってきている。そういえば、これまであまり気にしてこなかったが、ルキアお姉ちゃんの家族はどんな人なのだろう？お父さんはいるのかな？お母さんはやっぱりお姉ちゃんみたいな綺麗な白い髪の毛をしているのかな？聞いてみたいことが次々と浮かび上がってきた。

そうだ、折角だから今聞いてみよう。この先会えるか分からないし、この落ち込んだ空気も少しは良くなるかもしれないから。わたしは我慢できずに思わず聞いてしまった。彼女にとって禁句の言葉とも知らずに。

「……ところでルキアお姉ちゃん。お姉ちゃんにはお母さんはいるの？」

「……。」

お姉ちゃんは少し驚いたように此方を見た後、わたしから目を反らした。お姉ちゃんは答えてくれなかった。

もしかしたら、お姉ちゃんもわたしと同じでお母さんがいないのかも。わたしもお母さんは気づいたときにはいなくなっていた。でもお姉ちゃんにとつては穏やかにできる話ではなかったみたい。

でも、ルキアお姉ちゃんならそんな辛い事が過去にあつたとしても、話してくれると思つた。だって、お姉ちゃんは強いから。わたしなんかよりもずっとずっと。

暫くわたしたちは沈黙しながら、暗い夜道を歩き続けていた。あれからお姉ちゃんは口を利用してくれなくなつたので、わたしは心配して俯いた彼女の表情を覗き込んでみた。

お姉ちゃんは泣いていた。よっぽど辛い事を思い出させてしまつたのか、滝のように涙を流して泣き崩れていた。それでもわたしに怒ろうともしなかつたのは、やっぱり大切に思つてくれてるからなのか、それとも恥ずかしいと思う彼女なりのプライドがあつたからなのか。

詳しくは分からないけど、わたしはお姉ちゃんを悲しませしまつたことは間違いない

みたい。

わたしたちは口を閉ざしたまま、家に向かって歩き続けた。



結局、何も分からないままわたしたちは家に帰ってきた。そして、ルキアお姉ちゃんは泣き崩れてわたしとお姉ちゃんの自室へとフラフラと向かい、そのまま寝込んでしまった。擦つてもお姉ちゃんは無言でただ涙を流しているだけで、一言も喋らない。

もしかして、もう限界だったのかも。だって、お姉ちゃんはいつだってわたしのことを助けてくれた。でも、平気そうにわたしに対して振る舞ってくれていたのは、わたしを悲しませないようにするためなだけで、本当はただの痩せ我慢だったのかな。

だけど、お姉ちゃんは一切答えてくれない。なら、お姉ちゃんは休ませておこう。わたし一人でもなんとかなるかもしれない。そうとなればぐずぐずしていられない。わたしはお姉ちゃんには黙って夜道を探索することにした。

心配するかな・・・？いや、お姉ちゃんには散々助けて貰ったんだ。今度はわたしが頑張る番。こんなに助けてもらってお姉ちゃんを助けてもなんだか申し訳ない気持ちになつてしまう。ルキアお姉ちゃんみたいな格好いいお姉ちゃんになれるように頑張らないと。

わたしは玄関から再び外へと外出し、正門を抜けた。門に取り付けられた赤いポストには何か手紙が入っていた。しかし、それはただの嫌がらせの手紙。属にいう『不幸の手紙』というもの。ただ悪口を書いて嫌だつたり、嫌いと思う人の家に行つてポストに入れるという極めて軽い嫌がらせ。

わたしの家には何故か夜になると毎日届くとお姉ちゃんが言つていた。どうせいつものような内容が書かれているのだと思い、わたしはポストから手紙を引き抜き、封を切つて中身を確認した。

手紙にはボールペンのような字面で一文だけ書かれていた。

背後にや気をつけな。足元すくわれるぞ。

何これ……。そう思つて振り返ると突如、わたしは何者かに麻袋のようなものを被せられ氣を失つた。



氣が付くと得体の知れない場所にいた。辺りは一面茶色の塗装が施された壁。というより鉄の壁が錆びて茶色くなっているだけみたい。そして、狭い。何かに閉じ込められているのかな。

わたしは手探りで壁に触れていくと、突然蓋が外れたかのように壁が前方へと倒れ、鉄の箱から解放された。

「ひゅいッ!？」

言葉にならない悲鳴を上げてしまった。わたしは恐る恐る這いずりながら、箱の外へと出て今まで入っていた物体を確認してみると、どうやらコンテナに押し込まれていたらしい。壁が外れたように思えたが、ただ蓋が外れただけだったよう。 辺りは外よりも暗く冷たい雰囲気覆われていて、ガタンガタンと鉄が鳴る音が聞こえてくる。

「うう……怖いよお……。」

あまりにも暗いので、思わず弱音を吐いてしまう。足元もろくに確認できない。心臓の鼓動が速くなる。こ、こんなことじゃお姉ちゃん達に笑われちゃう。わたしは懐中電灯を点灯させ、勇気を振り絞って建物の中を歩きだした。

でも、十歩ほど進んだ先に巨大な門が見えた。ゲートのような形をしていて、頭上を見上げると煙突のような突起物が建物のでっぺんに目視できた。

ここは工場なのかな。ど、どうしよう、早くここから出なきゃ。わたしはゲートが開かないか試みたがびくともしない。開かないと分かった瞬間に焦りと恐怖が募りだし、冷や汗が頬を伝わる。背筋がゾクゾクしてきた。

すると、ゲートの向こう側に袋を持った軟体動物のような物体が接近してきた。顔と

思われる部分には仮面がついているかのようにツルツルしていて、横に割れたヒビの部分が目に見えた。

「な、なに……。」

すると、突然それは

裏返った

無理矢理皮を裏返し、全身が肉塊に覆われている形へと変貌した。真ん中には縦に亀裂が入っていて、そこには歯がびっしりと並んでいる。袋を持った軟体動物の姿をしていたとは思えないほど風変わりしている。そしてそれはこっちにいきなり突っ込んできて、ゲートに直撃した。

凄まじい衝突音が建物中に響き渡る。

わたしは反射的に出口とは反対方向へと逃げ出した。今までのお化けとは何か違う。確かに今に至るまで何度か見掛けたことはあるけれど、襲い掛かってくることは一度も

なかつた。

もう一度、振り返るとゲートをすり抜けてきたかのように、門の内側に入られていて此方を食べようと大口を開けて迫ってきている。

必死になってわたしは逃げた。そして、さつき入っていたコンテナの中に逃げ込み、蓋を閉める。何とも言えない音がわたしの周りを蠢いているのを感じる。やめて、来ないで・・・！

すると、もう一つ何かがやって来たのか、生き物の息づかいが聞こえた。コンテナの中が蒸し風呂のように暑くなった。これがルキアお姉ちゃんが言っていた・・・！ルキアお姉ちゃんは今時々、急に暑くなったと言っていたのを思い出した。お姉ちゃんの気のせいだと考えていたけどまさかお化けの仕業だったの・・・？

思考している内に化け物のような唸り声が出た。どうやら、外にいる肉塊の化け物に威嚇しているよう。そして、煙が吹き出しているみたいな噴出音が鳴り出し、腐敗した卵のような悪臭がする。

山登りした時によく臭ってくるやつだ。鼻が曲がりそうなくらい酷い臭い。でもわ

たしは両手で鼻と口を両手で押さえて、必死に息を殺す。ここでくしゃみでもしてしまえば、居場所がバレてしまう。少しでも静粛を保つため、わたしは体育座りをして音をこの場から消し去った。

数十秒後、外で聞こえてきた紛争の音が嘘のようにピタツ、と治まった。しかし気温はそのままだし、まだ腐敗臭が鼻の中に入ってくる。どうやら、あの肉のお化けは何処か行っちゃったみたいだけど、もう一体いるお化けは残っている。

息づかいが再び聞こえてくる。近くに来ているのか、蒸し風呂から火山にでもいるような気温にはね上がった。あまりの暑さに汗がポタポタと額から落ちてゆく。

絶体絶命だ。このままでは熱死してしまうだろう。でもかといって、何の考えもなしに飛び出してしまえばお化けに襲われて終わり。どうすることも出来ずに、わたしは体育座りをしながら息を潜めているしか出来なかった。

すると突如、あの猛暑日のと きみたい な暑さが急激に低下し、元の涼しげな温度へと戻った。それと同時にコンテナから伝わる温度で感じていたお化けの気配も煙のように消えていた。

もう行つたかな……？わたしは入り口の方へとジリジリと近寄っていき、ゆつくりと蓋を開けた。そこには最初から誰も居なかったかのように静まり帰っている工場的美景が目飛び込んできた。安心して胸を撫で下ろしたわたしはコンテナから出て、安全を確認する。だが危機はまだ去ってはいなかった。足音がするのだ。カツン……カツン……と靴を履いているときの足音がゆつくりと忍びよる。

音のする方向を確かめようと耳を傾けてもここは工場。壁中に音が反響してあらゆる方向から聞こえてくるため、何処から近付いてきているのか把握できない。でもこのままここで踞っているわけにもいかない。びくびくしながらここに隠れていてもお化けに捕まるのは時間の問題だ。

意を決してわたしはコンテナを飛び出し、工場の中をひたすら走り回った。宛もなくただひたすら走る。息が上がってきてわたしは走るのは限界を感じて急停止する。心臓が痙攣している音が全身に伝わってくる。振り返るともう足音は聞こえてこなくなった。安全を確保したと思い、前を向き直して、懐中電灯を付けると

「ばあッ!!」

と脅しの声が目の前で発せられる。わたしは今まで以上に驚愕し、思わず尻餅をついてしまった。懐中電灯も落としてしまい、一瞬チカチカ明かりが点滅する。

「ハッハッハッ！見事に引つ掛かったな。サプライズは大成功か？・・・ん？何をそんなにびくびくしているんだ？別に私はそんな怪しい者じゃない。ほんの冗談だよ。ほら立て。」

わたしは手を引いてもらい立ち上がらせてもらった。手を引き上げてくれたのは外国人の男だった。ボサボサの金髪に、垂れ目に青色の瞳。服装は黄土色のジャンパーにジーンズ。いかにも欧米の人っぽい身なりだ。顔立ちからして40代前半の中年期くらいだろうか。身長はルキアお姉ちゃんよりも大きい。

でもなんでこんなところに男の人がいるんだろう。ただでさえ、普通の人でもなかなか寄り付かない場所なのに。しかも大人だし外国人。子供以外にはお化けの姿は認識できないと本当のお姉ちゃんが言っていた。でも襲われるのには違いはないはずなのだ。そしてあまりにもヘラヘラとしてゐるその軽快な様子にわたしは少し恐怖を感じ

じた。

「なんでわたしを脅かしたの？」

「歩き回ってたら、いたいけな少女がビクビクと怯えながら工場を彷徨っていたもんな。ちよつくら可愛がつてやりたくなっただけさ、へへ。」

「おじさんはどうしてここへ？」

「んあ？ ああ、そうだな……。ちよつくら人探しつてどこか。」

「じゃあ、ここは危ないよ。だつてここには……」

「お化けが出る……。だろ？ 知ってるよそれぐらい。承知の上でここにいる。」

おじさんは全ての質問に軽く答えた。本人は怖いとか恐ろしいという感情を思っている様子はなく、よく昼間のときにみる暇している社会人の態度だ。お父さんよりも度胸があるというか、怖いもの知らずというか……。

「おじさんは何をしに来たの？」

「ああ、…… いやいや、俺ばつかりが質問されてる側じゃないか。機械じゃないんだ。私にも質問させろ。お前こそ……。なんでここにいる？ もうとつくに子どもはおねんね

の時間だろ。」

指を此方に指しながら、彼は疑問を問い掛けてくる。わたしは正真正銘本当の事を伝えることにした。

「お姉ちゃんを探しに来たの。でも、よまわりさんに拐われてきちゃって・・・。」

「ははあゝん。なるほど、あのフェミニスト野郎が・・・。まあいい、お姉ちゃんつてのはどんな見た目をしてる？かなり長い間ここに居座つてるからもしかしたら、見掛けたかもしれない。助けになるよ。」

ジェスチャーを駆使しながら、おじさんは質問を返してきた。かなり怪しく不気味な人ではある。けど見た目ほど悪そうな人でもなさそうなので、思いきつてわたしは全てを打ち明けることにした。お姉ちゃん達の為だったら、どんなことをしたって構いやしない。



「ふむふむ、分かったぞ。あの嬢ちゃんだな。つい数時間ほど前なんだが……君と同様にコンテナに閉じ籠っている奴がいたんだ。その制服を来ていたか定かではないが、それくらい奴が一度やって来たことくらいは覚えてる。」

「本当？じゃあ、今お姉ちゃんがどこにいるのか分かるの？」

「分かるにや分かるが、今はもうここにはいないぞ。」

「？」

「なんていうか……腕みたいな奴が来て連れ去っていったな。おつと、怒るなよ。私だって君の重要人物だって知らなかったんだ。」

「そう……分かった。」

わたしは下を俯き、考え込んでしまった。一度お姉ちゃんはここに来ていたのにわたしはみすみす逃すようなことをしてしまったのだ。これ以上宛もないので、どうしようと困惑してしまっている。

こんな時、ルキアお姉ちゃんがいてくれたら……。そんな事をつい考えてしまう。でも、ルキアお姉ちゃんは今、体調がすぐれないのだ。無理矢理、搜索させる義理も権利もわたしにはない。ひたすら思考を重ねていると、おじさんが何かを閃いたかのような仕草をとり、話し掛けてきた。

「よし、こうするつてのはどうだ？お前の探し人は残念ながら行方知れずだから搜索を手伝つてやれないが、この鉄臭い工場から逃がしてやる。その見返りとして、私が捜している奴を見つけてもらう。これでどうだ？悪い話でもないだろう？」

わたしは少し悩んでしまった。確かにわたしにとつて今、重要すべき行動はこの工場から脱出し、お姉ちゃんを助けに行くこと。これほど美味しい話もない。疑うべきなのだろうけど、背に腹は代えられない。

この時、わたしは多少の疑問をも持たずに済ましてしまったが、この時に断るべきだったのかもしれない。この後、もう一人できた新しい家族を危険に晒してしまう選択してしまつたとも知らずに。

「うん……分かつた。」

すると、彼は指をパチンと鳴らして歓喜の表現を行う。

「そうこなきや。家族と命に代わるものはないもんな。利口な選択だ。ほれ、あそこを

「見てみる。」

「……?」

「おじさんは工場の上に指を指した。そこには巨大な煙突が聳え立っていた。風化していきなり、当然ながら活動を続けている様子は微塵も感じられない。あの中に何かがあるというのだろうか。」

「あの煙突が見えるか?あの中にはこの工場のメインゲートを開くことができる鍵がある。それをとってこい。そしたら、出口まで案内してやるよ。」

「おじさんは?来てくれないの?」

「それじゃあ、意味がない。さっきのゴタゴタ騒ぎ見てたぞ。お前お化けに立ち向かうとか、逃げないとか、考えたこともない口だろ。これはおじさんからのいわば挑戦状だな。本当に家族を救う気があるなら、迷わず行けるはずだ。」

わたしは少し足を踏み出すの躊躇した。でもお姉ちゃんを救うためだったら、怖くない。それに家にはまだルキアお姉ちゃんもいるんだ。置いてきてしまった責任もある。行かないや、いや行かなければいけないんだ。

わたしは恐怖を乗り越えつつ、黙って煙突へと足を進めた。それを見ていたおじさんは、これからどうなるのか、まるで楽しみにしているかのようにニヤけていた。

煙突に入ると、外の町よりも暗い暗黒が立ち込めていた。当然、照明のスイッチを切り替えても灯りが付く様子はない。頼りになるのはやはり、手元を持っている懐中電灯のみ。暗闇に潜むものを唯一照らすことができる道しるべを信じて暗闇の奥へとわたしは突き進んでいった。



わたしは今、走って逃げていた。何に追われているかというところ『よまわりさん』だった。鍵を無事に取れたと思ったその直後、いきなりできてわたしを食べようと襲い掛かってきたような状況。よまわりさんは鍵を取られたことにとっても怒っていてしつこく追いかけてきている。

おじさんが待っているはずの煙突の入り口まで戻ってきたけど、そこには誰もいなかった。恐らく、わたしがやってくるの見越して先に行ったか、それとも逃げ出したか。

わたしなら後者の方を選ぶと思うな。そうでなければ、気が触れているとしか思えない。

逃げていく内についての間にか巨大な配管を渡っていた。ツルツル滑って思うように渡ることができない。配管の下は高さ8メートル程離れていて、落下でもすれば無事ではすまない。さらには、ヒビと思う部分が錆び付いてギシギシと音を立てている。今にも折れてしまいそうな雰囲気を漂わせていた。

しかし、もう道は残されていない。背筋が凍り付きそうなくらいの恐怖が身体全体に伝わるが、今は悠長なことを言っている場合ではない。後ろには、お腹を空かせたお化け、前には崩れ落ちそうな逃げ場。

気が付いたときには、わたしはその配管の足場を無我夢中で走っていた。全速力で走ったためか、あつさり配管を通過することができた。

一方、よまわりさんも此方側に来ようと同じ道を通過しようとしていたが、重量の関係で足元の配管が錆び付いていた部分でポッキリと折れてしまい、真つ逆さまによまわりさんは落下していった。金属が地面と衝突したと音と同時に、肉が勢い良く突き刺

さったような生々しい音が耳に飛び込んできた。

辺りを見回すと丁度、下へと続く階段があつたので、それを下り様子を調べにいくと、よまわりさんは落下先にあつた古びた電柱に突き刺さつていた。死にかけた芋虫のようピクピクと痙攣している。串刺しになつて身動きはとれないけど、まだ生きているみたい。お化けに生きていると言つていいのか定かではないけども。

今の騒ぎのうちに、いつの間にか出口であるゲートの前にあつたコンテナの場所まで戻つてきていた。わたしは無意識にコンテナの中を覗き込んでいた。理由は分からないう、惹かれるように身体が勝手に判断したのだ。何かが残されていると。

よく見ると、コンテナの奥の角に布で作られた物体が落ちていた。手を伸ばして拾つてみるとそれは御札だった。お姉ちゃんが毎日持っていたあの御札。強く握りしめていたのか、すっかりヨレヨレになっている。つまり、かつてここにお姉ちゃんは来たことになる。あのおじさんの話は本当だったのかもしれない。

「お姉ちゃん……」。

そんな事を考えていると、出口の方面からあのおじさんがフラフラとやって来た。気の緩そうな顔にズボンのポケットに手を入れていた様子から察するに、よまわりさんに襲われずに済んだようだ。わたしは安全を確保出来たと思ひ込み、ひとまず胸を撫で下ろした。

「お〜い、無事か〜？まさか本当にやれるとは思ってなかつたから、見捨てようかと思つちやつたぜ。あの野郎から逃げ切るだけじゃなく、串刺しにするとは。くう〜、あれはスカツとしたぜ。」

相変わらず、緊張感が一切感じられない声でわたしに呼び掛けてくる。少々、緊張感を持つてほしいと願つたが、この人に限つてそれを望むのは無駄だなと子どもながら思つた。

けど彼の様子が少しおかしい。顔の半分が一瞬だが爛れているように見えたのだ。テレビでよく起こる映像のずれみたいな感じで。彼の表情には変化が感じられないが、若干殺気も放っているみたい。

それにまた気温が上昇しているのか、周囲が少し蒸し暑くなり始めた。手元を見ると

お姉ちゃんの御札が微量の光を放っていた。彼が接近した影響なのかは分からないが、嫌な予感がして、心臓が痙攣を始めた。

「だが、お前はやってはいけないことをした。」

付け加えるように彼が話し始める。すると、顔の右側が完全に爛れた姿へと変貌した。溶岩にでもそのまま浸かったかのように、皮膚がどろどろになっていて、黒焦げだ。その姿は最初に出会ったあの黒焦げのお化けを連想させる。いや、それよりももっと酷い。あれは単純にわたしたち生きているもの達への妬みや怒りだったけど彼は違う。まるでこの世の全てを破壊してしまいそうほどの憎悪に包まれているのだ。怨霊など可愛く思えるほど真つ黒な気配を漂わせていた。

化け物の身体が肌が爛れ続けている中、瞳の色素が朱色へと変わった。燃え盛る炎のみたいに白目の部分は真つ赤に燃えているのに、漆黒の色をした黒目がじつと此方を見つめている。その黒目から放たれる冷酷で残酷な眼光はわたしを恐怖で縛り付けるには充分だった。

「その布切れだけはできれば拾ってほしくなかつたぞ。後、少しであの白い髪の小娘を私のものにできたのに……。」

悔しそうに拳を握りしめる彼。布切れ？お姉ちゃんの御札の事だろうか。御札には不思議な力が込められているみたいで、今まで正体を隠してきてきたおじさんの化けの皮を剥ぐことができたのかもしれない。後、白い髪の小娘って？まさかルキアお姉ちゃんの事？何が望みなのだろうか。お嫁さんにするとか……？

「ならば仕方ない。悪いがお前には少々、人質になつてもらうぞ……！」

彼の背中から穴の空いた突起物が出現し、蒸気が吹き出す。辺りには火の粉が舞い、火山にでも立っているような熱気が伝わってきた。

逃げなきゃ……！このままでは間違いなく殺される。わたしはその場で方向転換し、思わず走り出した。必死になつて、逃げているとあの出口のゲートが見えてきた。そこにはルキアお姉ちゃんが来ていて、門の錠をなんとか解錠できないものかと手探りしている様子が伺えた。

「いともさんー！」

ルキアお姉ちゃんがわたしの存在に気付いて、大きな声で呼び掛けてくれた。まさかわたしを心配してここまで来てくれていたとでもいうのだろうか。お姉ちゃんを置いてきて一人を出掛けて、勝手に拐われただけだということなの？ わたしは何てことをしてしまったのか。これほどまで自分勝手な行動をしたわたしをまだ心配してくれるなんて。やっぱり、家族が一番だよ。

わたしは煙突で借りた鍵を使って門に掛かっていた南京錠を外し、工場から脱出する。すると、急に脱力感と安心感が身体を襲い、気づいたときには、無意識にルキアお姉ちゃんに抱き付いていた。お姉ちゃんは頬を赤らめ、困惑した様子でいる。

「ちよ、ちよつと・・・。」

怖くて堪らなかつた。あの肉だんごみたいな形になった『よまわりさん』と地獄から剥いでできた悪魔みたいな姿をした『謎の男』が何よりも恐ろしかった。お姉ちゃんも結局行方知れずだし、どうすればいいのか分からなくなつた。次第に瞼に涙が溜まりだ

して、溢れ出た涙が頬を伝う。

「お姉ちゃん……怖かったよう。」

思わず弱音が口から溢れる。でも、そんなわたしをルキアお姉ちゃんは優しく静かに抱きしめ返してくれた。心地いいぬくもりが身体を包み込んでくれる。人つてこんなに暖かいんだ……。工場の方を振り返るとあの男はもう追いかけてきていなかつた。諦めてくれたかどうかは定かではないけど。

泣き止んだ後、一度わたし達は家に帰ることにした。気持ちの整理をつけたら、またお姉ちゃんを探しに行こう。でも、あの男が此方を見詰める暗く冷たい眼光と「白い髪の小娘を手に入れる」という言葉がいつまでも頭から離れなかつた。

終章 夜明け そして始まり

あの後、私達は一旦自宅へと引き返した。話を聞く限りどうやら彼女は私の推測通りに『よまわりさん』によつて、工場へ連れ去られてしまったようなのです。それは、一瞬の出来事で工場で目覚めるまでさらわれたことにすら気付かなかつたそう。ですが、工場の中では幾度か襲撃にあつたようですが私よりは被害に会わずに済んだようです。

むしろ、大変だつたのは此方のようです。怨霊ではないもの二体の喧嘩を目撃し、謎の亡霊に導かれたなど端からみれば、不運の連続だつたと思われるでしょう。ですが、これもさん標的が良かったと思うことにします。私がよまわりさんの気をそらすことができました。そう思つておきます。

それに彼女以外にも男の人がいて出口まで付き添つてくれたと話していました。どうにも怪しい雰囲気を漂わせていますが、こともさんを保護してくれたのも事実。余計な散策は辞めておきましょう。

あの化け物は一体なんだったのか。今となると正体が気になるところですが正直、調べている場合ではない。しかし、もうこれ以上町に存在するであろう古い廃墟や事故現場など怪しい場所は全て行ってしまいました。後、残すとなるとこの町の山でしようか・・・？ですが、あそこには古いトンネルがあるだけで特に何かある訳ではありません。まさか、ここにきて搜索する場所がないという問題に直面してしまうとは・・・。

考えてみても仕方ないので手当たり次第、もう一度こともさんと共に町を探索してみることになりました。早速、玄関から外へ向かおうとすると、前方の階段からズルズルと何かが這い上がってくる音が聞こえました。なんと、家に取り込んできたのはあの『よまわりさん』だった。

今まで家にだけは侵入してこなかった化け物ですが、とうとうここまで来てしまうと。私は青ざめて、こともさんを反射的に抱き抱えた。そして、よまわりさんを横切つて玄関へと走った。しかし、アレは全く追いかけてくるような様子はなく、此方を一点に見詰めている。そして、気が付くとよまわりさんは姿を消していました。そこには何か紙の切れ端のようなものが置いてあった。

私は一瞬、思考が鈍った。あまりにも予想外の出来事だったので、困惑してしまったようです。その証拠に後ろにいたはずのこともさんが紙切れを持って私の前に立っていた。色々な事を考えていたものですから、全く気が付くことが出来ませんでした。

「・・・？ルキアお姉ちゃん、大丈夫？」

「え、ええ、もちろん大丈夫ですよ。心配掛けましたね。」

と彼女に言い聞かせましたが、実のところ、あまり万全の状態でもないのです。理由としては、あの声が無だに頭の中から響いてくるのです。しかも、前回に比べて囁く声の数が明らかに増えている。五つほどだと思っていた声は今では八つほどまで増えている。正常に思考することすら、正直ままならない状態です。

ですが原因が分からない以上、解決法がないのも事実。大丈夫、気にしなければ問題ないはずです。私は一旦、頭に響く声のことは忘れ、差し出された紙切れに記されている内容を読み上げました。

その紙切れにはこう書かれていた。

さらわれたひとは

トンネルのむこうへ

つれていかれる

この書かれていた内容を見た瞬間、私は確信しました。間違いありません。こともさ
んのお姉さんは、この町の山へと続くトンネルへと連れ去られたみたいです。このトン
ネルには一度、入り口まで行ったことがあります。トンネルの奥は暗く冷たい道が何
処までも続いていて、肉眼では確認できないほどの闇と霧が立ち込めていたのをよく覚
えています。

実は行った時期はつい数時間前。家出をし、途方に暮れていた私は町を亡霊のように
彷徨っていたときに、あのトンネルにも訪れていたのです。その時は、ただの不気味な

場所とばかり思っていたのですが盲点でした。

そうとなれば、グズグズしてられません。私達は急ぎ足で玄関から飛び出して、例のトンネルへと向かった。



今、私達は例のトンネルの直前まで来ている。昼間見た時かなり不気味に感じていましたのに、丑三つ時の今ではより鬱蒼と闇が広がっていて、今にも闇の中へと吸い込まれてしまいそうな雰囲気です。そして、途中の道で多量の血が飛び散っていた場所を見掛けました。そこを通るとこともさんがすぐにでも泣き出してしまいそうな表情を浮かべたので私は何も聞かなかつた。何があつたのかは大体想像できます。彼女に取つて辛い場所なのです。

しかし、臆することなく私達は闇へと続くトンネルへと足を踏み入れた。懐中電灯の光を持つてしても、トンネルの出口処か足元すら霞んで見える。闇へと一歩一歩、近づく度に霧が立ち込めていることに気が付いた。延々と続くそれは、まるで私達を出口へ

と行かせまいと思えるほど、濃くなつていく。

これ以上進んでいけば、もう2度と帰つてこれないのではと不安と衝動に駆られる。しかし、後戻りもできないのも事実。怯えることすら私には許されていない。そんな気がするのです。

友と呼べる彼女の為にならどんな事をしたって、どんな罪を犯したって構わない。失うものなんてもうとつくのとうに失っているのだから。兎に角、命に掛けても彼女とその家族の安全だけは絶対に守り抜く。

トンネルの中央部分に差し掛かった頃でしょうか。とうとう懐中電灯の明かりすらも、届かなくなり、進むのを断念しかけていたその時、左の壁際に祠のような物が私達を待つていたかのように霧の中から出現したのです。

見たところ、いかにも神聖な建造物であることが分かりますけど、祠というものは普通神社やお寺のつつきり近くにあるものだと思つていたので、このようなトンネルという只の穴にポツンと配置されているそれを見ていただけと何故だがモヤモヤするような気分になりました。

すると、左で私の手を握りしめている筈のこともさんの方面から光が漏れている光景が視界に飛び込んできたのです。私は驚き、改めて彼女の方を向くと、なんともうひとつの手のひらに握られた布の御札が光輝いていたのだ。何故この場で……？ 祠が関係しているのは火を見るより明らかですが、何かが起こっていない限り不思議な力は発揮されない。それは、あの百足の神様が教えてくれたのです。

思考に耽っていると、こともさんが何のためらいもなく、御札を祠へ翳しました。そして、御札の影響なのか、暖かい光が辺りを包み込みました。

「……え、今どうやって……。」

こともさんに質問を投げ掛けようとしていましたが、何かの音に遮られた。それは、後ろから怪物が接近してきている時によるもの。ズリズリと何かを引きずる音。現実世界ではこのような生々しい這いずり音は聞こえない。しかも、私はその這いずり音に聞き覚えがあつた。

嫌な予感がし、振り返ると『よまわりさん』が全速力で此方に向かってくるので、それにアレは今、肉だるまのようなブヨブヨの見た目になっているのが黙認できません。ですが、あの姿になったのを見たのは化け物と紛争しているときだけであって、普段は温厚な軟体動物状の姿をしています。

こともさんの顔が徐々に青ざめていきます。どうやら、彼女も私とはぐれている間にヤツに一度出会うてしまったようです。でなければ、このように全速力で走って逃げられないでしょう。

……ん？ 気づいた時には、こともさんは全力疾走で私の前方を駆け抜けており、手のひらにいた筈のこともさんは既にいなかった。

「全く、こゝともさん……！」

多少悪態をつきながらも、私も続いて走り去る少女を追いかける。少し先を走っていたこともさんは二つ目の祠を発見し、札を翳していました。明るい光が辺りも包み込むも、アレが怯む様子は微塵も感じられない。それどころか、今度は前方から大きな物体が近付いてきていた。

それは「手」だった。

道路や商店街で見掛けた黒く小さめの個体ではなく、そのまま手首を切り落として、意思を無理矢理宿らせたかのようにおどろおどろしい見た目をしていました。大きさはあの手の2倍以上はある。そして、あの黒い手と共通していたのはやはり、手首に目玉がくつついていたことです。

此方の存在を確認したのか、ソレは目玉をギョロリと此方に向けると今にも襲い掛かろうと体(?)を震わせていた。私は、こともさんを抱えて逃げようと試みようとした瞬間、目の前の腕が何者かに吹っ飛ばされ、視界から消えた。

すると、今度はよまわりさんが立ち塞がっていて、此方に向かって襲い掛かろうとしていた。

「ちよつと! 貴方は一体何がしたいのですか!」

私はとうとう我慢できなくなり、ずっと思っていた疑問を彼に投げつける。当然、返事なんて返ってくる訳ないのに。

訳が分からない。よまわりさんはあの化け物達と敵対している事は確かなのに、かと言つて私達の味方でもない。全く持つて、彼の行動の予測が付かない。法則があるようにも思えませんし、感情のままに行動している訳でもなさそうなのです。

でも、私はその予測不可の目的がよく分からない行動を見ていて、なんとなく自分共感できる部分があるように思えてしまいました。最終的な目標が決まっていなくて、ただ目の前にやりたいことがあれば、すぐにでもそれを実行する。

……つまり、答えをまだ見出だせていない。

そういえば……私の求めている「答え」とは一体何なのでしょう。

確かに私は今まで、大切だと思う人の為に戦つてきた。それが私に与えられた使命だと自分に言い聞かせて胸に刻み込んできた。でも、違った。その偉大な使命を果たすにはあまりにも私は貧弱すぎるのです。脆くて自分に腹が立つほど。

仮にこの後、こともさんのお姉さんを救出出来たとしても、その後は？

「あの地獄のような生活に戻るしかないのでしょうか。毎日学校で罵られ、馬鹿にされ、家では仕事の疲れで頭がおかしくなってしまうた叔父に打たれるあの日常に戻る？ 考えたくもありません。しかし、そうでもしないと私一人では生きていくことすらままらない。何処にも私の居場所はない。」

ならせめて、友達ぐらい救って死にたいものです。もう、父や母が私の元を去った時点で自分の生きている価値は失くなってしまったのかもしれないね。現に周りからも「生きている価値なんてない」と言われてしまうので。

微かに声が聞こえます。誰かが私を呼んでいる。徐々に頭がはつきりとしてくるとこともさんが必死に私を呼ぶ声が頭の中に響き渡る。朦朧とした意識をはつきりさせるとあの「手」の化け物と「よまわりさん」が争っていた。此方には目も暮れず、戦い続けています。

「ルキアお姉ちゃん……！は、早く逃げよう！」

「え、ええ！今のうちに行きましよう！」

私は少女の手を引き、ぼうぼうと生い茂る草むらへと突貫していった。塞がっていない片方の腕で草を掻き分けながら、進んでゆく。

自分達が今現在、何処にいるのかすらもう分からない。こんな場所、地図にすら載っていないからです。やっと草むらから脱すると今度は石段で出来たとてつもなく長い階段へとたどり着きました。所々に鳥井が確認できることから推察するに、ここはかつて神様を祀っていたところなのかもしれません。

「お姉ちゃん！後ろから来てるよ！」

「ッ!？」

足止めをしていてくれたよまわりさんはどうしたのか。あの「手」の化け物が後ろの草むらか迫ってきていた。迷っている暇はありません。私はこともさんを連れ、長い階段を駆け上がる。だが、ヤツも負けじと階段をよじ登りながら追いかけてくる。

少し進むと階段から脇道へと逸れる道があった。そこにはあの祠が静かに佇んでいた。すると、再びこともさんが握りしめている御札が光を放ち始めたのです。すると、

最後の祠に光を灯し、長い長い石段にも漸く終着が訪れようとしている。やはり、最後に待ち受けていたのは巨大な鳥井とお参りをする神社でした。ですが所々崩壊しており、かつて放っていたであろう神々しさは既に失われています。そして、私達は遂に見付けたのです。お参りをする参拝箱と本坪鈴の前に彼女の姉が倒れているのを確認しました。

「……ッ!!見つけた……!」

「お姉ちゃん!」

しかし、そうはさせまいと言わんばかりに、地鳴りが響き出し、私達の行く手を阻み始めました。そして、ついに正体を現した。この事件の元凶が。眩い光と共にソレは姿を見せてきた。

なんともグロテスクな見た目でしようか。ソレは「顔」だった。ですが、只の顔ではありません。ソレを形成している一部が全て人間で組み立てられているのです。無理矢理、組体操のように繋ぎ合わされている人間達は魂を引き剥がされているのか、かつて顔だった部位にはぽっかりと空洞が相手いた。

死してなお、永遠の苦しみにも蝕まれていたなど想像も出来ないし、衰れに思いますが、私達の行く手を阻むならば此方も抵抗するまでです。

そして、ソレは悲鳴にも似た奇声で咆哮して脅しを掛けてきました。すると、祠の時のようにこともさんの御札が光を放ち始めました。そして、辺りには祠が五つある。もしかししたら、これでの者を静めることができるかもしれません。

「こともさん、私が時間を稼ぎます。その間に貴女は祠に光を灯して下さい。」

「で、でも……そんなことわたしだけじゃ……。」

「いいから早くしてください!!そんな怯えた様子では助けられるものも助けられませんよ!?!」

この状況でもまだおどおどしていることもさんに私は苛立ちを覚え、活を入れるため少々きつめの一言を浴びせた。彼女には以前の自分のように家族という素晴らしいものを失ってほしくなかったから。

すると、彼女は腹をくくったようにポシエットを引き締め、険しい表情へと変わった。

「うん!分かった!必ずお姉ちゃんを助けるんだ!」

はつきりとそう言い残し、彼女は祠へと走り出した。

「……………頼みましたよ。……………さて、どうしたものでしょうか。」

そう現在、私はこの化け物に対する対抗手段を持ち合わせていないのです。さらには、知らぬ間に異次元空間のような場所に飛ばされていて、石一つ落ちていない、紅蓮の世界に閉じ込められている。時間稼ぎといったって一体どうすれば……………？

なんとか足止めを出来ないかと模索していると、あの巨大な「手」の化け物が両腕(?)揃って、此方に襲い掛かってきた。

「グッ……………！ツアアア!!」

襲い掛かってきた腕とは反対方向へ横転し、回避を試みましたが、両腕からの同時攻撃は流石に避けきることが出来ず、片手に捕まり空中へと持ち上げられてしまった。凄まじい力で握り締められ、あまりの激痛に思わず声をあげてしまう。想像以上に力が強

く、身体のあらゆる部位がメキメキと音を立てているのです。

痛い痛い痛い痛い痛い。どうにか抜け出さねば、全身の骨を砕かれてしまいそうです

……！

私は一本だけ拘束を免れた自分の腕で巨大な拳を押し退けようとしてみましたが、全く身体が動く様子は感じられなかった。

すると、脱出を阻止しようと化け物の親指が真上から迫っており、私は必死に抜け出せないかと抵抗するものの、ジリジリと指が近付いてきていた。

「ちよ、つと待つて、下さい。それじゃ、私は……！」

自分でも命の危機に反応し、目の前の敵に向かって、涙を浮かべて命乞いをしているのがとても恥ずかしい。でも、命を失うという恐怖には勝てなかった。

あれだけ散々、命を捨てる覚悟があるなんてほざいていたのに、いざとなればこの様。これでは、助けられるものも助けられないのは私の方です。所詮、私などこんなものか

……！

そして、親指が頭上にまで近付き、はみ出ている私の左腕を拳の中に収めようと無理矢理押し込み始めました。すると、バキツと嫌な音が左腕から聞こえ、今までにない痛みに襲われた。

「アアアアアアアアアアアアッ?!?!?!」

私は左腕の尺骨を折られてしまった。辺りに自分の悲鳴が響き渡る。遂に押さえていた涙が目元から溢れだし、我慢の限界を向かえた。

(もうこれ以上は………!)

もうダメだと思ったその時、あらゆる方向から眩い光が溢れだし、辺りを暖かい光が包み込んでいく。すると化け物はその光に怯み、私を掴んでいた手を離れた。無造作に転げ落ちた私だったけど、確信に満ちていました。何故なら、こともさんが全ての祠に光を灯してくれたという合図でもあったからです。

「！！」

沢山の人の憎悪や悲しみの感情が入り雑じったような悲鳴をあげ、顔の怪物が全身を震わせ始めた。そして、顔の一部一部を構成していた人間の体が剥がれ落ちていく。最終的には全てが崩れ落ち、完全に存在そのものが消滅した。

気づいたときには、紅蓮のように赤い世界から抜け出しており、元いた神社へと戻ってきていました。やはり、あの空間は化け物が生み出した異次元空間だったのか結局、謎に包まれたままですが今はよしとしましょう。

何故ならば、この長い長い数時間の夜の町を探し回って、探していた者が漸く見つかったのですから。

「お姉ちゃん！……ルキアお姉ちゃんが助けてくれたんだよ。今度は私達の家に来てもらって三人で遊ぼう。だから、起きてよお。」

「う、うう………」

「お姉ちゃん！」

どうやら、意識はあるようです。私はほっとし、その場にへたりこみました。たった数時間ですが、この探索で蓄積された疲労がどっと出たのでしよう。先程まで気にもしていなかった足の傷や、腕の骨折による痛みも思い出したかのように襲いかかってきました。

「アツ、……………ツツウ……………」

あまりの激痛により、私は思わず折られた左腕を反対側の手で押さえ付けた。これではこともさんのお姉さんを担ぐ処か、担がれる側になってしまいそうですね……………。

「すいません、こともさん。お姉さんを連れて先に帰ってて貰ってよろしいでしょうか？ 私を腕を折られてしまって、暫くここから動けそうにありませんので。」

「……………うん、分かった。後で迎えにくるから、待っててね。」

「……………はい、分かりました。」

彼女は迎えに来てくれると約束してくれた。でも、私はその思いに答えられそうにはありません。もう、こともさんは私と関わるべきではないのです。これ以上、私という

人間を知ってしまえば、どんな対応をするか予測が付きません。さらに言えば、貴方と友であり続ける限り、私は苦しみから解放されることもない。叔父の元へ帰れば、私は朽ちていくのみ。もちろん、私にそのつもりは毛頭ない。

なので………ここでお別れです。さようなら、私の最初で最後の友達。いつか会えることを望んでいます。

瞼を閉じて、生涯の幕を閉じようとしたその時。神社の階段から誰かが登ってくるような足音が近付いてくるのを察知した。そして、徐々に高まる気温。これはすぐに察しが付いた。

ヤツだ。

地獄の業火に身を包んだあの燃える怪物が此方に迫っているのです。だが、今さら恐怖する必要もない。そう思っていました。段々肺が苦しくなり、呼吸困難に陥った。

喉に灰でも入ったかのように激しく咳き込む。

すると、何者かが階段から上がって来た。目視で確認する限り、その姿は男だった。そいつは私を見付けると両手を広げ、歓迎のジェスチャーを表現しながら接近してきていた。しかし、その大胆に気持ちを表現する癖は私には見覚えがありました。

「よお、ルキア。会いたかったぜ。おつとつと、抵抗したって無駄だぜ。何せ、お前は人間。弱つちいただの『出来損ない』だもんな。ウハハ。」

男が脅しを掛けてくるかのように、目を真っ赤に光らせる。その瞳には憎悪しか写っておらず、すぐにでも世界を焼き付くしたい。そんな感情で一杯だった。

男の特徴は、ボサボサの金髪の髪に垂れ目。それに古臭いジャンパーにジーンズ。年は40代前後。これで確信しました。今、目の前にいる彼は………………。私は反射的に声をあげ、尋ねた。

朧夜廻編

壹章 朧夜

今、私は驚愕していた。こんなことは有り得ない、いえ、有り得てはならないことなのです。だって、だって目の前に死んだはずの父が何事もなかったかのように平然と佇んでいるのです。私はあまりに突然の出来事が起こった、この現状について頭がつかないかなくなりました。

幾ら理由を考えてみても、思考を重ねても思い当たる節が何処にも見当たらないのです。しかし、父は正確には、行方不明、になっただけであって、死亡と断定されている証拠は何もない。けれども、行方を眩ましてからはもう七年以上経過しています。警察の方々も生存している見込みは薄いと言っていたのに。それともあれは嘘だったのでしょうか？

いえ、そんなことは決してないはず。父は家族思いの人だった。心優しい人で

す。そんな人が家族の事情をほったらかして、何も言わずに去るなんて断じて有り得ません。何かしら事情があった。私は目の前の父がそう言ってくれることをただただ信じるしかなかった。しかし、現実是非情だった。目の前の父と思わしき男は、そっぽを向きながら、こう答えた。

「突然、親父が出てきてビビったか？ だろうな。ハッハッハッハッ！………だが奴は死んだ。無様に泣き叫んでやがったな。「俺の命はやるから、家族だけは助けてくれ」だってさ。あれは滑稽だったぜ。いかにも人間らしく卑しい言葉を吐いてやがったな。」

ふざけた声の高さで軽々しく真実をソイツは打ち明けた。あつさりと希望を打ち砕かれてしまった。心の奥でガラスが砕け散ったような感触がする。父は何のために、死んだのでしょうか。果たしてそこに意味があったのでしょうか。そして、目の前にいるこの父の姿をしたこの者の正体は一体………？

「じゃ、じゃあ貴方は一体誰なんですか………？ 何者なんですか!!? それに父は、父はどんな最後だったのですか!!?」

私の声は若干震え声になっていた。ですが、悲しみと怒りの感情に身を任せ、私は尋ねた。真実が知りたかった。そうでなければ、母は何のために身を投げ打つてまで父を迎えに向かったのか。もし、母が向かっている間に父は既に死んでいたなら母の思いが無駄になる。そう思うと許せなかった。

すると、ソイツは少し困ったような表情をとつたが再び不気味な笑いを見せ、口元を私の耳元まで近付け、小さな声で囁き始めた。

「お前の父さんはな……………」

私が殺した。腹わたをぶち抜いてな。

答えはそれだけで十分だった。コイツが何者かなんてもうどうでも良くなった。殺してやる。憎しみの感情が身体から込み上げてくる。許せなかった。父もそうだが、一番母が不備です。報われぬ。腕が動けば、今すぐにも殺してくれるのに。私は動けないことに腹が立ちながら、歯ぎしりをし、怒りの目線でソイツを睨めつけた。

しかし、ソイツは一方引いたが、怖がる様子を見せる処か楽しんでるような表情をとった。

「おお、怖い怖い。良くないぞ、そんな顔を女性がしちや。折角の美人が台無しになっちゃう。」

「クツ……………！」

「……………んああ、まあいい。処でこの身体だったか？何で持ってるのかって？貰ったのさ、お前の父さんにな。皮を食ってその姿を真似たのさ。旨かったぞお、やっぱり人間の味は絶品！後は、酒でもありや最高なんだがな。そう巧いことはない。」

「……………!?!」

「更にムカついたって顔してんな。良いぞ、好きだけ憎め。どうせお前ごときの脅しじゃ何も感じないし、お前では私は殺せない。それでも私はあの百足や人間組体操で出来た神と同じなのさ。人間風情のお前には何も出来るわけないだろ。」

そう忠告を受けたが私は我慢の限界を迎え、一か八かそいつに一矢報いようと飛び掛かろうとした。しかし、その捨て身の行動も水の泡となった。

飛び掛かろうとした直後に、血のように真っ赤に染まった糸のような粘着物が腕や脚に絡み付き、身体がピクリとも動かなくなったのです。

「なっ……………!?!これは……………!?!」

私は慌ててその糸を身体からほどこうと試みましたが、糸はほどこうとすればするほど、更に絡み付いていき、ついには身体が全く動かなくなるほど絡み付いてしまった。すると、近くの茂みからあの時に見た蜘蛛なのかアメンボなのかよく分からない得体のしれない生物が出現した。よく見ると糸はソイツの口元から射出されている。

そこまでして、私や父を狙った理由が知りたい、知りたくてたまらない。どうして……? 気づいたときには、私は大声で尋ねていた。そうでなければ、気持ちを押しさえられなかった。胸が張り裂けそうになります。

「ずっと、ずっと見張っていたということですか!? 何故ですか!? 何の為に?」

すると、ソイツは険しい表情へと変わり、周りの蜘蛛(?) 達も威嚇する体制へと移行する。

何か気にさわることを言っていないのに。私はただ知りたいただけなのに。

そして、ヤツの姿が変わっていく。手足は恐竜のような腕へ、皮膚はゴツゴツとした黒焦げの岩のような形へ、更に巨大化し遂に正体が分かった。

しかし、遅すぎた上に勝てる見込みが0に等しかった。何故ならば、ソイツがあの時に出会った燃える怪物の正体だったから。

「……………口答えをするな。この出来損ないの種族め。お前はただ、私に、従えばいい。」

身体が動かない。全身を縛られているからでも、腕を怪我しているからでもない。それは恐怖によるものだった。圧倒的な存在を前して、本能で感じた恐怖。全身から冷や汗が溢れだし、瞳から涙まで出てきそうになります。嗚咽までも漏れそうになる。それぐらいヤツに移る〔真つ赤な瞳〕が恐ろしかった。まるで命そのものを焼き付くしてしまいそうなくらいその瞳が。

ソイツは私を脅した後、元の人間の姿に戻り、蜘蛛の怪物を引き下げる。私に絡み付いた糸は全て剥がれ落ち、自由の身となりました。

しかし、やはり身体が動かない。ヤツも憎いことにそれを知っていて、わざと解放したのでしよう。私が逃げることも出来ないと知っていて。

彼は面倒そうに手を腰に置きながら、耳を書き始めました。そして、私にとって第2の悲劇の事情を喋り始めたのです。

「ああ、そうだ。道端でちっちゃい小娘に出会ったんだ。女を必死そうに担いだ娘がな。工場でお前を探すように頼んだんだが、怯えて逃げだしちまったんだ。まあ、無理もないが……愚かにも私の前から逃げ出しもんでな。少々、お仕置きをしてやったんだ。」
「えっ……それってまさか……。」

「名前は……確か……ああ、そうだ。【ことも】だったっけな。目玉を一個潰してやった。水風船を針で割るように一発で。ヒヒ。」

そんな……。あの子は今まで怖い思いを散々味わってきた、もう2度と体験したくないはずなのに、それなのに……。なんてことを……。

私は全身の力がスルツと抜けていく感触がした。唯一、希望であったこともさんにも危害を加えられてしまった。もう彼女はここには戻ってきてくれはしないでしょう。

ああ……。折角、清々しい気持ちで逝けると思つたのに……。ついに我慢していた涙腺も崩壊し、静かに涙が頬を濡る。

「さて、邪魔者も消えたんだ。今夜から寝かせねえぞ、ウッフ。折角だから、景気よく挨拶でも言っとくか。すうー……」

僕の名前は「ルーシー」ツ!!よろしくツ!!」

大声で気前のいい自己紹介をした後、ヤツは満足そうにウヒヤヒヤと笑い転げている。寝ていた鴉がそこ笑い声に驚いて、森の中から辺り一面に飛び立つ。今まで、綺麗な音色を奏でていた夜虫も沈黙しています。

私は怪物に取り付かれたみたいです。とことんついてないですね………………。ろくなことが起こった試しがない。私は不安でたまらなかつた。

私にとっての本当の「悪夢」^{夜題}はここからだつた。

式章 夢

「う、うーん。ここは……………」

暖かい毛布をかけられているのか、とても気持ち良い感触がする。それに立ち込める薬品の匂い。

まさかここは……………」

起き上がろうとしたが、なんだか頭が重い。風邪を惹いたときよりもずっと重い。

しかし、だからといって状況を何も知らずに行動を止めるのは不味いです。私は重くなった瞳を無理矢理開き、ボヤけている視界を取り戻そうと右腕で目を擦る。

見えるのは……………カーテン？ 辺り一面が真っ白な風景に覆われています。それに心拍数を計る機械が確認できます。名称は分からないが、よく病院にて見掛けるものです。これでここは何処かはつきりしました。

私は病院の寝室にいた。私は神社にいたはずなのにどうやってここまで運ばれてき

たのかは思い出すことができない。

でも、あの後何があつたのかはぼんやりとだが、覚えています。あれから「ルーシー」と名乗った男は、思い切り私の頬を殴り飛ばし、気絶させてきた。そこまではかろうじて覚えています。

しかし、それ以降が思い出せないのです。私はあれからどうなつたのでしょうか。そして、ここは何処の施設なのか。それを確かめるべく、私は左腕を敷き布団につき、立ち上がろうとする。何処にいても油断は禁物なのです。あの男を敵を回してしまつている以上は。

「ウツ……………、アアツ……………」

ついた左腕から激痛が走り、思わず片手で押さえつける。そうでした、あの腕の怪物に手を折られてしまったのを忘れていました。よく確認すると、腕全体には包帯が巻かれていて上に、点滴らしき管も繋がれている。

物凄く邪魔に感じたので、なんとか点滴を外せないかと試行錯誤してみる。

すると、近くの扉から看護婦らしき女性が入室してきた。

私が点滴を外そうとしている様子に気が付いた女性は慌てた様子で此方に近づいて

くる。

「駄目ですよ！点滴を外しては！まだ安静にしています！」

点滴を腕につけ直されてしまい、再びベッドに寝かせられてしまいました。ですが、ここが何処なのか聞くのに丁度良いタイミングで来てくれました。私は看護婦さんに手を伸ばし、ここが何処か尋ねようとする。

「すみません、あのー、ここは何処でしょうか……私、記憶が曖昧で。」

すると、看護婦さんがニコニコした表情で此方を向きこう言う。

「ここは病院です。貴方と私と二人っきりの。」

「……………」

二人っきりの……………？すると、看護婦さんが瞬きをした瞬間、白い目玉が血で染まったみたいなお赤い瞳へと変貌を遂げる。それはつい先程まで見ていたものだ。私は恐怖と焦りが生じ、血の気が引いていくのを感じる。やっぱり、逃げられたわけじゃ

……。

看護婦の姿が薄れていき、いつの間にかあの男の姿へと変わっていたのです。冷や汗が額を蔭り、身体の震えが止まらない。

コイツに関われば、殺されるなんて生やさしいものじゃ済まされない。私の直感がそう言っているのです。そして、嫌な予感というのは当たってしまふもの。

「やあ、ルキア。会えて嬉しいよ。………ん？私がここにいるのがそんなに意外か？言わなかったか？お前は私のオモチャなんだ。オモチャが自分の意思で逃げたりするか？それと同等の立場なんだよ、お前は。」

舐めるようにルーシーは私の顎に手を添え、顔をゆっくりと近づけてくる。そして、首の部分をソツと撫でなれ、思わず鳥肌がたち、体が身震いを起こす。物凄く気持ち悪い感触が全身を伝わり、反射的に彼から視線を反らす。すると、彼は立ち上がり、疑問を持ったようなジェスチャーをとる。

「おいおい、そんな嫌うなよ。私は祝福しに来たんだ。お前が私のものとなった記念に。こんな光栄なこと一生にそう何度も味わえるもんじゃないぞ。」

「誰が好き好んでこんなこと……………」

悪態をつき、キツと睨み返しても彼は無視して部屋の中をぐるぐると興味深そうな表情をしながら回り始めた。

しかし、私はある事に気が付いた。先程、ヤツは「二人つきりの病院」と言っていた。それに、私をオモチャとして、いたぶるつもりならば、既にやっているはずなのです。ヤツの性格からすると、じわじわと攻めるタイプではないはず。

私は一か八か、折れた左腕を思い切り握り締めた。

「クツ…！アツ!?……………ハア、ハア、やりました……………」

傷を握り締め、ヤツから気を反らすと目の前からヤツは消えていた。読み通り、これは幻覚でしたか。もしやと思い、試してみましたが、上手くいきませんでした。昔読んだ戦争の本で、幻覚をみていたとされる兵士が傷を押さえ、出てきた過去の恐怖の出来事かき消すという一面があつたのを思い出したのです。

予想以上に効果はてきめんだつたようで、私は胸を撫で下ろした。

すると、再び病室のドアが開き、今度は白衣をきた男の人が入ってきた。どうやら、今度は本物のお医者さんのようで安心しました。明るい表情で、診察をしに来たよ、と言っているのが幻覚ではないのは間違いないでしょう。

数分後、一通りの診察が終わり、問題なしという結果が出た。後は、安静にしていれば折れた腕も自然に治るとのこと。派手に折られていたようにも見えましたが、やはり人間とは凄い生き物だとつくづく思わされます。

体の一部分を失えば、自然の動物だった場合、即見捨てられるか、仲間に見守られながら絶命していくかの二択でしょう。

それをお金を税金で日頃払って、当日に診査料金などを手続きするだけで、折れた腕まで回復させてもらえるのです。

私は初めて人間が今まで培ってきた文化や技術に関心を持ったような気がした。

私は再び、ベッドに倒れ込み一息付く。

さて、これからどうしたものでしょうか。というのも、今私はお金を一円も所持していないのです。

故に、もしかしたら警察にでも突きだされて、保護者の元へと送り帰されることにもなれば、それこそ悪夢です。

永久に外を見ることは許されず、ただ廃人に向かって堕ちていくのみでしょう。そして、いつか叔父になぶり殺しにされる。家出をした上に、損傷した腕の治療費の負担まで背負わせてしまうのです。頬を平手打ちされるだけでは済まされないのは明らかです。

「こんな時に母さんがいてくれれば……………」

助けを求める声がかから零れ落ちる。

いやいや、駄目です。何を言っているのですかルキア。もう、母は私の元にはいないのですよ？もし仮にいたとしても今この場で、手を借りる訳にもいかない。今の状況は私が望んで造り出したものです。

助けなど借りてはならない。

しかし、幾ら思考を重ねても案が全くと言っていい程、思い付かない。これまで、敷

かれたレールの上を無理矢理渡らせられていた代償なのか。よくよく考えてみれば、今日まで自ら行動したことなんて一度もなかった。

いつも誰かに連れられて行動していた。自分の意思を主張したことなんて一度もありませんでした。

それ故に、知識不足でもあった。だから今この場で悩み、苦しい思いをしている訳です。こんなことになるかと分かっていればもともともと進んで勉強していたのですがね……………。

「なら、私が手を貸してやろうか？」

不意に何度も聞いたあの声が耳元で囁かれた。驚いて振り向くとそこにはまたあの男がいた。

どうして……………？確かに先程、抹消したはずの幻覚が再び目の前にいる。単に私の頭の中で起こっている現象ではないのでしょうか？

私は思わずに口元を手で押さえ、驚愕を隠そうとする。そして、その様子を察したのかヤツが声をかけてくる。

「あれくらいの痛みで私を消せたとも思つたのか？ 私はお前の「頭」の中にいるんだぞ。幾らか弱い女性とはいえ、それくらい熟知して貰わないと困るなあ。」

と本人は言っているが、全然困つた表情をしていない。寧ろ、喜んでいるぐらいに感じられる。何故ならば、ヤツは今ニタニタと気持ち悪いと感じるほど満面の笑みを浮かべている。まるで絶望している表情を眺めているのを楽しんでいるかのように。

気味が悪い。あまりいい趣味と言えないでしょう。

「おい、趣味が悪いって思つてそんな顔をするな。傷つくだろ。」

眉間にシワを寄せ、苦虫を潰したような表情をされながら、指摘されてしまった。何処の口がほざくのだけか。

すると彼はブンブンと首を降つた後、気を取り直したのか再びご機嫌な表情を取り戻し、改めて病室の壁全体を興味深そうに見渡し始めた。

出来れば、一生そのままですぐに欲しいのですが。

呆れた雰囲気になってしまい、私は恐怖を感じることをすっかり忘れていました。

そして、辺りを見終えたのか、近くの椅子を引つ張りだし此方を見据えてどっかりと座った。退屈そうに頭を掻き出す。一体何がしたいのか、検討もつきません。

正直、こんな得体のしれない奴の行動なんて分かりたくもありませんが。

「なあ、最近の人間は皆、こんな真つ白なとこに住んでるのか？こんな場所に毎日いたらゲシユタルト崩壊を起こしそうになるぜ。」

と不思議そうな顔して関係ない話題を振り始めました。……………まあ、このくらいの話題には乗っかってあげてもいいでしょう。幾ら両親の敵とはいえ、幻覚ではお互い手出しは出来ないうし、それにここは病室。暇潰しになりそうなめぼしいものもありませんし、諦めて質問に答えることにしました。

はあ……………居るかどうかも分からない幻覚に話し掛けるとか正気の沙汰じゃないのに、私は何をやってるのでしようか……………。

というかゲシユタルト崩壊ってその使い方で合っていたでしょうか？

「……………そんなわけないですよ。ここは病院といって、怪我をした人や病人を運びこ

んで安静にさせておくための場所です。壁が白いのは多分……精神的に安定するか
らでしょうか。よくは知りませんが。」

「ふーん………こんな真つ白な壁でねえ。人間って変な生き物だな。改めて思っ
たが。」

それに関しては同感ですね。私もこの真つ白な空間はどうにも目がチカチカしてし
まうのです。こんな所で精神安定を図ろうとするとは、気がしません。

そのまま、3分ほど無言の時間が続く。すると、彼はその場から立ち上がり、大声で
提案を図ってきた。

「なあ！この病院から出よう！そして、この夜の町を一緒に散歩しようぜ！」

「……………それが自らできないことは貴方も重々、承知しているでしょう？あの「顔」
の怪物に腕を折られていて動ける処の話じゃ——」

私が話をしている途中で、彼はじれったそうな仕草を取り、右手の指を鳴らした。
すると、いつの間にか町の真つ只中に私達二人のみ佇んでいた。

「ッ!？」

見渡す限り、ここは住宅街の十字路のようです。それも私とこともさんが暮らしている慣れ親しんだ町。辺りには自動販売機と今にも電気が消えてしまいそうな街灯。

いつの間にこんな所へ……? 私は頭を整理しようとしたが、無理だった。何故ならば今さつきまで、私達は病室にいたのです。ここまで約1秒も掛からずに移動するのは物理的に不可能。説明がつかない。

「何が起きたのか、説明しろって顔してんな。でも、今はそんなこと考えている場合じゃないんじゃないか? ほら、後ろ見てみる。」

「……………え?」

彼の言うとおりに、後ろを振り返るとそこには無数の影達が私を殺そうと追いかけてきていた。それも数体ではありません。数十といった規模の影達が殺そうと躍起になっているのです。

黙ったまま、私は折れた腕を押さえながら全速力で逃亡を謀った。

「ウホホオ！楽しくなりそうだな！鬼ごっこ開始だぜ！」

私達は再び暗闇の町へと足を踏み入れた。この男の狙いが一体何なのかは分からない。だけど、いつか隙を見て殺してくれる。

この夜の町で生きて出することは難しい。ならば私と共に道連れにするまで。それまではひたすら耐えることにしましょう。

いつか訪れる復讐のときまで。

待っていて下さい、父さん、母さん。もうすぐそちらへ参ります。

惨章 暗黒

火事場の馬鹿力とはこの事を言うのでしようか。今、私は腕を折られて激痛が走っているはずなのに、逃げるのに必死で痛みが全く感じられない。

いえ、正確には痛みはあるけれど、気にしている余裕がないだけなのか。

なんにしろ、今私はかなり絶望的な状況下に置かれています。

というのも、背後から無数の影が私を殺そうと躍起になって追いかけてきているのですよ。

それも、五、六体なんて生やさしいものじゃない。数えてみても、軽く見積もって二十体近くの怨霊がいる。

今まで、影達には幾度となく追いかけられた経験はありますが、こんな大群が一度に追いかけてくるなんて一度もありませんでした。

何かが違う。これまでと異なる点といえば、隣に気に触るほど腹が立つこの男がいることぐらいでしょうか。

今も私は足がもげそうになるくらい全力で走っているというのに、この男は空中をスイスイと漂って後をついてくる。

非常に腹立たしい気持ちになります、今はこいつよりも後ろを追いかけてくる影達をなんとかしなければ。

対策法を考えるために走りながらではあるが、周辺を見回し、状況確認を行う。

しかし、何処を見渡してもそこにはあるのは、家や小さな塀のみ。使えそうな小道具も、やり過ぎすための隠れ場すらない。

これは困りましたね……。

そう思った直後、前方に見覚えのある「物体」が見えた。無数の触手に能面のようにツルツルとした頭部に加え、触手が持っている大きな袋。

そう、また私は「よまわりさん」に出くわしたのです。

「はッ………!!」

あまりに突然のことで思わず、困惑の一声が漏れる。何故、ヤツがこんなところにいるのか私には分からない。

しかし、後ろから追いかけてきている影の大群よりも不味い者と出会ってしまった。幸い、彼は気付いていない様子なので、抜き足差し脚でその場を切り抜けようと試みる。

よまわりさんの目の前で、幻覚なのを良いことにルーシーが小馬鹿にしたような態度をとっている。下唇を引つ張って変顔をしたり、変な踊りを踊っていたり。

どうでもいいので無視しましたが、もし見えているのだとしたら、刺激してしまわないかと少し心配でもあります。

しかし、その予感は的中してしまい、よまわりさんの視線が此方へと向けられる。

私は背筋に冷や汗が蔦るのを感じました。この後、彼は私に何をしてくるのか予測できるところから。

「……………クッ。」

半分諦め気味な声を漏らしましたが、予想は当たっていた。私は一瞬のうちに視界が遮られ、辺りの風景が真つ暗に思えました。

そして、数十秒も満たないうちに意識を失ってしまいました。

目を覚ますと、私は見知らぬ地へと放り出されていました。錆くさい鉄の臭い、茶色に染まった金属製の壁にあちこちに響き渡る作業場のような機械音。

私は取り敢えず体を起こして立ち上がり、辺りの様子を伺う。

私はここに見覚えがありません。瞬時に分かった。

そう、ここはかつて友を助けにきた時に訪れた工場。よまわりさんは私の友を浚い、ここまで誘拐してきたのです。そして、今度は私の番。

あの時、遭遇した瞬間に察しましたが、案の定ここに再度来てしまうとは……………。分かつてはいた。分かつてはいましたが、いざまたここに来てしまうとなると非常に悩ましい。何せこの工場の中は迷路のように入り組んでいると聞きました。

脱出を図るのは困難を極めるでしょう。更には、とても鬱陶しい男までしつかりとついてきている。

「おいおい、何やってんだ？あの紳士（笑）に誘拐されるほどお前は間抜けだったのか？全く、これだから人間っていうのは鈍足で困る。拍子抜けも良いとこだ。」

と私に対して彼は煽ることを止めない。ドンドン私の冷静さを奪っていくほど余裕綽々な様子に腹が立つ。

頼みますから、一人でここから出る方法考える時間を下さい！……………と叶うはずもない願いを願ってみました。無駄な抵抗ですね。それに、彼に屈すれば心に潰け込まれ、利用されてしまう。

それだけはなんとか避けねばなりません。

でないと殺された父に顔向けができないから。

あれから数十分ほどさ迷いましたが、一向に出口が見つかる気配がありません。それどころか、工場の影達の数がドンドン増えていき、攻撃的になっていくのです。

ですが、原因は察しています。おそらく隣にいるルーシーが元凶であるのでしょう。彼は自分のことを「神に近い存在」と言っていた。そして、あの残虐性のある性格。彼に殺された人は無数にいるはずで

影達はそんな彼に強い憎悪を抱いている。しかし彼は今、幻覚で私の頭に住み着いています。

気配は感じられるものの、姿が目視できない。それで、ルーシーを宿しているこの私を殺そうと躍起になっているでしょう。

しかし、迷惑な話です。気配がするからという単純で根拠もない理由で、襲い掛かる

とは……………。

そんなに、怒りをぶつけないならば、直接会ってぶつけてほしいですよ。

まあ、それが出来ないほど彼が強力な力を放っていて、近寄りたくもない気持ちも理解できませんが。

思考に耽つていながら、探索をしていると棄てられて錆びまみれになっている廃車の影から光がチラチラと見えているのが見えました。

今度は、何ですか……………?!?影達の一種ならばまだしも、よまわりさんだとするともう逃げ場はありません。後ろは瓦礫の山で塞がっていた引き返すことは不可能。来ることとはできて登れることができない。

と、兎に角隠れる場所はないでしょうか……………?!?

私は瞬時に辺りを見渡し、手頃な大きさの隠れ場を探す。しかし、どこを探しても見つかるとは思いません。それどころか謎の光は此方へと向かってきている。今度こそ、終わりかもしれない。けれど、それではあの男に復讐することすらままならない。どんなにあの男に弄ばれようと構わない。生きて、両親の無念を晴らすのです。

一か八か、私は光の方向へと飛び出し、猛スピードですれ違うようにこの場を切り抜けようと考えました。脳の中に居座っているルーシーはその考えを瞬時に読み取り、私に皮肉を浴びせてきました。

「おい、お前正気か？ そんな突破方じゃ一発でおしまいだ。何故そんな簡単なことすら分からない？ これだから人間っていうのは困る。潔く私を受け入れて「助けてくれえ」って頼めやいいものを。それしか、今のお前には道がないんだぞお？」

再び煽ってくるルーシーを無視し、私はこの場を切り抜けることに神経を集中させる。貴方に屈してはそれこそ、私の負けだ。敗者だ。臆病者と罵られ、殺される。

私は歯を食い縛った後、光が横を向いた隙に、反応できない速度で駆け抜けようと思ってみました。しかし、私は余りにも踏ん張りを付けすぎてしまったのか、足を踏み外し、盛大に転んでしまった。

(しまッ……………!!?)

「キヤツ!？」

気づいたときには、時既に遅しだった。倒れた拍子に折れている左腕から倒れ込んでしまい、凄まじい激痛が全身を襲う。

しかし、今はそう言っていていられる状況でもなく、私は右手を使って即座に立ち上がり、全速力で走り始める。

「待って！」

その場から立ち去ろうとしたその時、背後から聞き覚えのある声で呼び掛けられた。私は足を動かすのを止め、声を冷静に分析しました。

まだ、何日も経っていないはずなのにとても懐かしく聞こえる少女の声。
まさかと思ひ、後ろを振り返る。

そこには「友」がいた。いや、正確に言えばその友本人ではない。その姉です。「友」と似た顔つきで、綺麗な茶髪。間違いない、彼女の姉です。あの時、初めて出会ったと

きのまま。

どうして、このようなところにいるのでしょうか。

彼女は今頃、病院に搬送され、入院しているはずなのに。

それほど深い外傷や具合が悪かったところがなかったと思うべきなのでしょうか。

何せよ、この場をまずは離れて安全な場所に避難せねば、ろくに話もできません。私は彼女の腕を折れていない右手で掴み、近くにあつた人二人分入れそうな大きさのコンテナの方へ駆け出した。無言でいきなり掴まれた彼女の顔は困惑していて、混乱しているようでしたが、今の私には気にしている余裕はありませんでした。

コンテナの中へ彼女を連れ込み、一呼吸置きました。退屈そうに、ルーシーがフワフワと漂っているが、私は無視を続ける。

彼女には聞きたいことが沢山あつた。あれから、助けられた貴女はどうなつたのか、こともさんは安否はどうなつたのか、無事であるのか、心配でたまらなかつた。

物凄く質問をしたい衝動に刈られたが、気持ちを押しさえ彼女に話しかける。

「あ、あの……すみません、焦っていたものですから、無理矢理引つ張つてきてしまつて。お怪我とかはないでしょうか？」

「あ、い、いえ！こちらこそごめんなさい！貴女と正面から話すとどうしても緊張してしまつて……。ほ、ほら、妹の件でお世話になりましたし……。それに貴方つて大人っぽくて魅力的つていうか……」

「……………え？」

最後のほうの言葉が小声になつており、僅かに聞き取れず、私はもう一度彼女に聞き返す。彼女は少し頬を赤らめて慌てた様子で、こちらに返事を返してきました。

「い、いえ！なんでもありません！そ、それよりどうしてこんなところにいるんですか？病院に入院していると聞きましたが……………」

「……………それは此方の台詞ですよ、貴方こそついきりあの時以来、まだ病院にて治療を受けていると考えていたのですが……………」

「……………実は、私より妹のことの方が重症なのです。私のために目に傷を負ってしまつたみたいなのです。眼球が完全に潰されているらしく、回復は望めないつて……………」

今の一言で全身に電撃でも走つたかのような衝動にかられた。それと同時に強い罪悪感にも襲われた。何故ならば、原因は既に分かっているから。それは今、現在隣に居座っているルーシーという男によるものだからだ。

史実、彼は自ら「彼女の眼球を水風船を針で割るのように潰してやった」と言っています。

しかしそれは、実質私を庇つた上でやってくれた事だと思っている。それがなければ、今頃私はこの男に最も酷い目に合わされていたことは火を見るより明らか。

そうですか……………私はこともさんに2度も救われたのですか……………。どうしようもないほど悲しい感情が込み上げてきて、無力さが身体を痛感する。会わせる顔がない。胸がズキズキと痛みだし、右手で押さえ、顔を俯かせる。

しかし、その様子を察したのか彼女、こともさんの姉は私の右手を取り、こう語りか

けてくれました。

「……………私達姉妹に手を貸してくれた貴方には、大変なご恩があります。もし、今何か
に苦しんでいるならば私達に手助けさせてくれないでしょうか？」

それは私にとつてとても頼りになる言葉でした。人から受け取る優しさがこんなにも暖かいものか知るよしもなかった。私は人を受け入れることをいつしか忘れていたらしい。

自分でも実感が湧かないほど、私は苦しみの渦に巻き込まれていたようで、彼女の手を強く握り締め返した。

しかし、それも束の間。

現実には私を受け入れることを許してはくれなかった。

あの男がいる限り、逃げる術はない。

すると、彼女の顔が徐々に震え始めた。初めは痙攣か何かかと思いましたが、予想は外れた。

震え始めたかと思いきや、今度は今まで私を握り締めていた優しい手の肉が泥々に溶け始めたのです。

次第に溶化していく彼女の身体の所々からは蛆が這い出してきており、より化け物に近い体つきになっていた。目玉、耳、鼻、口、爪の間、あらゆる箇所から湧き出している、ホラー映画にでも出てきそうな姿へと変貌した。

私は彼女の変わり果てたその姿に恐怖を覚え、思わず握り締めていた彼女の手を手放してしまった。

「ひ、ひッ……………」

声が恐怖で震えていた。私は思った以上に怯えていた。ゾンビのように爛れた彼女

はまだ、私の手を握り締めてこようとしてくる。そして、歯が抜け、ボロボロに歪んだその口をゆつくりと開き、こう言った。

「オ、オマエノセイデ……………」。

「オマエノセイデイモウトノメガツブサレタンダ……………」。

「……………ッ!？」

改めて事実を突き付けられた私は、心の奥に穴が空きそうな感覚に陥りました。ルーシーが言ったことは嘘じゃなかった。何処か私は、彼が言ったことは私を陥れるための嘘だと、信じたかった。希望を抱いていた。

でも、違った。

私の、私のせいだ。

私があの時、一緒に送ってあげていたら………少なくとも目が潰されていたのは、私だったかもしれないのに。

彼女、こともさんの姉は限界まで溶けきっていて、もう元の原形を留めてはいなかった。おぞましい肉と血の海が目の前まで広がっていく。

吐き気が込み上げてきて、つい手を口に当ててしまった。さっきまでいたはずのお姉さんがどうして………………。どうして………………。？

私は恐怖と罪悪感に耐えることができずに、後退りを始めた。そして

「う、あああッ………………！」

言葉にならない悲鳴を上げ、私はコンテナから飛び出して逃げ出した。もう訳が分からない。

何故、何故こんなことに………………!?

宛もなく私は、ひたすら工場の中を走り続ける。ただ、ひたすらに走り続ける。

段々、視界も歪んできました。まるでトリックルームにでもいる気分です。辺りの風景がぐちゃぐちゃに掻き回されて、断層みたいに歪みきっており、自分が何処を走っているかすら定かではない。

そのどろどろに溶けてゆく彼女の姿がショックだったというより、寧ろ言われた内容のことが頭から離れなかったのです。

お前のせいで妹の目が潰された

あの一言が頭から離れない。あんなに優しく接してくれたのに、突然こんなことを言われるなど思ってもみなかった。想像もしていなかった。

それとも、彼女はわざと私に優しく接し、最初から心を折るつもりだったのでしょうか………？

考えても分からない。理由が理解できないのです。裏切られたようにしか思えて仕方なかった。

そんなことを思考しているうちに、私は工場の入り口の前で佇んでいた。

ここまで来た経緯はほぼ記憶にない。気が付いたときにはここまで来ていたのです。

今ならば、この工場を出る絶好のチャンス。この巨大な門を力一杯押すことが出来れば、この不気味な工場から脱出は目前だろう。

しかし、私にはそれが出来なかった。

罪の意識が脱出を望む私の心の邪魔をする。何度、門を開けようと触れるも自然と力が入らない。

ここに閉じ込められているこの状況こそが、私にとっての罰なのではないか。それが呪いなのか運命なのかは定かではない。それを知るのはまさに神と名乗るこの男のみこそ。

「それみたことか。やっぱりお前らは、私の助けを借りないとこの先、生きていくことすらできないんだよ。あの美喜子とかいう女もそうだったな。自分一人でも生きていけるなんて抜かしてた癖に、今はどうだ？ 勝手に落石に巻き込まれてあの有り様。無様にも程があるぜ。その証拠にほら、今の自分の姿を見てみる。あの女と何が違う？」

そう言われた瞬間、辺りの風景が一気に暗黒に包まれたように思えました。確かにその通りかもしれない。

彼の言うとおりに、私は病弱で貧相。さらには、性格も歪みきっていて、一時期自殺も考えたほど。一人でなんて生きていける自信と力なんて微塵もありません。両親の恨みを晴らすなどと甘い理想を抱いていたのがそもそも間違いだった。両親も無しで生きていくなど、端から無理な話だったのです。

もう、生きるのに、疲れた。

休みたい。

何か、何かすがるものが欲しい。

臆病者と罵られても、負け犬だと馬鹿にするのも構わない。

ただ、疲れた。耐えられない。

私は死人のようにゆつくりとルーシーと名乗る男の前まで歩き、ひざまずいた。そして、こうお願いした。

「助けて下さい……………お願い……………します……………」。

そう彼に悲願すると彼は待っていたかのように、目を赤く発光させ、不気味なまでに嬉しそうな笑顔を浮かべた。

肆章 回廊

あれから幾度も時の時が流れたのでしょうか。もう随分と長い間、眠りについていたような気がする。時間の感覚すら失われているのか今、何時なのかすら分からない。何故ならば今、私が存在している場所は辺り一面、暗黒に包まれた暗闇だけの世界にぼつんと取り残されているからだ。

左右どちらに歩いてても、無限の回廊が続き、上と下の概念すら感じさせない。ただ、自分の姿はスポット照明に照らされているかの如く、はつきりとその空間に映し出されているのです。実際に光は存在しないはずなのに、はつきりくつきりと。

何処もかしこも暗闇しか存在しない。まるで私にこれ以上、何かを求めてはいけなと言わんばかりに。

誰もいない。何も無い。邪魔するものもいなければ、話し掛けてくれる人もいない。正に虚無の空間。私が普段願っていたことが今叶ったのかもしれない。

「死んでも、天国も地獄もない虚空の空間にずっと閉じ籠っていたい」と。

ですが、こんなに孤独に感じるなど思ってもみなかった。音も響かないこの場所が恐ろしい。一秒だって耐えられない。猛烈に誰かに会いたい衝動に刈られた。誰か、誰でもいい。兎に角、返事をしてほしい。

「だっ………誰かッ………！」

今にも悲しみの感情が吹き出してしまいそうな声で私は助けを求めた。だが、こんな声では外にいる人間処か、影達にだって届かない。

届かないと理解していながらも、必死に助けを求めながら、この漆黒の空間を私はただ歩き続けました。けれど次第に自分が何処を歩き、どうやってここまで来たのかすら分からなくなってきました。

幾ら進んでも終わらない暗黒の回廊。

段々と心も折れ始め、足を進める気力も徐々に衰えていく。

悲しみや脱力する感情すら奪われていく。

絶望することも許してはくれない。

私はついに心折れ、足を止めてしまった。そして、地面(?)にへたりこむ。頭を抱えて、思考をしようとするも何も浮かんでこない。頭の中もこの空間と同じくらい虚空になっていたのだ。

「こんなもの………、端からどうすればいいのですか………!」

人間の扱える範疇を越えている。コレが先祖代々続いていること………? 父さんも母さんもお婆ちゃんも彼に捕まったのだろうか。皆これを味わって死んでいったのだろうか。この何も存在し得ない空間を出ることが出来たのでしょうか。

………まあ、望みは薄いでしょうが。

すると、背後から謎の気配が出現するのを感じました。嫌な予感がし、振り返るとそこにはあの男ルージュがいた。しかし、人間の姿ではなく炎の獣へと姿を変えており、真つ直ぐ此方へと向かってきている。しかも、かなりのスピードで追いかけてきているのです。

五十歩百歩と分かっている私、その場から反射的に走りだし、逃走を図りました。今まで逃げ回ってきた影響なのか、身体が本能を察知し、知らぬ間に対象をしているのだ。

暗闇の中を延々と走り続ける。しかし、私は薄々気が付いていた。

この世界には出口がない。

更に言うなれば、隠れる所すらない。裸にされているように身も心も弱みも全てさらけ出されている。

故に、いずれ体力が尽きて追い付かれてしまう。何処まで向かおうとも深淵が続き、ヤツとの距離が離れる処かむしろ狭まってきているのです。

足を速め、全速力で逃げ続ける。しかし、幾ら走り続けても逃げきれぬ未来が見られ

ない。

「はあ……………、はあ……………」

息が上がり始め、足も重石をくくりつけられたかのようにずつしりと重量を増し、動きが段々鈍くなってきました。

燃え盛るような見たくもない灯りが背後から迫っている。

だ、ダメです。こんな所で止まってしまつては。ここで足を止めてはそれこそヤツの思うつぼだ。どれだけ足が重かろうと今はどうでもいい。

ただ、ここから逃げきることだけに考えを切り換えましょう。

しかし、身体がその思いについてこれていないのも事実。どれだけ意識しようとも、速度は低下していくばかりだった。

振り返つてもヤツは消耗して低下するどころか、さつきよりもどんどん速度が上がっているように見えました。

でももう無理だ。逃げることはできない。何せもう足は限界を迎えていたのです。考えてみれば、この1日私はまともな休暇をとっていません。

自宅から家出をし、町中を歩き回った。右足も負傷しました。電車に引かれそうにもなった。工場まで友を迎えにも行つた。

それでいて、神社で腕を折られてさらにはその腕を支えながら再び町を走り回つていくのです。

当然といえば当然。

普通の人間では限界をとうに超えている。それでも走ることを止めなかった私ですが、急に視線が傾き、ぐらついた。そして、体制を立て直そうと試みるも足が動かない。そう、私は足が動きを止めたことで地面(?)に倒れ込み動けなくなつていたので。

(ダメダメダメ、こんなところで止まつては………！動いて………私の足！殺されるのですから頼みますよ！)

自問自答を繰り返し、自分を鼓舞するも効果は当然ながら何も起こらない。奇跡など望むつもりはさらさらなかったが、願いたかった。でももう運は尽きた。

もう無理だと諦めようと考えそうになったその時

誰かが前方から歩いてくる。それも女性。美しい白い髪に凛々しく整った顔。少し気弱そうに見えるかもしれないが、何せよこの世界に私以外にも人がいたなんて………！

まだ、希望があるかもしれない。そう受け取った私は今にも棒になりそうな足を何とか動かし、一筋の光に向かって歩きだす。

歩く速度を少しずつ加速させ、その人の側に向かってひたすら進み続ける。

折れた左腕や今にももげそうなくらいの足の痛みが身体を襲うが、そんなことは今は関係ない。

誰でもいい。兎に角、助けてほしい。その一心で突き進む。

しかし、ついに足の体力が限界を迎えたのか全くといっていいほどピタリと動きが止まりました。そして再び倒れ込みそうになった瞬間、

女性が目の前まで来ており何も言わずに地に倒れかけた私の体を支えてくれた。お

陰で私は地面に倒れることはなかった。

ああ……………助かりました……………。これでまだ逃げきる望みが出来た……………。

いえ、まだ油断は出来ません。何しろまだ、あの男が追ってきているのです。いずれは私達二人とも焼き殺されるに違いありません。

女性の手を借りて私は姿勢を戻し、ヤツはまだいるか背後を確認するとヤツの姿は忽然と消えていた。まるで最初から存在していなかったように気配がしない。

不気味なくらい不自然な現象が発生しましたが、取り敢えず危機を脱した現状に目を向け、私は胸を撫で下ろしました。

取り敢えず、暫くは命の危機に脅かされることはないでしょう。

私は手をさしのべてくれた女性にお礼を申そうと頭を上げ、女性の顔を確認する。

私は目を見開いた。そんな馬鹿な。有り得ません、だってだって……………彼女は、いやあの方はもう死んだも同然のはずなのに……………。

驚愕の気持ちと感動の思いが混合し、複雑な気分へと陥る。

.....
ああ、その女性が誰なのか語っていませんでしたね。そこにいた女性とはなんと

私の大好きだった母だったのですから。

伍章 まやかし

「……………ルキア、久しぶり。こんなに大きくなつて。私嬉しいわ。元気だった？」

優しい母の語りかけが私に向けられているが何も反応を見せられませんでした。何故ならば今、病院のベッドで石のように固まつて動けないはずの母が私の目の前にいる。

訳が分からなくなりそうです。だって父に続き、母までもが私の前に現れた。どう考へても偶然にしては出来すぎです。怪しいとしか言い様がないのですよ。

私は再び、母の顔をまじまじと眺めた。美しく白い髪に私と同じロングヘア。狼のようにするどくも優しい眼差しをした目。凛々しく整った鼻。そして、重い持病による疲れから出来た目の下にある隈。

何処をどうとつても、母としか認識出来なかつた。しかし、どうしても私には信じる事ができないのです。

私が無言のまままだ疑っている様子を察したのか、母が私に向かって優しい声で話掛けてきました。私はドキツとして思わず顔を赤らめ、目線を反らす。

「ああ、そうね。貴方も驚いたわよね。大丈夫、私もそうだったから。いきなり目覚めたのですもの。これも神様の思し召しかもね。」

私も……？母も私と同じくアイツに何かをされたのでしょうか。

こうなると恥ずかしがるなど細かいことは気にしていられなくなり、私は興味本位で母に尋ねた。相当、勇気を振り絞ったのか額から一筋の汗が伝う。何故、母にここまで緊張する必要があるのか、

「母さん、どうしてここにいますのですか？まさか、母さんもアイツに………？」

すると、母は何を言っているのか分からないという拍子抜けた表情をし、首を傾げた。

その後、クスリと微笑み、再び会話を開始しました。

「アイツ……………？ふふ、ルキアダメよ。アイツなんて呼んじや。あの方が私を甦らせて下さったの。アイツなんて呼ぶのは失礼よ。」

「……………？母さん、どういうことでしょうか……………？アイツ……………いえ、あの方と何があったのかきちんと説明してください。でないと私、混乱しっぱなしで状況が飲み込めません……………！」

「ん……………ああ、ごめんね。いきなりあの方とか言っても敵対していた貴方には少し混乱させちゃったかな。一から説明してあげるから一旦落ち着いて。ほら、深呼吸して。すうーっ……………はーっ。」

「……………母さん、私はもう小さな子供じゃないんです。それくらい出来ますよ。」

「あら、ごめんなさい。フフフ。……………さて、まずは病院で起こった出来事からね。」



暗闇のなかで数十分、私は母から事情の説明をしてもらいました。話を聞く限り、どうやら母は夢の中に閉じ込められているような感覚に陥っていたらしい。そこでは毎日、火の海の光景が目に見え、全身から火で焼き尽くされるのだといいます。

なんと恐ろしい夢か私には想像もできませんでしたが、壮絶な思いで毎晩過ごしたといえます。

ですが、そんな中にあの男が手をさしのべてくれたと母は仰っています。

『この悪夢から逃れさせてやる代わりに私のために一肌脱いでほしい』と。

普段の母ならば、このような怪しい誘いを甘んじて受けるほど間抜けなことはいらない人です。

ですが、今回ばかりは我慢出来なかつたのでしよう。何せ体内から焼き尽くされるのです。私ならば悲鳴を上げてしまうに違いありません。

それに母は夫である父を心から愛していました。父が己の身を助けてくれた代償に

力を貸してほしいと頼まれれば、すぐにでも手を貸したくなる気持ちも分かります。だけど、私はどうしても納得が出来ない部分がありました。

どうにも母の行動と合点がいかない部分があるのです。それは母はいつも病気で気弱そうな顔立ちはしていても、誰の言うことにも屈したりはしていませんでした。

少なくとも一度や二度、命を救われた程度ではたとえそれが父であろうとも、恩義を感じたりする人ではないことを私は知っています。

子供のころも道端に転んだとき、母は優しい言葉は掛けてくれましたが、決して手を貸したことは一度もありません。

優しいけれども厳しく人に頼りながら生きて行くような仕付けは今までなかったほどののです。

その母が幾ら地獄の業火の中から救われたとはいえ、そう簡単に屈服するようにも思えないのです。

しかし、幾ら疑問点が浮かんできても、母を疑うことは私にはできない。もう疲れたのだ、家出なんてするものじゃなかった。でなければ、今こんな風に怪我をしたり罵られたりして、気持ちも限界を迎えることもなかったでしょう。

最初から私には、一人で生きる力なんてものは端っから存在しないのです。その事に早く気付くべきでした。今までどうして自由になろうと足掻いていたのか。

少なくとも、今の母は私の気持ちを読み取ってくれるでしょう。もう貴方一人で戦わなくていいと言ってくれる筈です。そう期待しては私は母の柔らかい身体に身を寄せ、目を瞑る。

すると、母は私の思惑通りにそつと抱きしめる。そしてそつと手を添え、頭を優しく撫でられる。

胸の奥から暖かい何かが全身を包み込む。それは私には説明するのは難しいですが、兎に角、安心感を抱いた感情であることは間違いありませんでした。

不思議と私は目元から涙を流していた。一日で多くの出来事を体験し、苦しんだ影響か、はたまた蘇った母に出会えたことに対する歓喜の気持ちなのか。

もしくはそのどちらでもないのか。ただ私は安らぎを求めていただけなのかもしれ
ません。

気が付くと私は母の胸元で泣き崩れていたようで彼女の服をぐっしよりと濡らして

いた。私は慌てて母から一步離れ、腕で涙を拭うが止まらずに溢れ出てくる。

(今日、どれだけ涙を流したのでしょね、私は。)

そんな独り言を心中で呟いていると、私を再び胸元に埋めるように抱きしめてくれた。

情けない気持ちにもなりつつ、けれど今はこのぬくもりに充分に浸ることにしました。

後のことは母と一緒に考えていきましょう。

そうだ、母には話したいことが沢山あるのです。今まで虐待されて虐げられてきたこと。人生初の家出を試してみたこと。お化けに出会ったこと。

友達が出来たこと。

どれから話そうかと思うと胸が弾む。暫く考えたすえ、まずは初めての友達のことから話していきましょうか。

初めて出会った時は……そうでしたね。彼女のお姉さんから保護の依頼を頼まれた所からでしたね。

それからお姉さんと再開したとき、彼女が身を挺して私達をあの化け物よまわりさんから逃がしてくれたのでしたね。

それから、それから……………。

あれ？友達といえ、こともさんは今頃どうしているのでしょうか……………。

あの後、ちゃんと帰ることが出来たのですか？目を潰されたと聞きましたが、無事
でいるのですか……………？

段々、不安が募り始め、落ち着かなくなってきました。もしかして、流血が酷くて間に合わなかったなどいうことになっていないでしょうか……………？あのお姉さんは無事
だと言っていましたか？本当かどうかは定かではありません。

こんなところでウジウジしている場合ではない。

「友の、いや家族の安否を確認するまではまだ母のところへは帰れない。

これは私が始めた戦いなのです。ケリをつけるまで止まるわけにはいかない。

そう思いを見詰め直し、私は母の胸元から静かに離れ立ち上がった。

「……………?どうしたの、ルキア?突然立ち上がったたりして。」

「ごめんなさい、母さん。私、友達を助けに行かねばならないことを思いだしたのです。」

「友達? 貴方、友達が出来たの?」

「ええ、母さん。奇しくも彼女は私のために命を張ってくれた命の恩人でもあるのです。

頼まれた面倒は自分で片付けなければ。」

ここで母はきつとそんな私を許して貰えると確信していた。

しかし、返答された答えは私の求めていたものとは違っていた。

「ルキア？お友達が出来たのは母として誇らしいことだわ。

だけどね、まずはあの方に対して忠誠を尽くしてから行うべき行動じゃない？

貴方達は現在、敵対関係にあるでしょう。それは私としては望ましくないことだわ。だって恩義を尽くさなければ失礼でしょう？

友達の安否はその後の確認すればいいじゃない。ね？ルキア？今はそつちの事を優先しましょう？」

何を言っているのでしょうか。母は私の初めての友達トモの安否よりもあの方を優先するよう仕向けてきた。確かにその通りかもしれないが、今すぐ手を貸さなければいいという訳でもないでしょう。

いよいよ怪しい。母親ならば娘の初めて出会った友達のことは高く評価してくれてもいいはずだ。

それをあんなヤツより軽視すべきですって？冗談じゃない。悪いですが、今回だけは幾ら母の頼みとはいえ、受けることはできない。何しろ、ヤツは邪悪な存在です。人の家族を平気で奪い、人を感情なしに傷付ける。そんな存在です。

そんなヤツの願いを聞き届けるなどどうかしている。

「……………母さん、今回だけは貴方の言うことは聞けません。私の初めての友達なので。それに改めて言いますが私はもう子供じゃないんです。行かせて下さい。」

「行くって何処へ!?!ここは暗闇の回廊よ!出ることもなんて出来ないわ!彼の力は貴方も知っているでしょう!?!それにこの中で何処に向かうというの!?!」

母は声を上げて、私をどうにか引き寄せようと試みてくる。しかし、今さら遅いです。見捨てるまではしませんが、私にとって現在大切なことは私を夜の町から一歩進ませてくれたあの子に恩を返すことです。ここには何も始まらない。

「……………けれど、今の私にはじつとしていることなんて出来ません。確かに宛はあります。切り開ける自信もない。ですが今、命の危機にある友を見殺しにすることは私には出来ません!」

「……………そう。なら仕方ないわね。」

と母は無言で私の腕を強く握りしめ、動きを封じてきた。もの凄く強い力で握りしめられており、激痛が走る。折れている左腕ではないはずなのに、今にも折られてしまいそうなほど、力強く拘束されてしまう。

「……………ッ。か、母さん、い、痛いです……………！離して下さい……………」

しかし、母は決して私の腕を離そうとはしない。この力加減は持病持ちの女性には確実に有り得ない力です。一体どうなっているのでしょうか……………？

「……………いいえ、ルキア。残念ながらそうもいかないわ。貴方はたった今、私達に対してとてつもない裏切りをけしめかけた。そんな貴方を私は許すわけにはいかないわ。」

なんということでしょうか。まさか、本当に母までもが完全にヤツの支配下に下ってしまうとは。これは非常に不味いことになりました。とうとう、頼れる人が一人も居なくなってしまう。

ですが、私は後悔はしておりません。何故ならば、私はもう弱くはない。かつての

貴方母さんのように私も強くなつていくのです。

「母さん！離して下さい！私は行かねばならないのです！こ、こんなやつて間違つてます！目を覚まして下さい！あんな父の皮を被つた化け物など信用しないで下さい！」

折れた左腕も器用に使いつつ、必死に抵抗するも、力はどんどん増していくばかり。全く離れる気配がない。

「まったく、私が関わつた怪物達はこうも馬鹿力を持ったもの達ばかりなんですよか…!？」

母は険しい表情でがっちり私の腕を掴んだまま、微動だにしません。あれだけ大きな事を抜かして置いて、ここで殺されることは私にとって大きな恥になります。

それだけは、せめて自分の意地くらい貫き通さなければ、全てにおいて私は敗北してしまうでしょう。

「やっ、ここまで来たのにみすみす命を投げ出すなど持つての他。」

「(い)めんなさい、母さん……………」

最後の抵抗で私は両足を使い、力のある限り踏み込み、跳躍して母の腹部目掛けて蹴りを叩き込んだ。まさか、反撃をされるとは想定していなかったのでしょう。驚愕して、彼女は唾を口から吐き出し、後退りをした。

それと同時に掴んでいた私の腕も離し、私は自由の身になった。

「よし、これ……………ウツ……………!?!」

先程まで掴まれていた右腕の橈骨と尺骨の部位がズキリと傷んだ。これでまともに両腕が使い物にならなくなりましたが、取り敢えず足が動けば、どうにかかりますね。

そう思つて足を少し捻つてみると、ほんの数十秒前まで、一步も歩けないくらい疲労しきつていた脚部がすっかり回復していました。

母との対話の間に相当な時間が経過していたためか、定かではないがこれならば再び走つて逃げる事が出来るでしょう。

助走をつけてその場から、急いで立ち去ろうとすると、腹部を手で押さえた母が必死に私に追い付こうとふらふらと追いかけてきていた。

「待ちなさい、ルキア……………！貴女をここから出す訳にはいかないわ……………！」

そして、私は有ることに気が付きました。

それは母の眼球が血に染まったように赤く変貌していたことです。やっぱり、全部……………アイツに仕込まれた作だったとでも言うのでしょうか。

しかし、あの赤い瞳の持ち主は私の知る限り、一人しかいない。あの母はヤツの生み出した幻覚だとそう願いたいものです。

でなければ……………私は……………。実の母を蹴り倒してしまったことになりません。そうなるともう顔向けが……………。

しかし、それを断ち切ると言わんばかりに私の目の前で有り得ない出来事が起こった。

母と思わしき人物の背後に人ならざる生物が出現したのです。その特徴は、私の1.2倍ほどある大きな身長に武将が着ていそうな雰囲気の灰色をした鎧のような体。蜥蜴を模した構造をしている二本指の足に、鎖が巻かれた6本の指を持つ屈強な腕。

それに加え、さらに私を驚かせたのはその体ではない。その頭部だった。

なんと、頭が黄金色をした竜だったのです。ゴツゴツとした見た目ですが、頭部の後方に角らしきものが二つついていて、爬虫類の特徴をした鋭い犬歯がびっしりと並んでいる以上、竜としか呼ぶことができない。それに横に二つの眼球に加え、額の部位にもうひとつの目玉が存在していました。

明らかに異質な見た目ですが、それはあの時、幽霊列車や工場へと向かう途中にて見掛けたあの竜頭の男だったのです。何故ここにいるのかは、私には分かりませんが、少なくとも私の味方とは限りません。

母は背後にその男が突然現れたことに気が付き、慌てて後ろを振り返る。冷や汗が母の首筋に蔦るのが確認できます。どうやら恐れているのか、ピクリとも動かなくなりました。そして、次の瞬間に男は背中に背負っていた巨大な刀身を持つ刀を取り出し、両

手で握る。そして、その凄まじい大きな刃をもともせず尋常ではない速度で振るった。すると、

母の首がそのしなる刃によつて瞬時にはね飛ばされた。

余りに突然の出来事過ぎて、一瞬思考が停止しそうになりました。しかし、母の首が真つ二つにされ、地面へ転げ落ちた事実より、その後の様子に目を奪われました。

首だけとなった母の頭部が消滅し、代わりにあの男ルースィーが出現したのです。

ということは、今までいた母の姿をしたあの人はやはり、彼の生み出した幻覚だったということですね。

そして、ヤツその表情は怒りに満ちており、眼差しだけでも人を殺せてしまいそうな強烈でおぞましい姿でした。

竜頭の男は、独特な構えでヤツに向けて刀の刃を差し向けた。やはり、敵対しているのかお互いに一步も引く様子は見られません。そして、この緊迫した空気の中、先に口

を開いたのはルーシーのほうからだった。

「お、おのれ、貴様……………！またしても私の邪魔をしておつて……………！この私を誰だと思つてやがる……………!?!」

その口振りからは、私に話し掛けてきたときとは余裕が見られず、少なくとも気を緩めるとただではすまないことは確かでした。

すると、竜頭の男はゆっくりと顔を此方に向け、ふと上部だけの笑みを浮かべた。

目は瞼が動かないため、表情は読み取れませんが、口元だけは大きな歯を見せ付けるかの如く、大きな笑みでした。

それはまるで、今まで私に会いたくてたまらなかつたような優しい笑みだった。

その嬉しそうな笑みを浮かべられると私もどうすればいいのか、分からなくなり、困惑してしまふ。

「あ、あの、私は……………。」

反射的にだった、男に話し掛けようとするが、言葉が出てこない。何しろ、相手も化け物の姿をしている。信じろというほうが、難しいでしょう。

困惑している私のことを案じたのか、男は小さく口を開き、こう囁いた。

行け、絶対に振り返るんじゃないぞ。

すると、彼は相手の方へと向き直り、両手で刀を構えた。信じがたいですが、私の方のようです。私はお言葉に甘えてここから立ち去ることにしました。

しかし、これで彼に助けられるのも二度目ですね……。何者かは知りませんが、これは好都合な展開です。このまま物事が運べば、ヤツを頭から追い出せるきっかけにもなりうる可能性だってあります。

あまりにも出来すぎた願いだと分かっているながらも、私はその希望を内に秘め、虚空の中を走り続ける。

しかし、その希望もすぐに打ち砕かれた。

「はあ、はあ……………、あの野郎、手こずらせやがって……………！危うく逃げられるところだったぜ。」

目の前までヤツが瞬間移動をしてきて、退路を塞がれてしまいました。後ろに振り返って逃走を図ろうと試みても、すぐに回り込まれて逃げ場を失う。

「……………クツ、どうしたら……………」

「幾らガキで俺の所有物とはいえ、限度つてもんがあるんだよ。俺の目の前から逃げやがったことを死にたくなるほど後悔させてやる。」

「ちよつと待つて下さい！あんな怪物が出てくること自体想定外でしたし、ましてや母

さんが貴方の作り出した幻だったなんて……………」

「黙れ、もう口を開くな、ルキ。そんな言い訳は関係ない。お前は私の前から逃げ出した。その事実だけは誰も曲げられない……………」そのくらい馬鹿のお前でも分かるだろ？……………」。つたく、どうしてお前ら人間どもはいつもそう都合の良いときに限って命乞いをするかねえ……………」

彼は呆れた仕草を取りながらも、指を、パチン、と鳴らした。

……………」すると、体が急に火照りだし、汗がみるみる垂れはじめ。そして、腕から火が発火したかのような激痛が走った。

まさかと思い、私は自分の両腕を顔まで近付け、この熱気の正体を確かめようとした。

確認すると、私の腕からは本当に火が燃え上がっていた。しかも、恐ろしいことに、外部からではなく、体の内側から発火し、焼かれている。

次々に、他の部位からも火がつきはじめ、顔からも火の手が上がった。

「い、いや……………」

「!!!」

終章 幻魔

私はあれからどうしたのでしょうか。暗闇に放り込まれた後に、母の幻覚に惑わされ、それから謎の鰐のおじさんが救ってくれた所までは覚えています。

しかし、それ以降の記憶が霧がかかったように曖昧になっている。さらには、身体中が大火傷を負ったかのように痛みを抱えている。

私は着ているタンクトップをつまみながら、胸元を覗き込み、胸や肩、お腹などのあらゆる部位を確認しました。すると、無数の箇所が焼け爛れていて、大きな火傷の後になっています。何故、火傷などという闇から程遠い傷を負っているのかは知りませんが、傷は一応殺菌されたようではぼ塞がり始めていますね。取り敢えずは応急措置を取る必要はなさそうです。

今後、痕になって残ってしまいそうな火傷の跡ですがね……………。

気を取り直して、辺りを確認してみましよう。ここは何処でしょうか……。なんとなくですが、見覚えのある地形です。

周りには、遊具が並んでおり、私は無意識にブランコに腰掛けていた。

そうだ、この場所は私がこの夜、始めて訪れた公園だ。あの時には、私も臆病でたかが一、二体の影に怯えて逃げ回っていたものです。

数日しか経っていないはずなのに何だか懐かしく思えますね。

今は夜の8時頃といったところでしょうか。影ももう彷徨っていて可笑しくない時間帯のようですが、誰もいる気配はない。今日は影達も休暇をとって休んでいるのかもしれません。確率は皆無に等しいですが。

さて、やるべきことを済ましておかなければ。

私はブランコから立ち上がり、公園から外へと出た。暗い暗い夜道をひたすら歩き続ける。

しかし、今回、家出して目的もなくさ迷うだけの私ではない。ちゃんと目的を持って

行動している。目指す場所は自宅です。私にとっては楽しい思い出の欠片もなく、帰りにたくもないあの忌々しい叔父が暮らす住宅。

ここから、自宅まではそう遠くはないので、多少歩けばすぐに到着します。急がねば。決心が鈍ってしまう前になんとかやり遂げなければならぬ。

数分後

……………やつと着いた。私の……………家だった場所。真つ赤な屋根に典型的な白い壁。それに壁よりも白く染まっている玄関の戸。思い出すだけでも恐怖のあまり身震いしてしまう。

私は手を胸に置き、高鳴る心臓を静めたために、深呼吸をし、深く息を吐く。代々の人々には、この感覚は理解しがたい感情なのでしょうが、兎に角恐ろしいのです。

大人の男が平手打ちで、自分の頬を打つ瞬間。毎日、仕事から帰っては酒を浴びるよ
うに飲み、荒れ狂う叔父に怯えてクローゼットに隠れる日々。少しでも機嫌を損ねれ
ば、げんこつやまた平手打ち。手のひらが頬に直撃し、深く痛み出すあの感覚は忘れ
うもない。

服を脱がされかけたこともあった。平手打ちなどは人の叱り方などで聞いたことは
あるので、それは個人的な事情として百歩譲って許しましょう。

しかし、服を脱がされ、シャツ一枚にするのだけはどうしても許せない。あの恥じら
いと複雑な気持ちは女にとって究極の屈辱だ。いくら身内への体罰とはいえ、流石に度
が過ぎている。

さらには、胸を思い切り掴まれ、揉まれたこともあった。思い出だけでも背筋が
ゾツとする。

気持ち悪い。

それでも、私は叔父に対してやらなければならないことができたのです。なので、多少震えながらも、私は自宅に戻っていった。

——数日しか経過していないはずなのに、とても懐かしく思える。ゴミ袋だらけになった玄関の間。もう今では歩く場所すらままならない。

靴を脱ぎ、その汚らしい空間を抜けて、戸を開けると今度は、空き缶の山がそこら中に散らばっているリビングへと抜けた。

これもいつも通りの光景だ。ストレスを抱えた叔父が飲んだくれて、そこら辺にビール缶をポイ捨てしたものが山積みになっている。

ある程度は、私が片していました。いつしかそれを上回る勢いで増えていったようです。

今では、家具が見えなくなるまで缶が投げ捨ててあり、机が埋もれて姿を消していた。

お風呂場や洗面所、お手洗い場など一階のあらゆる場所を搜索してみました。叔父

の姿は見当たらない。

ということとは、二階の寝室にて就寝でもしているのでしょうか………? 或いは、未だに仕事場から帰っていないだけかもしれない。

兎に角、二階にて確認するのが最善でしょう。私は、あるものを取り出し、台所を後にリビングを抜けて、階段をゆっくりと上がっていった。

階段を登りきり、寝室へと到達すると、そこには私の予測した通りに叔父がだらしない姿で就寝している所を発見した。

近くに設置してある小さな机にはこれまた大量のビール缶が転がっている。

そこには花瓶もありましたが、ビール缶の山によって端によってしまっている。

さらには、中の小さな勿忘草はすっかり茶色く染まって枯れきっていて、見る影もない無惨な姿へと変わってしまったのです。

そんな事を考えていると、叔父が私の存在に気が付いたのか、目を擦って布団から起

き上がった。そして、物凄い形相近づいてきて私の腕を掴み、右手による平手打ちを喰らわされた。バチン、ともはや清々しいくらいに打撃音が寝室に響き渡る。

私は、目を叔父から背け、ヒリヒリと痛む頬をそつと手のひらで撫でた。この男は私がかたえ怪我をしていようとしていなかろうとお構い無しに私を傷つけるのです。

日常茶飯事だと分かっているながらも、未だに慣れることの出来ないこの状況。

そもそも、慣れてしまうことが既に狂っていることなのかも分からないですけど。

そして、叔父はすつきりしたような顔立ちになり、私に向かって命令を下した。

「……………つたく。どこに行つてた、このうすのろ女。あまり彷徨かれるとこつちも迷惑なんだよ。余計なことはするな。分かったな!？」

普段は、私に対してすぐにでもここから去つてほしいなどとほざいている割には、いざ私に出ていかれるとすぐに手のひら返しをし、ここに留まらせるように指図する。

多分、問題が起きることや経済関係に関わることなどを避けているのでしよう。

なんと都合の良い男だろうか。わがままにも程があるというものです。

「……………詫びくらいしろ、ルキア。」

そう言って彼は、千円札を無理矢理私に押し付けてきた。このやり取りの目的は分かっていた。私にお酒を買ってこいと指示しているのです。

そして、適当なお惣菜でも買って、さつさと夕食を済ませろという合図だ。これもいつもと同じ会話の内容である。

何故、今までこんな男の言いなりになって苦勞していたのか。

私は貴様の都合の良い奴隷じゃない。

私にだって自由に生きる権利くらいある。私有家出したことで少しは私の扱いについて考え直して欲しかったが、時間の無駄だったようです。仮にも、私は姪にあたる存在。少しくらいは情けをかけて欲しかった。

物凄く損した気分へと陥る。失望した。ここまで墮落してたとは。所詮こんなものでしたか。

私は背中を向けている叔父に無言で近付いていく。

そして

私は隠し持っていた歪な形状の短刀を叔父の首元に突き刺した。

「ツグ!!!? お、お前何を……………!!?」

「今まで、私に散々してくれたその御返しです。因果応報ってやつですよ。叔父さん?」
……………何が起きたのか分からないって顔をしていますね。それはそうでしょう。何せいきなり、首元から激痛が走り、大量の流血を流しているのですから。

なんだかんだ、彼のことを叔父さんと呼んだのは、人生で二度目くらいな気がする。喋る気力すら失くなるほど、私は辛かったです。このくらいの報復など今までの仕打ちに比べたら、まだまだしな方だ。

「……………お前、こんな事して……………ただで済むと思うなよ……………!」

血反吐を吐く叔父は、此方を振り返り、私の腕を掴もうとするが、力が失われてきて

いるため、そのまま地面へと崩れ落ちた。一生懸命、首を押さえつけ流血を止めようと試みているが、もはや手遅れ。

時間を掛けてゆつくりと絶命していくでしょう。

それに私は手を貸すことも、下すこともしないのです。ただ、手のひらでバクテリアが蠢いているだけのこと。

人間はバクテリアが幾ら喚きだそうとも気にしませんからね。

そのまま息の根が止まるのをただ、見守るというのも悪くないのですが、こいつには随分いたぶらてきたものです。

刃物で全身を穴だらけにするのも悪くない。

どうやっていたぶり返してやろうかと余韻に浸っていると床に突っ伏している叔父が首元を押さえて必死に私に対して訴え掛けていた。

しかし、生命力が弱っている影響が全く彼の言おうとしている言語を読み取れませ

ん。

おそらくですが、命乞いを私に対して求めているのでしょうか。

ええ、ええ、よく分かりますよ。命を失うのは何よりも恐ろしいことですものね。

しかし、それを教えてくれたのは貴方だということをお忘れなんでしょうか？

それならば、それ相応の御返しをしなければ筋が通らないと言うものですよ。

「やめ……………ろ、お前……………げほつ……………。俺なしで、これから、どうやって生きていくってんだよ……………」

「……………言っている意味が理解出来ませんね。私の命は既に死んだのですよ。父や母を失った、あの時から。」

そう吐き捨て、私は虫の息となっている叔父の脇腹に、蹴りを入れた。

叔父の口から、さらに血が吐き出され、蹴られた腹部を抱えてのたうち回っている。なんとも無様な姿だろうか。とても気分が良い。爽快です。

まもなく、頬つて置いても勝手に叔父の命は絶命するでしょう。

さて、この血だらけになった身体を掃除しなければ。一分だつてこの汚らわしい血を付けていたくない。

私は、証拠隠滅のために浴室のある一階へと下つていった。

一方、二階に取り残された叔父はこんな事を呟いていた。

「幻……………魔……………。すまん、姉貴……………俺じゃ……………守り……………切れんかった……………」

当然だが、彼女は最後に叔父がこのような言葉を残して言ったことは、何一つ聞いていない。

そして、血を洗い落とした後「神谷 ルキア」はこの住宅街から姿を消した。

数日後、自宅にて彼女の叔父に当たる人物が刃物で首を一突きにされ、殺害されていたのを後に警察が発見した。

辺りは血の海と化しており、惨劇だったという。そして、余程苦しんで死んでいったのか、涙を浮かべて、絶命していたらしい。

詳細は不明。

警察は、十中八九ルキアの仕業だと断定し、捜索を続けているが、はっきりしたこと

は分かっていないそうだ。

興味本意で殺人現場まで赴いてみたが、立ち入り禁止の「KEEP OUT」のテープがクロス状に入り口に貼られていて、見学すらできない状況になっている。

多分、あそこに行つたんじゃないかな。

また、夜がやってくる。

今度はもつと過酷な夜道となるだろう

それでも、迎えに行かなきゃ。

決してその夜道を振り替えるな。

そうすれば、追いつける。

待ってろ、ルキアちゃん。

もうすぐ、
会えるから。

番外編

夜明

もうどうでもいい

復讐とか、友達とか

家族なんて

どうでもいい。

私は限りなく神に等しい近い力に触れた

それで

真実を知った

この世界がただの

傀儡でしかなかったことに

一つの物語に過ぎなかったことに

何もやる気が起きない

心を毎日読まれている感覚に陥っている

まるで誰かが小説を読んでいるみたいに頭に浮かんだ言葉が

一つ、また一つと見られている気がする。

今、必死に青い少女が私を救おうと躍起になっている。

それも全て無駄で終わる

いえ、無駄ではないのかもしれない

その行いは結果的に私を救うという表向き^{ウラナシ}の話では解決したことになる

しかし私の抱くこの思いが根本的に解決はしない

この見張られているような感覚からは永久に逃れることはできない。

私はそれを悟ってしまった

救ってもらった所でこれから何を求めて生きていけばよいのか

自分でも何も分からない

神様になったところで

良いことなんて一つもなかった

気が付くと私は寢室に寝かされていた。灰褐色の天井。思い出すだけで嫌になるほど見た薬品やそれ扱う臭い。

推測するに私は病棟にいるらしい。今、横の通路を通過していった看護師のような白衣を纏った人を見る限り、少なくとも医療関係の施設であることは間違いない。

最もそれが本当のものだと良いのですが。

疑うことすら疲れた。本物か幻覚による偽物だろうと知ったことではありません。

今でも誰かに読まれている感じがする。見せ物として読まれている気がする。

止めて……………私の心を読まないで……………

何もしていたくない、何も見たくない。元々、こんなこと望んですらいなかったのにあの男め……………。

ふとうつむいた顔を上げると、現在はいつなのか疑問を感じた。私の知る限り、記憶は叔父を殺したあたりで止まっている。

まだ、殺害したことがバレていないとすれば逃げるなら今しかない。

キヨロキヨロと辺りを見回して、時間を確認するための道具がないかを搜索する。

壁にカレンダーが貼ってあるのを確認した後、目を凝らして日にちをじっくりと伺う。

現在は……………少なくとも八月の下旬ですか。それに今は夜中。そうとう耽っているあたり、11時頃、と言ったところでしょう。

しかし驚くべきはそこではなかった。西暦を確認した瞬間、私は目を疑った。

操り人形になったときから、既に2年近くの時間が経過していたのです。叔父を殺害した記憶はこの2年が過ぎた後、ということでしょうか。

何にせよ自分は今、かなり危機的状況に陥っていることは分かる。この推測が正確ならば、先ほど言ったように私は殺人犯として指名手配されているということになる。

いつそのこと、この場で死んでしまえば楽になれるのではないか。

この町の亡霊の一部になってしまうのは気が引けます。ですがこの場に生きてしまっていることの方が数倍辛い。

あの夜で全てを失くした。心の底から愛していた父と母を奪われ、一応育ての親である叔父を自らの手によって殺めた。

唯一の友達もたった一日で失ってしまいました。

「もう………何も残っていない………何も」

独り言を溢した後、自然と目元から雪が溢れ出る。雪は次第に流れ墮ちる滝へと変わっていく。

これでは私は町の徘徊者と何も変わらない。

憎悪と喪失感に苛まれている。何が違うのです、これでは怪物と大差はありません。

私は自身にされた点滴の針を抜き、手首に突き立てた。

ごめんなさい、こともさん。あの時格好よく散ろうなどと都合の良い、私らしくもないことを考えていましたが、無様にも生き残ってしまいました。

貴方がちゃんと夜明を迎えられたのか、詳しくは知りません。今どこで何をして過ごしているのかも。

でも死んでいないのならばそれで充分です。私はもう無理だと感じていますが、生きてほしい。家族を救ったあの瞬間に生きることの素晴らしさを噛み締めていてほしいです。

遺言などおこがましく卑しいものなど私は残さない。

瞼を閉じ、刃物を振りおろそうとした。

しかし「ガラッ」という戸が開閉した音と共に、その行為は遮断された。

「あ、あの……………『神谷 ルキア』さんの部屋つてここでいいんですよね……………!?!」

よそよそしい態度で女の子が入室してきました。

年は私より下のようですが、こともさんよりは背丈が高い。それに学生服にブラウンの髪。

私はその姿に見覚えがあった。

けれど話し掛けようなどという気分にはなれません。また幻覚か、と騙されるのもうんざり。

女の子がこちらの様子に気が付いたのか、近寄ってきて近くの椅子に腰掛けた。けれど、なにやらモジモジしていて一向に話し掛けてこない。

数分間の沈黙が辺りを包み、ただただ時計が時を刻み続ける音だけが響き渡る。

チラチラと目線だけで様子を伺うも、立ち去る気配はないし、消えるような様子もあ

りません。

未だに信じられないところはありましたが、私は本物かどうか確かめるためにわざと独り言を溢した。

「……………幻覚じゃないんですね」

「え……………何か言いました……………？」

びくつとした反応を見せ、確証を得るためにこちらに問い掛ける彼女。

これでは、幻なのか現実であるかどうかすら分かりやしません。骨折り損でしたね。

「……………いえ、別に。なんでもありません」

「そ、そうですか……………。あ、あの妹をご存知だと聞いたのでそれで……………」

「……………ああ、よく知っていますよ。

妹さんには大変お世話になりました。

お礼を言わなければいけないのはこちらかと」

「い、いやそんな！私も不甲斐ないばかりに妹や貴方には苦勞を掛けてしまつて……」

私はある事に一つ気が付いた。彼女姉は現在、やけに緊迫した状況に置かれていることに。

言動を見るにまるで私と最初に町で出会ったことを覚えていないかのように立ち振舞っていました。

「……………一つ伺つてもよろしいですか」

「あ、はい。なんですか？」

「……………私達、どこかで会ったことはありませんか？」

「い、いえ……………ありませんが」

やはりそうですか。私とあの日、住宅街で会ったあの事は何も覚えていないのですね……。

草むらに追いやって私と妹さんを助けたことも、神社の奥に捕らわれていてそれを私達が助けにいったことも……。

「でもなんでそんなことを聞こうとしたのですか？

……あ、すみません。私、飼い犬を探しに出掛けた辺りから記憶がなくて……」

予想は的中した。しかし追求はしない。

何者の仕業なのかは知りませんが、これ以上突つき回しては彼女が苦しむことになつてしまう。

「……本当に大したことはありません。

そこまで気にしなくてよろしいですよ？」

「……………ありがとう。貴方が誰だか思い出せないのは心苦しいですが、感謝していただきます。」

「ありがとうございました」

感謝の言葉を残して、女の子は病室から去っていった。手元を見ると一輪の花が残されていた。

『黄色い薔薇』でした。それを見て、私はやっと安心して逝けると確信した。薔薇を手に取り、握り締めながら再び刺突の刃を突き立てました。

しかし、またもやそれは妨害された。病室から今度は看護師が顔を覗かせ、自殺を図ろうとする私の右腕を止めた。

（……………もうツ!!今度はなんですか!!?)

早く逝かせてくれないこの状況に心がモヤモヤします。

頭をクシャクシャと掻いた後に、その看護師の方へ身体を向け、用件を聞く。

………もしかして私って意外とチョロい、というヤツなのでしょいか。

話を聞く限り、どうやら用件とは私との面会らしいです。しかし、これに私は一つの疑問が脳裏に過った。

私は家族を失った。心配してくれる人なんて誰もいないはずです。だとしたら警察でしようか。

それだとしてももう、この世にいる時間も残り少ないので無意味でしようか。

すると病室に看護師に案内されて、その人は入ってきた。

男の学生でしようか。年下だということは分かりますが、それほど年齢に差があるほどではない。

黒いボサボサした髪に円形的眼鏡、私に通っている学校とは違う制服を身につけている。隣の学生が纏っているもの。一度だけ見たことがある。

しかし、会ったことは一度もない赤の他人だ。

友達ですらないのに何故………。

疑問に思った私を察したのか、その男は話し掛けてきた。口を開き、軽い口調で話し

掛けてきた。

「やあ、ルキアちゃん。

久しぶり……………ってあ、そうか。こっちだと会ったことなかったつけ。じゃあ始めましてだね」

「?????
」

唐突な展開に頭がついていかなかった。どういうことなのでしょう。何故、彼はまるで私と出会ったことがあるような口調で話すのでしょうか。

私が質問をする間もなく、彼は淡々と喋り続ける。

「いやー、探すの苦労したよ。何せ殺人犯に仕立て上げられてるもんだからさ。おまけに蜥蜴野郎に捕まってるし？」

探ってるのがバレないように情報仕入れるの大変だったよ。

あ、そうそうこともちゃんにも会ってきたよ。君のことは覚えてなかったけど助けられたことは覚えてたって。良かったね」

「いやあの、少し待って——」

「けどホントに会えて良かった。もう二度も君を失うかと思つて肝冷やしたよ。それでさ——」

「待つてくださいいッ!!!」

苛立ちで少し怒鳴るような大声をあげてしまったけど、舌が回り続ける彼を止めることには成功しました。

見たところ幻覚でもないようだし、悪い人でもなさそうなのです。だからこれ以上失礼な態度は取りたくない。

私は深呼吸をし、一旦気持ちを整える。流石に向こうも喋りすぎたと反省したのか、こちらが話し掛けるまでじつと待つてくれています。頭の中を整理して、冷静に、彼に質問を問う。

「……………色々聞きたいのは山々なのですが、まずは何故私があの男（説）に捕まっていたのを知っていたのか、そしてどうやって捜し出して、どういう意図があつて私に何の用なのかはつきり答えて下さい……………」

何から何まで聞きたいほどは山程あります。しかし、彼は少し抜けている雰囲気がある。

なので、答えてほしい部分を切り取つたように具体的に説明した。彼はウンウンと相槌を打ちながら、ゆっくりと喋り始めた。

「……………確かに聞きたいことはいっぱいあるよね。

分かった。順を追つて説明していこうか。

歩ける？出来ればこの夜の町を歩きながら説明したいんだけど」

「……………いいですよ。しかし徘徊者に襲われても私は知りませんからね？」

私はこの男に付いていく振りをして、隙を見て逃亡を図り、雲隠れをすると心に決めた。

病院から男と一緒に夜の町へと足を踏み入れました。

この一寸先が霞んでしまうほど暗いこの夜の中を迷う素振りが一切見られず、頭に地図が浮かび上がってでもいるかのように男は突き進んでゆく。

時々、徘徊者に出くわすことも当然ありましたが、彼は一般人とは思えないほどの冷静さを保ちながら、行く手を阻む徘徊者を退けています。

しかも、です。彼が「ここあれが出てくるんだっけ」と呟いた後に予期した通りに徘徊者が現れる。

相当な変人だとは思っていましたが、まさかここまでとは。何度も気が遠くなるほどここを歩いたのでしょうか。

本来、闇夜とは避けねばならない亡霊の領域。死ぬなどとほざいていましたが、彼のことに対して興味深く思ってしまったている自分がいた。

知りたい。何故、私がこのような末路を辿ってしまったのか。彼はそれを知っている気がしてならない。

しばらく進んだ後、またもや見覚えのある地に出た。

商店街です。百足の化け物が代々守り続ける、神聖な土地のはずだった場所。

今は見る陰もない、シャツター通りへと変わり果ててしまっています。商店は全て閉鎖されており、あちこちに貼り紙が貼られている。

紙にはショッピングモール建設予定地につき、急ぎ立ち退き下さい、と。

あまり思入れはない場所ですが、いざこのように変貌してしまうとなんとも表現しがたい残酷な気分へと陥ります。

「この近くにある神社を知ってる？」

「……………ええ、とても良く」

「……………あそこね、取り壊されちゃったんだ。……………ヒドイ話だよね。人の勝手な都合で先人達の財産をあかも簡単に失くしちゃってさ」

そんな罪悪感に満ちているのは私だけでなく、彼もだった。

感受性が強いのか、それとも実際にこの持ち主と何か関係があるのか。良くは知りませんが、ここは追求すべき点ではないのでしょうか。

私を知りたい答えはもつと奥深い闇の中にある。それは彼の為でも、私の為でもある。

「……………私に大事な話というのはそんな昔話だったのですか」

「ん、あ、いや！ちよつと寄つてみたかったですだけなんだ。

色々行つたつて聞いたからさ、立ち寄つたことがあるかなあ……………なんて思つてさ！……………ごめんね？何か気に触つたかな……………？」

「……………フフ、いいえ。少しからかつてみただけです」

「はいいい!?何それえ!？」

酷いなあ、謝つたのに俺ただ、からかわれただけかよお……………何この負けた感じ」

ぶつぶつと文句を言いながら分かりやすく落ち込む彼が面白くて、私は少し心が和ま

された。

よくよく考えてみれば、こんなに明るい会話をしたのは何年ぶりでしょうか。忘れていました、この感覚。

こともさんと会話をしているのも楽しかったです、それとはまた違う安心できる感情が込み上げてくる

一人で和まされていると、彼ははつと我に返ったかのように首を振り、焦った様子で喋り始めた。

「違う違う、そうじゃなくて。俺はある場所へと行きたいんだよ」

付いていく内に、この人から逃げ出す考えなどとうに忘れてしまっていた。

それくらい平然としてられる気分になっているのです。さつきまで自殺しようとしていた自分が馬鹿馬鹿しく思えてくるほどに。

そして、近くの藪を通り抜け、また見覚えのある地へとやってきた。

お墓です。私と私の友達を死してもなお、導き続けた勇敢な犬、ポロ。その亡骸を埋

めた墓。彼はそこに用があつたらしく、その場で足を止め、墓の前でひざまずき、何も言わずただ沈黙を貫き通した。

私は覚えていません。あの感触を。まだ生温かい勇者だったものを埋める心苦しき、辛さ。そして悲しさ。

こうも死を重んじるということは彼も何かあつたのでしょうか。追求したくてもできない。そんなジレンマに捕らわれつつあつた。

だが彼は何のために私をここに連れてきたのでしょうか。

もう一度屈辱の地に訪れ、私を戒めるため？それともただの好奇心による模索？分からない、分からないけれども。少なくとも彼は人を陥れるようなことはしないこととはなんとなくですが感じます。

「ここに連れてきたのはね、ルキアちゃん。彼に会って欲しかったから」

「……………彼？」

墓から立ち上がると私の背後を指差し、その男は言った。後ろを振り返ると、微かだが懐かしい気配がした。

目には見えませんが。けれど気配だけなら感じます。温かく安心できる気配。そこには何もありません。なのに触る動作をすると気持ちいい毛の感触が掌に伝わる。

「ハ、ハこれは……………」

自然と涙が溢れ出る。とことん情に脆いことが彼に伝わってしまったでしょうが、そんなことは今は気にするべきところではありません。

ようやく言い残せなかったことが彼に伝えられる。

「私と友達トモを守ってくれてありがとう。安心して眠ってくださいね」

私は感謝の言葉を残した。気持ちがあすつきりした気がします。けれど彼は私の元から離れる様子はありません。

それどころか寧ろ私を心配しているのか、悲しみの感情が伝わってくる。

幾ら撫でてでも宥められないため、どうしたものかと試行錯誤していると、男が話を持ち掛けてきた。

「相変わらず優しい性格だね。会わせることが出来てこっちも嬉しい。

……………でも君は本当にそのまままで良いのかい？

隠さなくていい。さつきまで、君は自らの命を絶とうとしていた、そうじゃない？」

先程まで私が思い描いていた構図を見抜かれ、内心少しムツとした。

変人の彼なりに心配してくれていることなのかもしれないが、私の魂は私のもの。とやかく言われる筋合いはありません。

どうせこの際です。全てを彼にぶつけてやる。何も知らないで私の気持ちを気遣うなど非常に腹立たしい。

「……………貴方には何が分かるというのですか、私の抱いているこの気持ちがい!!

貴方ねえ!! 私のことを上から言いますが、生きていたと希望があった親を二人とも失った時の喪失感が分かりますか!?

友達の瞳が潰されたと聞いた時の絶望感が分かりますか!?! 人の記憶から完全に忘れ

去られたことがありますか!? 体内から焼かれた時の苦痛が貴方に分かりますか!!」

勢いに身を任せ、彼の首根を両手で掴み、怒号を上げて問いかけた。

今まで蓄積していた憤怒と怨み、そして悲しみが限界を迎えたことによる行動なのです。彼のことを恨み殺すように虚ろの瞳で睨め付け、威圧をかける。

透明になったポロは何もしなかった。彼も知っているかのように目を背けている。そんな感覚がしたのです。

たった一晚。それだけで全てを失ってしまった。これならまだ経験をした人は多いかもしれない。けれどこれに加え、数々の拷問、恐怖、幻と味わったことは数知れない。

いい人ではありません。いい人なのですけど、被害者として私を憐れむ目がどうしても許せなかった。

それならば、虐めに会ったほうがまだマシと思えます。私は別に同情されたいわけではありません。

ただ理解してほしかった。この闇夜の世界の受け入れと喪失に蝕まれた存在^{わたし}を。

「べ、別に被害者だなんて憐れむつもりは毛頭ないよ。……は、はは」

彼はまたもや私の心情を見透かしたかのように、今私が思った言葉に対しての回答を返してきた。渴いた笑いを浮かべながら。

ますます腹立たしい。所詮、人間など口だけの生物、嘘つき。

自分とは違う、周りと違うなどとして勝手に他の個人を馬鹿にし、蔑む。救いようのない平凡者^{化け物}だ。徘徊者などよりよっほど達が悪い。

「……………命乞いはしないのですね」

「そ、そりゃ死ぬのは嫌だけど、そ、それで君が満足するなら別にいいんだけどね、死んでも」

「……………何故、そうまでして私に構うのですか。」

こんな女^{死人}など構うだけ命が幾つあっても足りませんかよ？」

「お、お化けに呪い殺されたりするより断然マシなだけだよ。それに美女に殺される

とかそうそうある話でもないでしょ？……………へへ、ウグツ!?」

首を絞める力を強くし、彼を生死の境目まで追い込む。

流石に険しい表情になり、余裕な素振りは見られなくなった。

「……………どこまで私を誑かせれば気が済むのですか！

あの男ル―シ―か神社の神様神の使いなのでしょう？

正体を言いなさい、さもなくばこの場で私は貴方を殺して見せますよ？」

更なる威圧をかけ、彼の正体を追求する。なんとなく私は察しがついていました。彼が闇が生んだ化け物達の手先なのだ。

少なくとも、数秒前までの私はそう思っていた。そう、先程までの私は。彼があんなことを言うまでは。

「げほッ……………君の……………」

『友達』の使いだと言ったらどうする？」

「ツ!？」

その言葉を聞いたとき、私の時間が一瞬止まった。

私は何も言わずに彼を掴むのを止め、そつと手を離れた。咳をして蒸せる彼。わなわなと手が震え、その場で立ち尽くす。

「……………まさか、そんなことって……………」

「ゴホツ……………ま、まあ正確に言う君の友達だった人なんだけどね。

もうその人は君のことを覚えていない」

「ど、どういうことですか……………?」

冷静さを取り戻した私は彼を気遣いながら、問いかける。

疑問だった。あの時は追求する気も起きなかったものですから、なんとも思いません

でしたが今となれば話は別。

唯一の手掛かりとなる彼を殺すところだった。何をやっているのだろうかと私は自分を恥じた。

「非情な言い方かもしれないけど、君は本来この世界に存在していないはずなんだ。

けど、色々あつて君はここに誕生してしまった。しかも、酷い目に遭わせられながらね」

「なら私は……………この世界の……………不適合者バグなのですか……………?」

「というより生きていた時間軸がズレてしまった、の方が正しいかもしれない。」

「……………そうなると、私はやはりこの世から消えるべき存在なのでしょうか」

「ああ!! いやいやいや! そんなことをしなくてもいいんだよ!

元々、そのために俺は君の元を訪れたんだし、そんな死ぬなんて言わないで? お願い」

「……………けど私は」

「大丈夫、君は連れていってもちちゃんと俺がいる。約束だ。

君を絶対に一人にはさせないし、責任は必ず取る」

「……………ありがとう」

いつぶりでしょうか。感謝の念を人前で述べたのは。少々照れくさいですが、これは私の心からの本音。恥じる必要などありません。

すると朝日が昇り、日が差し始めた。眩しい。太陽なんていつも見ているはずなのに、なんだか懐かしい。

いつしかポロの気配は墓に戻っていた。彼もようやく安心したのか、徐々に感じられる気配が薄れてゆく。

そんな消えゆく気配に私はそっと別れの言葉を告げた。

「……………貴方もありがとう、そしてきょうなら」

「いい？ルキアちゃん」

「ええ、準備はできました。いつでも構いません」

「本当にいいんだね？ここから去れば君のことを覚えている人は誰一人いなくなる。

ま、まあ俺を除く、だけどね」

「元より存在を消すことが望みだったのです。今になって後悔などしません」

胸に手を当て、私はその言葉を強く感じた。思えばつまらない人生でした。

いつしか夢も何もかもを失っていたし、自分をも見失っていました。

もう一度、この人生をやり直したいと問いかけられたとしたら、私は間違いなく否定するでしょう。

けど彼とやり直すなら、なんとかなるかもとそんな甘い期待も抱ける。朝日が訪れる

というのは本当だ。

私には永遠に夜明がこない、と言われ続けましたが、それは私を迷わすための偽りの言葉でした。夜明は来る、必ず。

生きることとはとても恐ろしい。いつ死ぬかも分からない恐怖に怯えながら日々を過ごしていく。愚かだと私は蔑んでいましたが、今になればまだマシに思えるというものです。

元より、生き物とはそういうものですし、どう生きるかは個人の自由。これは私の選択。私が選んだ夜道。

近くに光の扉が生じ、私と彼を導いている。私は彼に手を繋がれた。男性に手を繋がれたことなど初めての経験だ。

お互いに少し照れて、顔を同じタイミングで俯かせた。そして、向き直り微笑みあった。

「じゃ、行くかうか」

「ええ」

私達は光を潜り抜け、新しい明日を迎える旅へと出掛けた。

林には犬の遺体が眠っている墓だけがポツンと残された。

その墓の前には、勿忘草が供えられていた。

そして、後からやってきたポシエツトを身に付けた少女二人がそれを拾い、何も言わずに持ち帰っていった。

そういえば、名前を聞いていませんでしたね。貴方の名前は何といたうのですか？

あ、俺の名前？そうだね、まだ言つてなかつた。俺の名は………